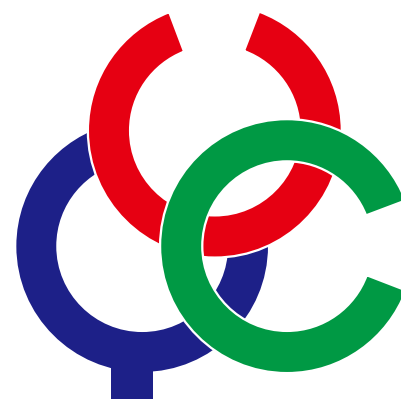


The
CONSORTIUM of
UNIVERSITIES in
YAMANASHI



生涯学習としての地域課題解決

令和4年度 学生イニシアティブ事業報告書

March 31, 2023



国際交流の イベントを図ることで ほうとうの周知と 文化体験

日蓮聖人が
身延で使用していたと
考えられる和紙を研究

忍野八海の
紅葉の美しさと
コスプレ

可視化しやすい
分かりやすい支援に
地域の人と共に
取り組む

甲府市全域の
地域活性化に
貢献

富士吉田市こそが
新しい働き方をするために
最適な場所

学生目線
だからこそできる
出合いの場を
提供

学生主体の
官民連携ビジネスの
可能性を提示

つるっ子を
世代間交流の
架け橋に!

学生の力で
地域が
生き生きとしていて
いつまでも輝く
笛吹市にしたい!

さまざまな本や
本を通した
人との出合いを
実現

生涯学習としての地域課題解決

令和4年度 学生イニシアティブ事業報告書

Contents

- 2 生涯学習としての地域課題解決
栗田 真司(大学コンソーシアムやまなし 事業部長)
- 10 ほうとうを世界へ発信
～麺で繋がる国際交流～
ふーどろーかる[山梨学院大学]
- 16 # 風林火山でcosplay
ささみ組[山梨英和大学]
- 22 地域食堂やイベント等を通じた
地域の居場所づくり
つるっ子プロジェクト実行委員会[都留文科大学他]
- 28 大学生の働き方＝
生き方の選択肢を広げて
生きる「場」としての
富士吉田の魅力を伝える
ワライラボ[山梨大学]
- 34 サポーター制度導入で難民支援
～きっかけ作りと主体的行動の可視化～
難民支援サークル Good Samaritans[山梨英和大学]
- 40 短大発の官民連携による
フルーツ6次産業化の実施報告
“つきたん 莓”コンテナ・プロジェクト[大月短期大学]
- 48 人生における活動のきっかけとなる
刺激を与える。
将来やキャリアについて
遊び心をもって明るく考える時間を!
PLAYFULNESS[山梨大学他]
- 54 本と出会うマルシェin甲府銀座通り商店街
山梨英和大学附属図書館学生協働サークルLIKE
“本のマルシェ”実行委員会[山梨英和大学]
- 60 甲府の魅力をギュッとMAP
甲府市の飲食店を通して地域活性化
今井ゼミ[山梨学院大学]
- 66 身延山における和紙研究プロジェクト
身延和紙研究会[身延山大学]
- 72 学生の力で笛吹市を輝かせたい!
盛り上げたい!
～ISAWA NIGHT WALK ～
学生団体SHINE[山梨大学他]
- 78 審査員からのアドバイス・メッセージ
- 80 令和4年度 学生イニシアティブ事業 成果発表会 告知フライヤー

生涯学習としての地域課題解決

栗田 真司（大学コンソーシアムやまなし 事業部長）

■生涯学習が注目される社会的背景

国際通貨基金（IMF）の発表した 2023 年の日本の名目 GDP は、ドルベースで前年比 0.2% 減の 4 兆 2308 億ドル（約 633 兆円）と予想されている。人口が日本の 3 分の 2 であるドイツが 4 兆 4290 億ドルで 8.4% 増となりドイツに抜かれ、間もなく 4 位に転落することになる。

名目 GDP とは、一定期間に国内で生産された商品やサービスの総額（GDP）を、その時点の市場価格で評価したものである。かつて、日本は高度経済成長によってアメリカに次ぐ世界第 2 位の経済大国の地位にあった。しかし、1990 年代以降の景気低迷により経済成長は減速し、名目 GDP は 2010 年に中国に抜かれ、世界第 3 位に転落した。現在、中国の名目 GDP は 17 兆 7090 億ドルとなり、日本に 4 倍近い差をつけている。さらに、一人当たりの名目 GDP は 2031 年には韓国に抜かれ、2033 年には台湾にも抜かれると予測されている。

また、可処分所得（給与やボーナスなどの個人所得から税金や社会保険料などを差し引いた残りの手取り収入、つまり自分で使える所得）は、2000 年以降右肩上がりとはならず、現在までほぼ横ばい状態である。物価が高騰したことを考えると実質的には減額である。2022 年の OECD 加盟国の 1 人当たりの平均年収（平均賃金）は、591 万円（53,756 ドル）だが、日本は 457 万円（41,509 ドル）で OECD 加盟国中 25 位となっている。

こうした国の状況の中、地方自治体の財政状況も悪化し、行財政改革の取り組みも進展したことによって、地方自治体の職員数や予算は、減少傾向にある。今後、人口減少や社会保障費が増大する超高齢社会の中で、地方自治体の財政赤字は、さらに膨らむことになる。その結果、公務員によるきめ細かな行政サービスは困難な時代となるであろう。地域で発生した問題を市役

所などの行政機関に相談しても、「人と予算がないから対処できない」という事態が起きることになるのである。

■主体的な住民参画

このような社会的背景によって、住民自らが地域課題の解決に立ち向かう「主体的な住民参画の時代」が到来している。地域課題解決は、行政の特権ではなく、行政は住民と協働して地域課題解決を行う、あるいは住民の活動を支援するという立ち位置となっている。地方自治法の改正で 2003 年 9 月 2 日に施行された指定管理者制度もこの流れを支えるものとなっている。

例えば、長野県下條村では、住民参加型のインフラ整備が導入され、農道や林道などの道路工事（道普請）を住民が協働して行なっている。これによって道路工事に充当する村費は、大幅に削減された。また行財政改革によって 60 数名いた村の職員を半減したが、職員が行っていた公共サービスを村民が担っている。



図 1. 1965 年当時の道普請（里やまのくらしを記録する会）

これらは、「結」、「勧進」、「普請」、「無尽」、「手間借り」、「お役」、「伝馬役」といった伝統的な相互扶助を現在の地域に対応させ、再構成したものである。こうした事業で黒字となった財政事情によって家賃が 3 万円台半ばの 2LDK の村営賃貸住宅を 10 棟建設し、移住世帯を増やしてきた。これにより 1990 年代初頭に 3,800 人余りだった人口が、2006 年には 4,200 人を超えるまでに回復した。村の合計特殊出生率も全国平均を大

きく上回っている。ここでは、子育てする新住民と旧住民が地域課題について、住民が自ら考え、自ら汗を流して対応することにより、「自助・互助・共助・公助」への理解が生まれ、住民参加のまちづくりの基礎が形成されているのである。

■地域課題に対する自助・互助・共助・公助

まちづくりや地域振興における自助とは、住民自らが問題を解決することである。地域課題に対して自分たちの主体的な力で立ち向かい、解決することは、これ自体が生涯学習活動でもある。自分が主体者となり、自分や地域に起きている課題に対応する自助は、4 つの「助」の基礎でもある。

しかし、自分だけの力で課題を解決しようとする自助には限界がある。特に、社会的弱者には他者が支援する互助が必要となる。

互助とは、友人や家族、同じ興味や目的を持つアソシエーション仲間などの相互扶助によって、地域課題を解決することである。自治会などコミュニティ（地縁型組織）の活動、ボランティアグループやサークルなど共通の目的の元に集まったアソシエーション（テーマ型組織）などがこれにあたる。この活動も生涯学習活動である。

共助とは、制度化された相互扶助のことである。医療、年金、介護保険、社会保険制度など被保険者による相互の費用負担による支え合いである。相互に支え合うという意味では互助と似ているが、共助は、費用負担が制度的に裏付けられている点が互助とは異なる。

公助は、自助・互助・共助では対処出来ないことに対して国や地方自治体が行う生活保障や社会福祉のことである。税金による負担で成り立ち、国や地方自治体のほか、警察、消防、自衛隊といった公的機関による救助・公的支援なども該当する。自助・互助・共助で支え合っている、解決ができない課題には、最後の手段として公助が対応することになる。貧困、自然災害、組織犯罪など、第三者の介入が難しい問題については、公的な判断のもと支援を行う必要がある。

下條村においては、地域における人と人との結びつき＝互助によって形成される「協働社会」の構築の必

要性が叫ばれるようになり、住民の能動的・主体的な資質・能力が育まれてきたといえるだろう。道普請によって道路が舗装されるのは、ハードウェアを整えた「街づくり」だが、道普請と一緒に活動したり、公共サービス業務を手伝ったりするのは、人的ネットワークを構築する「まちづくり」である。そしてこのソフトウェア作りが生涯学習活動でもある。

東日本大震災以降、災害時だけでなく日常的な地域の絆の再構築が求められるようになり、住民一人一人の資質・能力を伸張する自助だけでなく、仲間との互助の学習活動を通じて、地域のネットワークを住民が自ら能動的・主体的に構成していくという住民意識を育成し、これを具体的な実践につなげていくという生涯学習の重要性は高まっている。

■生涯教育から生涯学習へ

生涯教育という語は、第二次世界大戦以前に既にフランスで用いられていたようだが、国際的な場では、1965 年 12 月にパリで行われたユネスコの第 3 回成人教育推進国際委員会（International Committee for the Advancement of Adult Education）において、フランスの成人教育研究者ポール・ラングラン Paul. Lengrand によって提唱されたのが最初とされている。フランス語で *éducation permanente* と書き、「教育とは大人になるための限定された時期に行うものではなく、一生涯を通じて行われなければならない」という主旨で、その後、ユネスコの後押しもあり世界各国の教育改革の理念として採用されていったものである。当初“Lifelong Integrated Education”つまり「生涯統合教育」と英訳されていたが、次第に *lifelong education* と省略されて呼ばれるようになった。しかしこの *integrated* に含まれる「統合、統一、一貫」という意味が、*éducation permanente* 本来の広域かつ縦断的内容を示す重要な概念であった。

我が国においては、この委員会に提出されたラングランの『L'éducation permanente』と題する報告文を同委員会の出席者であった波多野完治が「社会教育の新しい方向 - ユネスコの国際会議を中心として」（ユネスコ国内委員会、1967 年）という小冊子にして解

説及び翻訳し、配付したことで一躍注目を浴びた。波多野が、「社会教育の新しい方向」という標題を付けたように、当初の生涯教育は、社会教育の一つの思潮、特に成人教育として受け止められたところもある。生涯教育と和訳したのも波多野だが、この「涯」という字は、当時まだ当用漢字ではなかった。その後、涯が当用漢字になり、それとともに生涯教育という言葉も定着していった。permanente は、永続や永久という意味であり、このため éducation permanente を英語で continuing education と訳す場合もある。また、この continuing education が発祥国フランスに逆輸入され education continuee という表記になることもある。



図 2. ポール・ラングラン



図 3. 土光敏夫

さてこの『L'éducation permanente』に対して、日本では経済界がいち早く反応した。日本経済調査協議会は、1968 年 7 月に土光敏夫（当時東芝電気社長）を委員長として「新しい産業社会における人間形成 - 長期的観点からみた教育のあり方に関する委員会」を設置した。通称土光委員会と呼ばれるこの委員会は、産業の発展とそれを支える生涯教育との連携を重点課題として協議を行い、1972 年 3 月に報告書を発表した。そこには、今後の日本の教育改革は、生涯教育を基軸に整備すべきであると提言されている。しかしこれによって、生涯教育は、職場内の再教育を意味する言葉として非常に狭く使用されることにもなった。

土光敏夫は、1980 年代に首相の指名により第二次臨時行政調査会長や臨時行政改革推進審議会議長を務め、米、国有鉄道、健康保険によるいわゆる 3K 赤字の解消、専売公社、電電公社の整理・民営化など増税なき財政改革に尽力し、日本の窮地を救った人である。そ

の土光敏夫が、生涯教育に真っ先に目を付けていたのは、日本社会にとって特筆すべきことである。

日本経済調査協議会に限らず、一般的に経済界は、リカレント教育などとの関連もあり、生涯教育に対して好意的である。これは我が国に限ったことではなく、OECD（経済協力開発機構）内の二つの機関、教育委員会及び CERI（教育研究革新センター）では生涯教育が重要な政策課題となっていることから明確である。

こうした中で、1971 年 6 月の中央教育審議会の答申において、「生涯教育の観点に立つ教育体系の整備」が提言され、生涯教育は、①明治初期の教育改革、②第二次世界大戦後の教育改革に続く第三の教育改革として位置付けられた。

またその一方で教育界においては、「教育」自体のことを「生涯教育」と呼ぶ傾向も見られた。この状況を波多野完治は、「このような二つの傾向、すなわち、一方では、職場の再教育というふうに矮小化する方向と、他方では、「生涯教育」を「教育そのもの」とみて、これを極端に「拡散」し、これによって問題の現代的意義をぼやけさせてしまう傾向。この二つの中間にはさまって、わたしの苦悩は深かった。1)」と述懐している。

こうした中でラングランの考えが『生涯教育入門』²⁾などに紹介されるなどして、徐々にではあるが、生涯教育という言葉が認知されていく。また 1970 年代後半には、生涯教育 lifelong education と並行して、生涯学習 lifelong learning という言葉が用いられるようになる。

1981 年 6 月の中央教育審議会の答申「生涯教育について」は、生涯学習を「人が生涯を通じて行う主体的な学習活動」、一方、生涯教育を「生涯学習を支援し援助する教育的活動」として概念規定し、学習の主体者の側に立つ生涯学習の重要性を示した。こうしてこれ以降は、公的文書からも生涯教育に代わって生涯学習という言葉が台頭することになる。

1984 年には、当時の中曽根康弘首相によって内閣総理大臣の諮問機関である臨時教育審議会（臨教審）が設置された。臨時教育審議会は、1984 年から 1987 年までのわずかな期間に計四次にわたる答申を行い、その後の数十年におよぶ日本の教育改革の中柱

となる三つの基本理念とその理念に基づく具体策を示した。この三つの基本理念の中に「個性重視」、「国際化・情報化など、時代の変化への対応」とならんで「生涯学習体系への移行」という柱が示され、これを具現化する方策として生涯学習審議会の設置などが提言された。

また臨教審の答申「生涯学習体系への移行」に基づき、1988 年には、当時の文部省の社会教育局が廃止され、それに代わって生涯学習局が設置された。しかもこの生涯学習局は当時の文部省の筆頭局となる。例えるならば、「入社したばかりの社員が代表取締役役に就いたような」出来事であった。

1990 年 1 月、中央教育審議会は、「生涯学習の基盤整備について」という答申を示し、生涯学習の振興に際して、国や自治体に期待される役割は、人々の学習が円滑に行われるよう、生涯学習の基盤を整備して人々の生涯学習を支援していくことである旨を提言した。

これを受けて、1990 年 6 月には、「生涯学習振興のための施策の推進体制等の整備に関する法律」いわゆる生涯学習振興法が制定され、①各都道府県教育委員会が設置する生涯学習推進センター等の整備基準、②地域生涯学習振興基本構想制度、③国及び都道府県の社会教育審議会を廃止して生涯学習審議会等を設置する規定などが示された。

その後、生涯学習審議会は、具体的な当面の重点課題として、①社会人を対象としたリカレント教育の推進、②ボランティア活動の支援・推進、③青少年の学校外活動の充実、④現代的課題に対する学習機会の充実、の 4 点を答申した。ボランティアとは、もともとは志願兵を指す言葉であり、懲役兵（draft）とは異なり「自らの自由意志」が条件となるが、この点において生涯学習と一致する。

1996 年 4 月には、生涯学習審議会の答申「地域における生涯学習機会の充実方策について」が発表されたが、ここには、学校への地域社会の教育力の活用と学校から地域社会への貢献策が具体的に示されている。特別非常勤講師制度、部活動における専門家の活用、ボランティア人材の活用、開放講座の充実、施設開放の促進、開き教室の活用など学校が地域の核となって

地域全体で教育を展開するための具体策が示された。

1996 年 7 月の中央教育審議会の答申「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について」には、学校週 5 日制導入と連動するかのように「学校・家庭・地域社会の連携」が組み込まれた。そこには、「これからの学校が、社会に対して『開かれた学校』となり、家庭や地域社会に対して積極的に働きかけを行い、家庭や地域社会とともに子どもたちを育てていくという視点に立った学校運営を心がけることは極めて重要なことと言わなければならない。」とある。また、後の教育における説明責任 accountability にかかわる「学校は、自らをできるだけ開かれたものとし、かつ地域コミュニティにおけるその役割を適切に果たすため、保護者や地域の人々に、自らの考えや教育活動の現状について率直に語るとともに、保護者や地域の人々、関係機関の意見を十分に聞くなどの努力を払う必要があると考える。」などの考えが示されている。

続いて 1998 年 9 月に発表された生涯学習審議会の答申「社会の変化に対応した今後の社会教育行政の在り方について」は、学校の教育機能と社会の教育機能の融合、いわゆる学社融合の観点に立った生涯学習社会の構築がうたわれている。

こうして生涯学習は、ラングランが初めて提唱してから二十数年で、また生涯学習として明確に定義されてからわずか十年も経ない間に我が国の文教政策の柱となったのである。それは、性急という形容さえ当てはまるような早さだった。その性急さゆえに、生涯学習という言葉は、いまだ十分に理解されてはいない。

ラングランが提唱した生涯教育とは、家庭教育・学校教育・社会教育の三分野を一貫した理念のもとに組織的に統合する教育観のことである。そこでは、小学校の教育も大学教育も生涯教育の範疇にある。しかし、我が国においては、教育関係者でさえも、生涯学習とは、学校教育を終えた後の社会教育のもとでの学習のことを意味する語と誤解している傾向がある。おそらくこれは、臨教審の答申以降、国や自治体の社会教育という部課が次々と廃止され、それに代わって生涯学習という部課が新設されたことにより、＜生涯学習＝社会教育＞という誤解が生じたためではなかろうか。

■「生涯学習のためのまちづくり」から「生涯学習によるまちづくり」へ

こうした我が国における生涯学習の変遷において、まちづくりの概念が関連してくることになる。

臨時教育審議会の1987年の第三次答申には、「生涯学習の基盤整備」の施策の一つとして、「生涯学習を進めるまちづくり」が示され、「地方が主体性を発揮しながら、まち全体で生涯学習に取り組む体制」を整備することが明文化された。これ以降、生涯学習振興策を進めるために、まちづくりという手法が注目されるようになった。

1990年代になると「生涯学習の学習成果をまちづくりに生かす」という考え方が広がっていった。1999年に出された生涯学習審議会の答申「学習の成果を幅広く生かす－生涯学習の成果を生かすための方策について」には、「生涯学習による地域社会の活性化の推進」という文言が記され、「生涯学習のためのまちづくり」から「生涯学習によるまちづくり」への質的転換が必要であり、そのためには、学習成果がまちづくりに生かされる仕組みが重要であることが示された。かつては、まちづくりが手段で生涯学習が目的であったが、まちづくりが目的で、生涯学習が手段として位置づけられたのである。

横浜市の職員としてまちづくりや街づくりを担当し、法政大学でまちづくりや地域活性化の専門家となった田村明(1987)は、「まちづくりとは、一定の地域に住む人々が、自分たちの生活を支え、便利により人間らしく生活していくための共同の場を如何につくるかということである。³⁾」と述べているが、現在では、「住民が地域課題に自主的に取り組み、自律的で持続可能な地域社会をつくること」をまちづくりと呼ぶ傾向があり、道路やハコモノといったハードウェアを重視する街づくりと区別することもある。このように人々のネットワークによって地域課題を主体的に解決するソフトウェア面の活動をまちづくりと呼ぶが、同時にこれは、「人が生涯を通じて行う主体的な学習活動」という生涯学習の内容とも一致する。またこれは、大学コンソーシアムやまなしの学生イニシアティブ事業とも

重なっている。

もう一つ、まちづくりと関連する言葉に地域活性化がある。「地域活性化」である。これについて瀬田(2010)は、「国土政策に基づく大規模でトップダウンの地域開発、他方で一村一品運動に代表される地域密着型でボトムアップの地域振興という対極にある取組で双方とも頻繁に使われてきた⁴⁾」と指摘しているが、意味内容が拡大している言葉である。

■リスキリング

経済界では、当初より生涯学習を就職後の再教育の機会ととらえる傾向があり、リカレント教育と生涯学習を同義ととらえることがあったが、昨今では、リスキリング(re-skilling)という語も台頭している。「学び直し」を意味する言葉である。

2022年10月3日に召集された第210臨時国会において岸田文雄首相は衆院本会議で所信表明演説を行い、個人のリスキリングの支援に今後5年間で1兆円を投じると表明した。

ここで言う提唱されているリスキリングは、社会や産業構造の変化によって必要になっている分野の人材を「学びなおし」によって確保する施策であり、労働者が自分のやってきた分野に関連する知識を高めてキャリアを発展させるアップスキリング(up-skilling、学び足し)とは異なり、デジタル化などで労働者の需要が高まっている分野で、これまで別の分野にいた労働者が働けるように新たなスキルを身につけることが元々の主旨である。この時、分野だけでなく、働く地域も変更になる可能性がある。

地方にとって生産年齢人口の減少による労働力不足をリスキリングが補える可能性がある。同時に地域課題解決や地域経済の活性化につながる。地場産業の担い手は高齢化し、後継者不足が喫緊の課題となっている。帝国データバンクの全国企業後継者不在率動向調査(2022年)によれば、26万6000社(全国・全業種)の65.1%にあたる約17万社で後継者がいない状況となっている。リスキリング対象の関係人口が、地域で地場産業の担い手・プレイヤーとなり、新たな発想を持ち込むことで、地域の労働力不足や地場産業の後継

者不足などの課題を解決できれば地域経済の活性化にも貢献できる。

大学コンソーシアムやまなしでは、地域課題の解決を目的としたプレイヤーを集め、お互いの情報やナレッジの集積や共有ができるプロジェクトのプラットフォームを形成することで地域課題解決を支援する。

■地域課題

生涯学習は、人のつながりやネットワーク、歴史文化の再確認などの活動をする「まちづくり」と重なっている。地域にある人的資源(ソフトウェア)を対象とする活動である。これに対して、建物や道路などのハードウェア面を整えることを「街づくり」と呼ぶ傾向がある。また衰退した地域の復興を目指す再生活動は、「まちおこし、地域おこし」と呼んで区別している。地域課題の解決のための生涯学習活動は、まちづくりの一環であり、地域のあらゆる社会的な活動が対象となる。

地域課題の内容としては、関係人口の誘致、ブランディング、子育て支援、介護など多岐にわたるが、具体的な活動としては、以下のような事例が考えられる。

- ・地域資源の発掘、地域振興計画の策定
- ・地域のマップづくり、地域のガイドブックづくり、インバウンド向けガイドブックづくり
- ・地域課題解決に向けたフィールドワーク調査
- ・地域ブランドづくり、地域商品開発、まつりやイベントの開催
- ・商店街活性化策の検討、アンテナショップの開設、二地域居住の支援
- ・ガイドツアー・ツーリズムの計画と運営、農家民宿・民泊の支援、外国人住民への情報提供
- ・空き店舗の活用、空き地・空き家の活用、マルシェ・フリーマーケットの開催
- ・環境保全活動、環境影響調査、環境教育ワークショップの開催
- ・グリーンツーリズム、ブルーツーリズムなどツーリズムの開発
- ・オリエンテーリングツアー、フードハントツアーなどの開発
- ・高齢者教室の運営、高齢者向けライフレビューワー

クショップの開催、移動手段の確保

- ・介護者支援、ダブルケアの実態把握、障害者支援
- ・地域伝承文化の保存継承、まちなか美術館の取り組み、まちなかコンサートの開催
- ・子ども食堂の運営、食品ロス削減の取り組み、宅配弁当の実践
- ・放課後子ども教室の運営、子ども地域塾の運営、中学生・高校生の居場所作り
- ・自主防災組織の設立と運用、防災マップづくり、防災訓練の計画、防災の手引きづくり
- ・SDGs推進の啓発活動、感染症対策の啓発活動
- ・男女共同参画推進活動、家族経営協定ワークショップの開催
- ・ホームレスに対するポジティブな支援策
- ・職場の心理的安全性の支援
- ・土地改良区の支援、拡大する竹林への対応
- ・ペット飼育のルールづくり
- ・ごみの原料と資源化
- ・過疎地の移動手段
- ・公共交通としてのライドシェア
- ・山間地におけるオンデマンドバス
- ・ナイトライフエコノミー
- ・トラジションタウン
- ・地域クラブ活動(中学校の部活の指導者、活動場所)
- ・コロナ禍でふくらんだ歳出構造を平時に戻すなどである。これらの中でも山梨県は、20年以上の長きに渡って空き家率全国1位となっており、地域コミュニティの存続に関わる重要な課題となっている。空き家問題については、次年度以降に課題部門として別枠でプロジェクトを募集する予定である。

■学生イニシアティブ事業

特定非営利活動法人大学コンソーシアムやまなしは、山梨県内12大学と地域社会との連携・協働組織として単位互換事業、留学生支援事業、高大接続事業、クラウドファンディングなど様々な事業を行っている。学生イニシアティブは、地域社会活動支援事業の1事業である。

域学連携事業は、大学教員が主導し学生は労働力と

なって教員の指示に従うものが一般的であるが、大学コンソーシアムやまなしの学生イニシアティブ事業は、基本的に大学教員ではなく学生が主体者となって計画し、実践する点に特徴がある。アクティブ・ラーニング支援事業でもある。2010 年度（平成 22 年度）から実施している。

(1) 問題の所在と目的

現在の地域社会には、まちづくりや地域活性化などの相互扶助に若年層（15 ～ 34 歳）の参加が得られないという課題が存在する。そして、この課題を解決しなければ将来の社会を支える中年層（35 ～ 64 歳）による持続的な地域活性化や新たな発想による展開は期待できない。

学生イニシアティブ事業は、学生がイニシアティブ（主導権）を発揮し、地域社会との連携・協働により主体的に企画・実施するまちづくり・地域活性化事業を通して、学生と地域社会との新たなつながり（ネットワーク）を生み出すことをその目的としている。

(2) 募集対象

山梨県内の 12 大学の学生に地域社会との連携・協働事業について企画提案の募集を行う。個人による活動ではなく、3 名以上のグループでの活動とする。

(3) 助成対象経費と助成金額

助成対象経費は、交通費（旅費を含む）、消耗品費、施設使用料、印刷費、保険料などであり、活動に関わる経費であれば柔軟に対応する。助成金額については、上限 3 万円として補助する。また、#やまなしクラウドファンディング(<https://camp-fire.jp/curations/yamanashi>)を活用する場合、手数料を通常の 17% から 14% に割り引く優遇措置を受けることができる。

(4) 選考方法

2022 年 6 月に申請書の書類審査を行い、申請のあった 15 プロジェクトのうち 11 プロジェクトが支援対象プロジェクトとして選定された。選定されたグループは、活動に必要な経費の補助（3 万円以内）を受けることができる。また選定されたグループは、活動経過を Facebook など公開することになる。

審査は、成果発表、活動過程について、

①問題意識（地域課題の明確化、活動目的、問題解決

の方法など）

②実践力（計画に沿った実践力、地域の人との協働力、課題発生時の改善力など）

③地域貢献力（目標に沿った実績、地域貢献力、今後の持続可能性など）

④プレゼンテーション力（表現力、構成力、コミュニケーション力など）

の 4 つの観点によって行われた。

(5) 単位取得

このプロジェクトは、山梨大学の単位互換科目「自発的教養科目（実践的キャリア形成活動）」として、各々の所属大学で単位互換認定（2 単位）を受けることができる。

(6) 山梨県との協働

この事業は、山梨県観光文化部と協働して行なっている。これによって学生イニシアティブ事業が大学の教室で行われている事業ではなく、山梨県で、そして身近な地域で行われている事業であることを県民に周知する。

■学生イニシアティブ事業成果発表会

2023 年 2 月 18 日（土）に大学コンソーシアムやまなし・地域社会活動支援事業委員会主催による 2022 年度学生イニシアティブ事業成果発表会が、山梨大学（甲府西キャンパス）M 号館 M-12 教室において開催された。当日は、62 名が参加した。

学生イニシアティブ事業は、大学生が中心となり地域課題についてグループで取り組む域学連携事業である。今年度は、2022 年 6 月に書類審査が行われ、11 グループが活動補助金（3 万円）を獲得し、2023 年 2 月まで地域社会活動を行った。コロナ禍において、活動の自粛や制限がある中で行なわれた実践活動の成果発表会であったが、すべてのグループが、活動の目的、課題解決方法、成果、今後の課題などについて、パワーポイントを用いて工夫を凝らしたプレゼンテーションを行った。

長時間にわたる審査とアドバイスをご担当いただいたのは、

金丸 滋

（株式会社アルプス 代表取締役社長・審査委員長）

曽根原 久司

（特定非営利活動法人えがおつなげて 代表理事）

樋田 洋樹（山梨県観光文化部観光文化政策課長）

船木 上次（萌木の村株式会社 代表取締役村長）

の 4 名の方々である。いずれも山梨県のまちづくりや地域振興に造詣の深い専門家の方々である。

発表後の質疑では、審査員から「地域密着の情報発信はどんな方法をとっていますか」、「この活動を通して、自分自身の考え方に変化がありましたか」、「この産物のルーツが山梨ではないことを知りとても新鮮でした。今後もこの活動を継続されますか」、などの質問や感想が寄せられました。また、どのプロジェクトが最優秀賞になってもおかしくないごく僅差の審査結果であったことも付記しておく。

なお、発表を行ったのは以下のプロジェクトである。



図 4. 成果発表会

- ・ほうとうを世界へ発信（山梨学院大学他）
- ・ささみ組（山梨英和大学）
- ・つるっ子プロジェクト実行委員会（都留文科大学）
※最優秀賞
- ・大学生の働き方＝生き方の選択肢を広げて生きる「場」としての富士吉田の魅力を伝える（山梨大学）
※優秀賞
- ・難民支援サークル Good Samaritans (山梨英和大学)
※奨励賞
- ・“つきたん苺”コンテナ・プロジェクト（大月短期大学）
- ・PLAY FULNESS(山梨大学他)
- ・山梨英和大学附属図書館学生協働サークル LIKE

“本のマルシェ”実行委員会（山梨英和大学）

・甲府の魅力をギュッと MAP（山梨学院大学）

・身延山における和紙研究プロジェクト（身延山大学）

・学生団体 SHAIN(シャイン)（山梨大学他）



図 5. 発表の様子



図 6. 表彰式

ここに示されたのは、地域のためにそうした気概を実践して示してくれた学生たちの記録である。こうした学生たちに刺激を受けて、地域のために行動してみようというアソシエーションが拡散すること、そしてそうしたグループが、将来、NPO 法人や法人企業として地域活性化の核となって地域で活躍することを期待している。

註：

- 1) 波多野完治『生涯教育論』小学館、1972 年、p.2.
- 2) ポール・ラングラン著、波多野完治訳『生涯教育入門』社会教育連合会、1971 年、Pp.286.
- 3) 田村明『まちづくりの発想』岩波書店（岩波新書）、1987 年、p.52.
- 4) 瀬田史彦「活性化から維持に向かう日本のまちづくり」『地域開発』vol.546、2010 年、pp.26-29.

ほうとうを世界へ発信

～麺で繋がる国際交流～

1 概要

創部当初からフーカルではほうとうを広める活動をしていた。昨年度、ほうとうのルーツについて調べたとき、武田信玄が「宝刀（ほうとう）」を使ってうどんを切ったからでなく、中国の『斉民要術』（6世紀前半に成立した農業書）の、饅飩から始まったと知った。昨年度の活動の報告会において、中国からの留学生がお互いの国の麺料理を作り合うような交流ができないか提案があった。

そこで、今年度、山梨県の食の魅力を知ってもらうべくほうとうの起源の1つとされている中国と関連性を持たせ、国際交流のイベントを図ることでほうとうの周知と文化体験を目指した。それは、日本のほうとうと海外の小麦粉を使った料理を相互に作り、それをお互いの言語で発信することで山梨の食を盛り上げることを目的としている。

2 問題の所存

問題点として挙げられたものは山梨県に留学している学生がほうとうを食べたことがないという意見である。山梨県出身であれば小中学校の給食や地域学習を通してほうとうに触れる機会があるが、他県または海外の留学生には触れる機会がないのである。そこで、山梨の食に対しての周知が不足していることを問題とした。

「食で山梨を元気に」というふーどろーかるの活動目的を根底に、ほうとうに触れる機会が必要であると考えた。

3 目的

1. 美味しさや野菜が多く栄養価が高いということを中国語やその国の言語で伝えることで海外の人に山梨の食文化を知ってもらう機会にする。またほうとうのルーツである中国の麺料理を知ることで隣国の中国のことをもっと知ることができるようにする。

2. 山梨のPRを国内だけでなく海外に発信し海外からの旅行客が少しでも山梨に来てもらうことや郷土料

理を若い世代に継承すること、国際的な文化交流を目的にしている。この取り組みで文字通り、麺料理で世界がつながってくことを最終的な目的とする。

4 方法

ほうとうの実演実習・中国（他の国でも可）の料理の実習・相互試食をする。

ほうとうのルーツについて知ってもらうためにパンフレットを作成する。

活動の様子をSNSにて発信する。

5 活動内容

1. ほうとうについての調べ学習

昨年度の活動の中でほうとうの起源について発見があったが、今年度はさらに情報を整理してほうとうについての理解を深めるべく調査をした。

山梨の郷土料理「ほうとうの歴史」

「ほうとう」にはさまざまなわれや歴史があり、自然発生説や、いくつかの諸説がある。ここでは、その一部を紹介する。

説1

平安時代に、こねた小麦粉を綿棒で細長く伸ばし、煮込んだうどんである「饅飩（はくたく）」の音が（はくたく→ほうたう→ほうとう）に転じて「ほうとう」になったといわれている。

説2

清少納言の「枕草子」にも「熱瓜（ホゾチ）ほうとう参らせんなどとどむるを」とあることから見ると、奈良平安時代のころ、高僧などによって、唐（中国）から日本にもたらされたと考えられる。また戦国時代に武田信玄公が、甲州に出入りした高僧（遣唐使）から伝承された陣中食で俗に「武田汁」と言われ、生麺と季節の野菜を使い味噌汁の中で煮込むというもので、手間がかからず、消化も良く栄養価も高いということから、野戦食として用いられたと伝えられている。

説3

武田信玄公自らの伝家の宝刀で、麺を細長く切ったことから、「宝刀」（ほうとう）の名が生まれたという伝説もある。紹介したほうとうの起源のなかにはどれもはじめは中国からもたらされたという説がある。

2. ほうとう試作

当初、夏に向けてほうとうの試作を開始した。温かいほうとうを提供するのではなく、暑い中でもおいしく涼しく食べられるメニューを提供しようと考えた。そこで、考案されたものがおざら風ほうとうである。さらに昨年から引き継がれた山梨ジビエの取り組みとも関連して鹿肉を利用した料理として鹿肉の天ぶらを上に乗せることで味と見た目のインパクトを追加した。冷たいほうとうをおざら風に提供することで山梨県の



図1. おざら風ほうとう



図2. ほうとう試作

ふーどろーかる [山梨学院大学]

梶本 享、伊藤 美智、廣瀬 蘭、宮本 菜摘、中島 千尋、黄芝寛

郷土料理同士を掛け合わせたレシピを考案したのである。試作で作られたほうとうは、鹿肉を乗せるアイデアとしてイベントで採用された。



図3. 鹿肉を揚げる様子

考案されたおざら風ほうとうは甲府市グルメ横丁のブラッスリー山梨でふーかるメンバーによって6月の休日に提供された。



図4. グルメ横丁で出店

ほうとうを世界へ発信

～麺で繋がる国際交流～

ふーどろーかる [山梨学院大学]

3. 当日の流れ・ほうとう作り

レシピ考案

ふーどろーかるでは以前からジビエに関する活動を行ってきた。そこで、ほうとうとジビエを結び付けたジビエほうとうを企画した。シカの天ぷらをほうとうの上に乗せて提供するレシピを考案した。

ここではほうとうの作り方の手順とイベント当日の制作の様子をまとめる。

考案されたレシピは以下のものである。

表 1. ほうとうレシピ

材料（6 人分）	
鹿肉	300g
中力粉	700g
鰹節	60g
干しシイタケ	30g
生姜	50g
顆粒だし	適量
味噌	適量
かぼちゃ	450g
長ネギ	1 本
里芋	6 個
人参	180g
食塩	適量

中力粉は少量の食塩を加えて、水でまとまる程度にこねる。30 分ほど布巾で包み寝かせる。



図 5. 中力粉に水を加えこねる



図 6. 生地を寝かせる

綿棒を用いて、打ち粉をしながら薄くのばして、うどんより幅広に切りほうとう麺を作る。



図 7. 生地を伸ばす



図 8. 麺の形に切る



図 9. 出汁をとっている様子

野菜は適当な大きさに切っておく。

シイタケと鰹節の混合だしで野菜を煮込み味噌で汁を調味する。

野菜が柔らかくなったらほうとうの麺を煮込む。

器に盛りつけてシカ肉のてんぷらを載せて完成。



図 10. ほうとう完成



図 11. 留学生による体験

ほうとうを世界へ発信

～麺で繋がる国際交流～

ふーどろーかる [山梨学院大学]

4. ほうとうを世界へ発信

完成した料理は「山梨ジビエほうとう」として提供した。鹿肉はタンパク質分解酵素を持ち低カロリーで高たんぱく、鉄分を多く含んでいてヘルシーな食材である。中国圏の人にもなじみのある生姜に浸漬させておくことで下味をつけ食べやすくする。だし汁は煮干し、干しシイタケ、かつお節など多くの食材を使用し味わい深くした。

当日のイベントには5人の参加者が来てくれた。アメリカ、香港、サウジアラビア、中国、日本からは沖縄と広い地域の出身の参加者が集まった。

ほうとうの調べ学習で発見した、説1から説3までの文章を英訳し配布した。参加者はほうとうを始めて食べる者がほとんどで興味を示していた。

留学生からの感想にはほうとうを」初めて食べておいしかったという声が上がった。感想の中には、ほうとうをラーメンの一種だと考えているものもあった。

鹿肉は食べやすく好評であった。鹿肉とほうとう初めて食べる組み合わせであり料理であったがおいしく食べれたと感想があった。

このイベントはジビエと山梨の食の両方を体験するよい機会になったと考える。



図 13. 完成したほうとう



図 14. イベントの様子

Quinn Raiston

私一番気にいたのはかばちゃで作ったスープです。そして、平たくしたラーメンは、スープの吸収もよくなります。

Donald Lo

ほうとうの制作過程を見たのは初めてです。山梨に来て2年目にして初めて山梨の名物を味わった。本当に楽しかった。

Ahmend Usman

私の国ではラーメンはポピュラーなものではありませんが、ほうとうには本当に驚かされました

Loren Huang

初めてほうとうを食べ、初めて鹿肉に挑戦しました。他の日本のラーメンと違って、スープはあっさりしているが、味もしっかりとしている

図 12. 感想

5. 活動日・試作日

5月3日	企画運営会議
5月12日	ほうとうについての事前学習
6月4日	ジビエほうとう1回目提供 (ブラスリー山梨)
6月5日	ジビエほうとう2回目提供 (ブラスリー山梨)
6月12日	ジビエほうとう3回目提供 (ブラスリー山梨)
6月18日	ジビエほうとう4回目提供 (ブラスリー山梨)
7月31日	ジビエほうとうフィードバック試作 (調理準備室)
8月4日	子ども食堂・ジビエほうとう試作 (調理準備室)
8月11日	子ども食堂・ジビエほうとう試作 (調理準備室)
8月18日	子ども食堂・ジビエほうとう試作 (調理準備室)
8月25日	子ども食堂・ジビエほうとう試作 (調理準備室)
9月8日	子ども食堂・ジビエほうとう試作 (調理準備室)
9月15日	ZOOM 全体会議
10月10日	子ども食堂・ジビエほうとう試作 (調理準備室)
10月28日	ジビエほうとう最終試作 (調理準備室)
10月29日	「ほうとうを世界に」 イベント (調理実習室 学園祭にて)
12月6日	動画撮影用ほうとう生地試作・標準ほうとう試作 (調理準備室)
12月11日	動画撮影ジビエほうとう (ブラスリー山梨)
1月19日	動画撮影ジビエほうとう (ブラスリー山梨)
1月29日	ジビエほうとう試食会 (ブラスリー山梨)
2月1日	動画素材整理
2月18日	コンソーシアムやまなしにおいて動画発表

6 成果と課題

ほうとうのイベントを実施して実際に参加者からは、「おいしかった」「山梨に来て2年目で初めてほうとうを食べた」などといった声が寄せられた。かなり少人数のイベントであったが、私たちの目的としていた山梨の食文化を知ってもらうことの一部達成できたと考える。しかし、イベント当日や準備期間には課題が多くみられた。

1つ目は、当日のイベント参加者が少なかったことである。この課題に対しては、学校との協力を強め山梨学院大学に留学している学生たちに直接的に声をかけることが必要であったと考える。また、県外からの学生もターゲットに設定して山梨学院大学や他大学と連携を図ることで食を広める場として大きな成功が得られると考える。

2つ目は作業の効率化である。イベント運営をする中で、調理に時間がかかってしまい料理の提供が遅れてしまった。このことから、試作をする際の工程の時間の確認、作業の分担といった、プロセス化が必要である。ただ提供するのではなく、スムーズなイベント進行をすることで、文化を体験する食育の場としていけると考える。

コロナ禍も収まりつつあり、これからの生活はコロナ禍以前のライフスタイルに戻っていくと考えられる。食をテーマにしたイベントも活性化していく中で今回のイベント反省点を生かして多くの人に安全で美味しい食事を提供することが更なる地域の発展と周知の拡大につながると考える。



図 15. ほうとう

風林火山で cosplay

ささみ組 [山梨英和大学]

望月 彩華、久保寺 咲、小野 美空、内山 瑞稀

1 概要

当プロジェクトは、山梨英和大学ささみ組が山梨県の伝統的なお祭りの一つである信玄公祭りからコスプレを組み合わせ、「風林火山」をテーマにイベントの開催を企画した。このイベントは11月、忍野八海で行われ、忍野村観光協会、大橋荘の協力のもと開催された。

山梨県に縁のあるものとして「風林火山」をテーマに選んだ。「風林火山」の「火」を紅葉に見立て、忍野八海の紅葉の美しさとコスプレを合わせた。コスプレにした理由は、山梨県の最大規模のイベントである信玄公祭りから、甲冑を着て街を歩く姿が、一種のコスプレのように見えたため、コスプレを組み合わせた。

撮影場所に設定した忍野八海は、山梨県南都留郡忍野村にある。8カ所の透き通った湧き水でできた池が見どころであり、これらの池は、富士山からの伏流水（富士山周辺の土地の地中に水が流れこみできたもの）からできた池だ。日本の天然記念物に指定され、世界遺産である富士山の構成資産の一部としても認定されている。



図1. 信玄公祭り

2 問題の所存

山梨県の人口は、山梨県常住人口調査結果報告書から、令和3年は約80万人で、平成11年を境にして山梨県の人口は減少し、平成14年以降20年連続で人口が減少している。また他県への移動も多く、人口流出の面からも人口減少を進ませる原因となっている。県外移動の中で、東京都への人口流出が1番多く、このことから、仕事や大学などで山梨県から東京都へ流れ

ていき、その結果山梨県の人口減少は進行していくことがわかる。実際に、身近にいる多くの友人は上記の理由で山梨県から離れている。

以上から、山梨県の問題点の一つとして人口減少、特に少子化が挙げられる。

少子化が進行していくことで、小学校や中学校の合併、それに伴う廃校や、労働力不足、介護の負担のバランス崩壊といった若者への負担の増加や、地域で若者が減少していくため高齢者が取り残されるという案件も発生している。

しかし山梨県には、多くの魅力的な場所がある。山梨県の魅力といえば、豊かな自然が多く存在していることだ。富士河口湖には富士山が顔を覗かせ、甲州市では広々とした葡萄郷が一面に広がり、フルーツ公園の上には富士山を望める温泉がある。春には笛吹市一宮町の桃畑がピンクに染まり、夏には清里の街で清涼を感じ、秋にはさまざまな場所で紅葉が見られ、冬には富士山の雪景色が見受けられるなど、豊かな自然が多くある。これらのメリットを活かして、コスプレ場所に忍野八海を選んだ。それに加え、秋の美しさを表



図2. 2022年11月12日 忍野八海

現するために紅葉の時期にスポットを当て、イベントを開催した。

3 目的

近年、山梨県では若者の県外への流出が多く懸念され、少子高齢化社会が進んでいる。そこで、一人でも多く若者が定着するということを前提に、山梨県の古くからある「風林火山」をテーマに若者のニーズに合

わせたものをふまえながら山梨県の魅力を伝えることである。



図3. 2022年10月26日(水)

4 方法

参加者を集める方法やその時に使用したアンケートは以下の通りだ。

(1) 人数を確保するための方法

①ポスターの作成

山梨英和大学内、忍野八海観光協会所に置きイベントを企画していることをアピールした。



図4. ポスター

② SNS の活用

コスプレイヤーやカメラマンたちがよく使っているSNS（主にTwitterやInstagram）を活用し、実際に

忍野八海で撮影した風景などを投稿した。(図10. 図11 参照)

③ホームページの作成

忍野八海や風林火山、富士山など山梨県にまつわることや魅力的な場所や文化を伝えるために、ホームページを作成した。ホームページからGoogleフォームへのリンクを作って貼りつけ、参加者の募集を行なった。(図12. 図13 参照)

(2) 参加者への事前アンケート

Googleフォームでは、参加者へのアンケートに「性別」と「カメラマンとしての参加かコスプレイヤーとして参加か」という質問に回答してもらった。イベントが終わった後には、実際に参加してもらった参加者に参加前と同じくGoogleフォームを用いたアンケートを行った。質問内容として、「今回のイベントの感想や意見」、「県内でのおすすめの撮影場所」、「今後このようなイベントが開催されたら参加しますか」などのような質問を行った。

5 活動内容

下見:2022年9月9日(金)

観光協会の方と顔合わせ、打ち合わせを行った。観光協会の窓口付近にポスターを掲示する許可を得て、貼り出した。観光協会の皆さんと打ち合わせをしながら当日撮影しながら回るルート考えた。忍野八海周辺の飲食店などに、イベント当日についてのことを告知し、撮影などの許可取りをした。



図5. 2022年9月9日(金) 忍野八海下見

風林火山で cosplay

ささみ組 [山梨英和大学]

* イベント当日までの流れ

Google フォームを活用して、参加者を募集した。Google フォームの質問内容に「性別」と「カメラマンとしての参加かコスプレイヤーとして参加か」という2択の質問を行った。その結果、大体 20 代～ 30 代の若者 5 名とカメラマン 2 名を含め全体で 7 名の参加者が集まった。大橋荘さんとの当日の連携について連絡を取り合い、更衣室兼休憩室の部屋数の確保や、撮影場所や歩くコース、撮影時間の確認を行った。

* イベント当日

開催: 2022 年 11 月 12 日 (土) 忍野八海にて開催。
集合時間: 10 時 30 分
撮影時間: 11 時～ 13 時 30 分
解散時間: 15 時



図 6. パンフレット

忍野八海付近にある民宿の大橋荘を更衣室兼休憩室として使用した。



図 7. 大橋荘

* コース紹介

start: 大橋荘→銚子池→お釜池→濁池→湧池→鏡池→浅間神社→菖蒲池→忍野村観光案内所→大橋荘: goal

大橋荘を発着点とし、7 つの池と浅間神社を周り撮影しながら観光もできるコースとなった。浅間神社では紅葉が一番綺麗で、宮司さんも撮影に参加した。

撮影時間は各場所 15 分から 20 分程度と短い時間であった。全員が全てのスポットで撮影をすることができ、満足のいく撮影ができた。

今回のイベントで参加したキャラクターはナルトや文豪ストレイドッグスの人気キャラクターの他、学生や魔女といったコスプレをしてイベントに参加した。

また、カメラマンの方が二人参加し、二手に分かれて撮影を実施した。



図 8. コスプレ写真 (文豪ストレイドッグス)

紅葉が終わりかけの閑散期ではあったが、土曜日開催で観光客が多かった。そのため、撮影が通行の妨げにならないようささみ組で誘導や交通整備をし、忍野八海に来た人全員が気持ちよく観光できるよう努めた。



図 9. 当日参加メンバー



図 10. twitter

イベント当日の様子などを、SNS にて発信した。主に使用したものは Instagram と Twitter の二つである。各 SNS に担当者を決め、当時の忍野八海の様子や、イベント開催の告知、忍野八海での美味しい食べ物・風景などを、公式ハッシュタグを活用して複数投稿した。

また、自分たちで作成したホームページも活用した。ホームページには下見の際に撮影した写真、コスプレ



図 12. ホームページ



図 11. Instagram

の写真を掲載。忍野八海・題名に使用した風林火山武田信玄・忍野八海から眺めることができる富士山・応募方法・ささみ組について・タイムスケジュール・お問い合わせのページを作成した。

海外への発信を試みたため、知人の留学生に力を借り、全てのページを英語・ベトナム語・中国語の複数の言語に対応したホームページを制作した。



図 13. 英語版ホームページ

風林火山で cosplay

イベント終了後に忍野八海景観維持のためにゴミ拾いのボランティアを実施した。毎朝忍野八海近隣の方が有志でゴミ拾いをしていると教えてもらったが、休日だったためゴミが出やすい状況となっていた。二つのグループに分かれ、周ったコースのゴミ拾いを実施。出店の道や飲食店があり、外で食べるスペースもあったため拾い甲斐があった。この日に収集したゴミの量はビニール袋約3袋分だった。



図 14. ゴミ拾い風景

6 成果と課題

1 成果

(1) 山梨の伝統文化と若者文化を繋げることができたこと

「# 風林火山で cosplay」という題名で活動をしたことで、山梨に古くからある文化と現代のコスプレという文化を繋ぐことができた。SNS などの投稿にも「# 風林火山で cosplay」を用いたため、多くの人に風林火山という言葉を目にしてもらえた。

(2) SNS を通じて忍野八海の良さを伝えることができたこと

ささみ組が運営する Twitter や、参加者の皆様の個人の Twitter にて当日の様子や風景を投稿し、コスプレを通じて忍野八海の良さを SNS を通じて伝えることができた。投稿する際に用いる「#○○○」という言葉葉を共通にして投稿することにより、多くの人の目に付くことができた。

(3) トラブルなく当日の進进行をスムーズにできたこと

ささみ組にとって初めてのイベント開催のため、進进行がスムーズに行えられるか、参加者の人たちが楽しく参加してまた参加したいと思えるようなイベントにできるかなどの不安点が挙がっていた。しかし、参加者の皆様や携わってくださった人の助けもあり、進进行の遅れやトラブルなどが全くなき当日を終えることができた。また、当日の進进行に加えサッカーの W 杯でも話題になったゴミ拾いを通じて忍野八海の景観維持に繋げることができた。

(4) コスプレに対し偏見なく受け入れてくれたこと

土曜日開催のため、多くの観光客が忍野八海を訪れることが予想されていた。全世代がコスプレを認識し、受容しているとは思っていなかったため、観光地でコスプレをするという懸念点があった。しかし、老若男女多くの方に声をかけてもらい、コスプレをして歩くという行為に対し偏見が存在することは無かった。また、海外からの観光客からは絶賛の声が多く、写真と一緒に撮るということもあり、日本アニメの海外人気を再確認した。

2 課題点

・ SNS を使用しての募集、海外発信が不十分だった
ささみ組全員イベント開催が初めての経験だったために、大勢の参加者の募り方や SNS の運用が円滑にできなかった。そのため周知が足りず参加者の募集があまりできなく、小規模なイベントになった。

また、近年注目されているクールジャパン制作に取り上げられている情報発信の一翼を担うために海外への発信を心がけたが、英語でのホームページ作成しかなかった。当日は海外からの観光客にたくさん声を掛けられ海外のコスプレ人気を実感したため、SNS などで海外へ向けての発信をするべきだった。

3 地域への提言

今回主催したイベントのコスプレイヤーの参加者が全員若者であった。参加後に Google form でアンケートを取り、イベントの感想や改善点を記入してもらった。今後山梨県でコスプレイベントが開催されたら参加するか？という質問に対し、ほとんどの人が交通の

便が良ければ参加したいと回答した。山梨県は車社会で有名だが、車を持っていないと不便な面が大きいと感じる。今回の開催地忍野八海も含まれるが、近くに駅がない・バスの運行回数が少ないことから車を持っていないと気軽に訪れることができない。バスの運行時間を増やせば解決するという訳でもない。ここが山梨県の課題である。

7 考察

山梨県活性化とコスプレをどのように結びつけることができるかということを念頭に置き、今回のイベントに取り組んだ。これを通して、山梨県の魅力の一つである自然に触れることができるとともに忍野八海について学ぶことや魅力を広めることができた。課題点である海外への発信について、日本語を中心に SNS を利用してしまったため海外の人たちにアピールできていないことが考えられる。しかし、簡単な日本語であれば理解できる外国人観光客が増えていることから、忍野八海という場所については SNS やホームページを通じて自然の雰囲気を感じさせることができたのではないかと考える。

その上で今回のイベントをさらに発展させるために、次の3点について考える。

(1) コスプレ文化と山梨県

信玄公祭りはもちろんのこと、山梨県にはさまざまなアニメの聖地がある。忍野八海では浅間神社にてコスプレの団体客が撮影しに来たと教えてくださった。県内にはアニメの舞台となった場所が多く存在し、その場所に多くのファンやコスプレイヤーが訪れて SNS を通じてさまざまな人へ発信していると考えられる。

(2) 観光資源としてコスプレを活かせるか

近年では全国各地でコスプレイベントが開催され、大勢の人が参加をしている。今回の撮影場所の忍野八海のように、山梨県でしか味わうことのできない自然風景がある。この風景と現代のコスプレ文化を繋げることで、昔からある山梨と新しい文化を結ぶことができる。それに加えアニメの聖地も山梨県にはある

ため、これらのスポットを会場としたイベントを行うなどすることでコスプレは観光資源として十分に成り立つ。

(3) 若者の関心を山梨に向けることができるか

6 の成果と課題の地域への提言でも記載されている通り、交通の便が良ければコスプレイベントに参加したいと若者から意見が出ている。一度に多くの交通機関を増やすことは困難のため、紅葉などの山梨県の魅力が伝わる時期を限定にして増やすことで県外の人々も観光に訪れやすくなる可能性がある。また、山梨県にしかない自然の風景は十分に若者の関心を向けることができるため、開催地を工夫すれば若者の誘致ができる。

8 引用文献

転載フリー写真素材集 (山梨県)

<http://www.uraken.net/sozai/16yamanashi/kabegami.html>

山梨県常住人口調査結果報告書

http://www.pref.yamanashi.jp/toukei_2/HP/ DATA/03jyoujyuu.pdf

地域食堂やイベント等を通じた地域の居場所づくり

1. 概要

つるっ子プロジェクト実行委員会は都留文科大学に通う学生と都留市の地域住民によるボランティアで構成されている地域ボランティア団体である。活動は2017年に始まり、現在で6年目を迎える。都留市東桂にある耕雲院というお寺を拠点に、つる食堂やイベントとうの活動を通じて「地域の人々の居場所づくり」を目標に活動している。

2. 問題の所在

地域の方や学生が交流できる居場所が少ない、これが都留市にある課題としてある。都留市には都留文科大学の学生をはじめとした多くの大学生が住んでおり、人口の9人に1人が大学生という特殊な街である。さまざまな世代が集まっているため、世代間交流を実現する土台があるのだが、実際には地域活動に関わっていない人々が多く、それほど世代間交流が活発とは言えない。2016年に都留市が実施した調査によると、ボランティア活動に関する質問で「関心はあるが参加したことはない」と答えた人が約63%おり、地域住民が都留との交流がないと感じていることが分かった。また、「大学に通うだけでは、地域と関わる機会は少ない」と感じる学生も多くいる。そこで、つるっ子プロジェクト実行委員会を通じて学生を含めた都留市民の交流をもっと活発にし、地域を元気にしたいと考え、活動を続けている。

3. 目的

活動理念として、「つるっ子を世代間交流の架け橋に！」を掲げている。これを中心に以下の2点を活動目的として日々活動を行っている。

(1) つながりや居場所の提供

地域交流があまり盛んではない都留市。さらにコロナ禍が始まったことで、より孤独感を感じるようになった。これをきっかけに、さまざまな方との繋が

りの必要性を考えさせられた。そのため、コミュニケーションから生まれる幸福感や充実感を生み出すことが重要な目的であると考えている。

(2) つるっ子プロジェクト実行委員会の活性化

地域と学生の繋がる場や子どもたちの居場所づくりという活動目的がある中で、学生がこの活動を継続していくことが社会的にどのような影響をもたらすのか、つるギフトやつる食堂、寺子屋を通して考えることができ、つるっ子プロジェクト実行委員会スタッフの自主的な活動意欲に繋げる。今年度はコロナ禍によりお祭りなどの地域のイベントが中止、縮小したことでつるっ子として新たな取り組みを行なった。それがつるっ子秋祭りである。

4. 方法

食堂やギフトを運営することによって地域の人々の交流や繋がりを生み出そうとしている。開催までの具体的な流れとしては、事務・広報・会計・調理・食後・フリーの各係に分かれ、進捗状況の発表やつる食堂・つるギフトなど活動に関わる改善点の話し合いを行ったり、開催の週では当日の変更点や全体の流れを確認したりして、当日に備えるようにしている。また、今年度は特に例年の活動に加えて新たにできることはないか話し合いを通して模索を続け、イベントの開催活動の幅を広げることに注力した。学生スタッフが考案したアイデアを出していくだけではなく、客観的に地域や社会からどのように必要とされ、影響していくのかも考えに入れながら運営を行っている。

5. 活動内容

(1) つる食堂

2017年に地域の方々の居場所を作りたいという思いから、つる食堂を開始した。つる食堂は毎月第3水曜日に開催しており、都留市内の子どもから大人まで全世代をターゲットとした地域食堂である。「子ども食堂」と聞くと、「貧困や孤食の問題を抱える子どもたち

つるっ子プロジェクト実行委員会 [都留文科大学]

保延 和佳、大竹 あやめ、神谷 沙和香、長沼 遥、今井 菜々子、宮原 佳歩、西村 愛里、中濱 采音、倉持 優人、佐野 綾香、藤井 晴、相澤 萌、石井 琴実、佐々木 悠衣、池田 七海、梶山 綾伽、楠 彩葉、葛西 朱桃、魚住 蒼太、村松 乃愛、小原 穂葉、生藤 舞、中川 千里、江口 瑚奈美、三ツ谷 明佳里、笹沼 彩花、松本 美音、萩原 美羽、木村 瞳、土田 向夏花、田中 仁人、高橋 辰弥、田村 優海、千葉 あゆみ、川原 鈴乃、森倉 玄太、大日 方碧、大平 琢人、佐々木 綾香、新井 悠夏、佐藤 里々花、上杉 沙樹、和田 晏弓、吉岡 日菜多、三尾 詞葉、小林 南、三塚 理貴、大高 健泰、山田 みのり、渡邊 瑳己(都留文科大学) 河口 智賢、小野 武彦、馬木 卓哉、幡野 小夜子、小林 茂紀、渡辺 里美(地域ボランティア)



図1. つる食堂の様子



図2. 提供している食事



図3. 季節の工作

のための場所ではないか」、「生活に困っている方が行くところではないか」という先入観が払拭できない。これでは活動目的である、「全世代に居場所を提供する」ということが困難になると考え、あえて「地域食堂」というコンセプトを掲げて開催している。ただご飯を食べるだけでなく、食後にはお菓子作りやクイズ、季節の工作などのレクリエーションを通して子どもたちと交流を深めている。今年は都留文科大学の他サークル・部活と合同でレクリエーションを実施する機会もあった。たとえば、茶道部とコラボして茶道体験を実施し、大人から子どもまで日本文化を楽しく体験することができた。また、普段入ることのできないお寺

の中で追いかけてっこをしたり、かくれんぼをしたり自由に遊ぶこともできる。食堂開催にあたって必要となる食材や衛生製品の費用の一部にイニシアティブ予算を使用した。

(2) つるギフト

コロナウイルスの影響で、感染対策の面からつる食堂の開催が困難になった時に、コロナ禍でも地域の方との繋がりを大切にしたいという思いから、つるギフトを開始した。自粛期間には自炊の回数が増加したり、人とのつながりが薄れ、孤独感を感じたりすることがあったと考えられる。これらの新たな問題に対し、

地域食堂やイベント等を通じた地域の居場所づくり

つるっ子プロジェクト実行委員会 [都留文科大学]



図4. 調理の様子



図5. 手作りのお弁当



図6. 学習支援

「食」を通じて一人一人、そして地域がつながることが必要だと考え、つるギフトが誕生した。毎月第一水曜日に開催しており、子育て世帯と高齢者を主な対象としている。手作りのお弁当や、フードバンクや地域の方から頂いた食材や乳製品などを配布している。なお、2021年には食堂を再開したが現在もつるギフトは継続しており、食堂とギフトを活動の2つの柱としている。配達にかかる交通費などにイニシアティブ予算を使用した。

(3) 寺子屋

主に土曜日、日曜日を中心に開催しており、地域の小中学生をターゲットにしている。ここでは学校の宿題やテスト勉強の様子を見て分からないところがあれば大学生が教えたり、パソコンでタイピング練習をしたりと多岐にわたり子どもたちと触れ合う時間として

いる。また、寺子屋といっても勉強するだけではなく、本を読んだりかけっこをしたり自由に遊ぶこともできるため、気軽に来やすくなっている。都留文科大学の学生は教員を目指している人が多いため、子どもたちとの触れ合いから多くのことを学ぶ良い経験ともなる上に、子どもたちにとっても、普段なかなか接する機会がない大学生と一緒に勉強したり遊んだりすることは貴重な体験となる。このように、大学生と子ども双方にとっての学びの場が寺子屋である。

(4) イベントの開催

例年行ってきたつる食堂、つるギフト、寺子屋以外にも地域の方々と交流できる機会を設けようと考え、今年度から新たにさまざまなイベントを開催した。まず、コロナ禍で地域のお祭りや行事が軒並み中止となってしまった現状を受けて、つるっ子で子どもたちに非日



図7. 影絵遊び



図8. ヨーヨー釣り



図9. 秋祭りの様子



図10. ケーキ配布

常的な楽しい思い出を残してもらいたいと考え、秋祭りを開催した。地域のお祭りをイメージし、綿あめや焼きそばの提供、千本引きやヨーヨー釣りといった遊びを実施した。このお祭りは初めての試みであったため、何を取り扱い、どのように進めていけばよいのか企画することや集客などに苦労した点も多くあったが、子どもたちは笑顔で楽しんでくれたため、学生側としてもそのような姿を見てとてもやりがいを感じる事ができた。ここでは、工作用品やイベント器具の購入にイニシアティブ予算の一部を使用した。

次に、ケーキや野菜の配布についてである。ケーキの配布に関しては、昨年4月と今年1月の2回に分けて開催し、合わせて約200個のホールケーキを配りきった。このケーキは賞味期限が迫り店頭には出せなくなったものであり、ケーキの配布を通して企業のフードロス削減しながら、家族団らんや友人と過ごす楽

しい時間を生み出すお手伝いができた。また、都留文科大学の学生にも多くの予約をいただき、つるっ子プロジェクトの存在や活動について知ってもらう機会にもなった。

そして、野菜配布については不定期で開催し、地域の農家さんからいただいた野菜をお配りした。こちらもフードロスの削減に協力することができ、地域の農家さんと住民をつなぐことで、地産地消の実現・地域の繋がりに貢献することもできたと考えている。

また、4月には活動拠点である耕雲院や道の駅つるが主催となって行った寺マルシェに参加した。このイベントは、都留市内の施設やお寺を回るスタンプラリーを兼ねていたため、都留市内全域につるっ子の活動を知ってもらう機会となった。耕雲院もスタンプのスポットだったため、つるっ子プロジェクトとしては、おにぎりの提供とクラフトコーナーでイースターエッグづ

地域食堂やイベント等を通じた地域の居場所づくり

つるっ子プロジェクト実行委員会 [都留文科大学]



図 11. 寺マルシェの様子

くりを行った。また私たちだけではなく他の出店者様もいっしょに、そのような方々と一緒に都留市全域を盛り上げることができた。子どもから高齢者までさまざまな方と関わることもできたほか、市内の他組織との繋がりを深める良い機会となった。

6. 成果と課題

(1) 成果

以上のように、今年度は例年の食堂やギフトの活動に加え、さまざまなイベントの開催を行うことができた。利用して下さったお客様からは、「毎回、一人一人が一生懸命で丁寧。参加していて気持ちが良い」、「忙しい中本当に手の込んだ料理やイベントに楽しませてもらっています。感謝します。」などといったありがたいお言葉をいただいた。このような声は活動を続けていくうえでの活力になるとともに、客観的な意見を基に活動を見直し、改善点を探ることにもつながっている。活動を通して得たことや成果は主に次の3点である。

まずは、昨年までよりもさらに幅広く、多くの地域の方と交流を深めることができたことである。今までの活動で主なターゲットとしていた子ども、高齢者だけではなく、食堂後のレクリエーションやケーキ配布を通して学生にもアプローチできた。

次に、つるっ子の活動を多くの方に知ってもらえたことで、地域ボランティアとしてお手伝いをして下さる方が増えたことである。これによって、食堂での調理やギフトの配達などがよりスムーズになったと



図 12. イースターエッグ作り

もに、つるっ子のメンバーである学生も、地域ボランティアの方と交流する機会が増え、活動も活性化されたと考えられる。

最後に、地域の子どもたちに日常生活ではなかなか味わうことのできない楽しい体験を提供することができたことである。コロナ禍で地域のイベントの機会が減少している中、つる食堂で培ったノウハウを生かしながら、感染症対策を取りながら楽しめるイベントを企画し、安心して来ていただけるような環境を整えることができた。

(2) 課題

以上のような成果を残すことができた一方で課題も多く残る。それは大きく分けて次の4点である。

1点目は集客数が伸び悩んでいることである。

縦軸はつる食堂・つるギフトの利用者数、横軸は月を表しており、棒グラフは2022年度、折れ線グラフは2019年度の利用者数を示している。コロナ禍前である2019年（折れ線）と比べて2022年度（緑の棒）を比較するとわかるように、食堂に参加して下さる方が減少しており、つるギフトに関しても予約数が減少、停滞している。そのためSNSをはじめとした広報活動を活発化していくとともに、この春にはホームページを開設するため、活動についてより詳しく発信していくと考えている。

2点目は、この活動が支援を必要としている方に届いているのかという点である。つる食堂・つるギフトでは参加にあたって経済的な制限を設けていないため、



図 13. 利用者数の推移（食堂・ギフト）

困窮している家庭の支えになっているのか、という懸念がある。地域の人々の現状を把握し、アプローチしていくためにはさまざまな難しさがあるが、今後も広報活動の拡大と共に、誰でも気軽に参加してもらえるような環境を作り、より多くの人に知ってもらうことが必要であると考えている。

3点目は、食堂での食べ残しが見られることである。副菜を中心に残してしまう子どもが毎回いるため、子どもたちが食べやすいようなメニューを考えていく必要がある。また、子どもと一緒に調理をする機会を設けるなど、食の大切さを考えてもらうようなイベントや、食育に関するクイズや絵本の読み聞かせなどのレクリエーションなどを実施していきたいと考えている。

4点目はイベントの拡大である。来年度以降もコロナの感染拡大状況を考慮しながら、キャンプ、農作業体験などの多種多様なイベントを実施していきたいと考えている。また、お寺で開催しているという特徴を生かし、座禅体験なども行いたい。体験を通じた実感をともなう学びや楽しさを得られる機会が減少している現代において、このようなイベントの開催によって、つるっ子だからこそできる体験型教育を実現していくと考えている。

7. 地域への提言

6年間の活動を通して得られた地域の方々とのつながりを大切に、引き続き食やイベントを通じた活動に力を入れるとともに、見つかった課題を改善しながら、これからも地域の子ども、働く大人、高齢者、学生というさまざまな世代間の交流を図り、地域の居場所づくりを継続していきたい。

大学生の働き方＝生き方の選択肢を広げて 生きる「場」としての富士吉田の魅力を伝える

1. 概要

このプロジェクトは、ワライラボが山梨県富士吉田市の環境や集まる人に感銘を受け、富士吉田市こそが新しい働き方をするために最適な場所ではないかと考えたことから始まった。大学生が、さまざまな働き方＝生き方をされている社会の方と交流をしながら、富士吉田市の魅力を感じられるようなイベントを開催した。ここでの新しい働き方とはテレワーク、ワーケーションなどとする。

2. 問題の所存とワライラボの仮説

富士吉田市・山梨県の現状として以下の3点が挙げられる。

1. 場所を選ばない働き方は、山梨県でも認知度・普及度が低い
2. テレワークが企業に好影響を与えるのかどうかはまだ未知数である
3. 富士山という世界的な資源を持つ富士吉田市が、まるサテ*を通して働く「場」として急成長中であることがあまり知られていない

*まるサテとは

富士吉田市まるごとサテライトオフィス構想の略であり、富士吉田市の各所にテレワーカーがいつでも仕事ができるようなワークスペースと、富士吉田市民と接点を持つためのコミュニケーションハブを設置し、それらをパッケージングすることで東京圏のオフィスワーカーが富士吉田市を安心して訪れることができる状態を作る。という世界初の試みのプロジェクトである。まるサテには学生の目線が足りていない上にこのプロジェクトの凄さ、富士吉田市の凄さを学生に伝える手段がないという話もあった。

現状から考えられる課題として以下の4点が挙げられる。

1. 企業も学生もどの働き方がいいのかわからない
2. 富士吉田が新しい働き方で働くときの最高の「場」であることが知られていない

3. まるサテの取り組みが学生に広く知られていない
4. まるサテに学生の目線がない

ワライラボは、以下の仮説を立て、大学生 230 人を対象にアンケートを行った。

仮説：オンラインに慣れている大学生にとって働く「場」としての富士吉田は魅力的な地域になるのではない

アンケートの結果は以下の通りであった。

【調査概要】

実 施：ワライラボ

調査方法：インターネットアンケート調査

対 象 者：大学生 230 人

調査時期：2022 年 6 月 18 日～6 月 23 日

あなたがコロナ禍でオンライン授業を経験した中で、理想的な大学の授業のオンラインと対面型の比率はどのくらいかお答えください。
(230 件の回答)

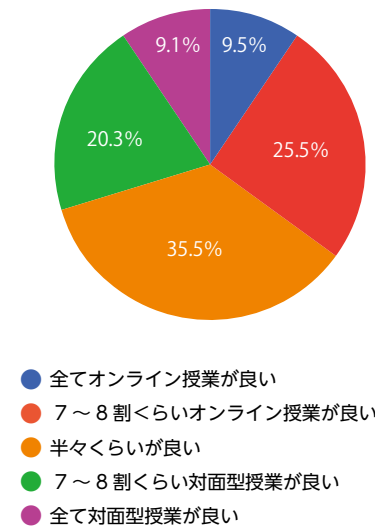


図1. 理想的な大学の授業のオンラインと対面の比率

大学生の約 70% がオンラインと対面を使い分けていて考えている。

今後、あなたが自身が就職する際、新しい働き方を取り入れた制度がある企業に就職したいですか？当てはまるものをお答えください。
(230 件の回答)

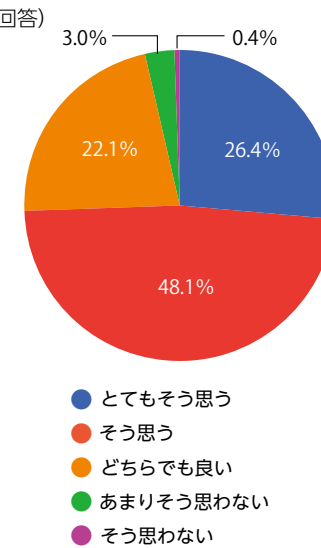


図2. 新しい働き方を取り入れた制度がある企業に就職したいか

新しい働き方に関する制度がある企業に就職したい学生が約 70% を超えている。

あなたが都心部の企業に就職した際に、リモートワーク・テレワークなどを活用して、都心には住まずに山梨県内など離れた地域や実家などに居住しても良い制度があれば、利用したいですか？当てはまるものをお答えください。
(230 件の回答)

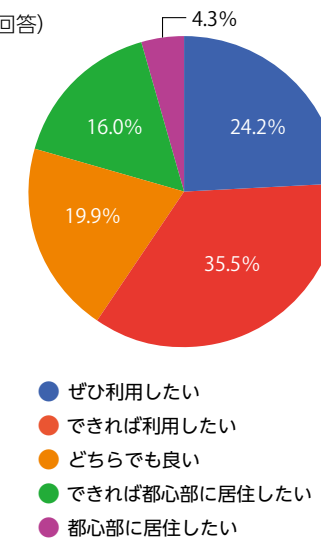


図3. 都心部の企業に勤めても制度があれば地方に住むか

都心部の企業に勤めても、制度があれば山梨や地元で仕事がしたいと考える学生が多い。

3. 目的

目的は、(1) 大学生、(2) 企業、(3) 地域、の三者すべてにメリットがある方法で、富士吉田で自分に合った働き方を考えるきっかけを作ることである。具体的に三者のメリットについては以下にまとめた。

(1) 大学生

- 仕事の経験を通じて、自分に合った働き方を考える機会を提供される。
- 企業との交流を通じて、将来の就職についての知識やネットワークを構築することができる。
- 自分に合った働き方・生き方を見つけることができる。
- 様々な大人と交流し、将来の自分の働く姿をイメージすることができる。

(2) 企業

- 多様な人材との交流を通じて、新しいアイデアやビジネスチャンスを見つけることができる。
- 地域との連携を通じて、地域の発展に貢献することができる。
- 大学生に働き方が重視されていることを知ることができる。
- 新しい働き方を導入するきっかけになる。

(3) 地域

- 多様な人材との交流を通じて、地域の魅力を再認識することができる。
- 地域の発展に貢献することができる。
- 卒業後県内に残る学生、Uターンしてくる学生、関係人口、移住者を増やすことができる。
- 新しい働き方の先進地であることを PR することができる。

大学生の働き方＝生き方の選択肢を広げて 生きる「場」としての富士吉田の魅力を伝える

ワライラボ [山梨大学]

4. 活動内容

学生や社会人に働き方の選択肢を広げるきっかけを
もたらすようなイベントを開催することを主な活動と
した。計4回のイベントを催すにあたり、資金調達
のためにクラウドファンディングを活用するなど、SNS
を使って輪を広げていった。

(1) 異業種交流会への参加

これは、ドットワーク富士吉田というコワーキング
スペースで毎月開催されている交流会である。多種多
様な働き方をされている方がいて、学生とも隔たりな
くお話しして下さった。ワライラボの活動について
発表することもあり、この異業種交流会への参加を通
して、情報収集や私たちのイベントでのゲスト出演
のお誘い、そしてお客さんとしての招待などに繋げて
いった。



図4. 異業種交流会の様子 (1)



図5. 異業種交流会の様子 (2)

(2) クラウドファンディングによる資金調達

クラウドファンディングは私たちの活動を支えるた
めに行った。具体的な資金の使い道としては、月に1
回以上通っていた富士吉田市までの交通費やイベント
開催費用である。返礼品では、自分達の活動に関係す
るものを作成し、活動を応援したいと思っていただけ
るようにページを作った。応援して下さる方の層は
社会人の方とした。Instagramを用いてカウン
tdアウンを行い、フォローして下さる方たちへのアピ
ールを行った。

しかし、Instagramではあまり多くの社会人
の方と繋がっていなかったため、より社会人の方に
活動を知ってもらうことができるようにチラシを配
布し、異業種交流会の際に社会人の方へ直接紹介す
るなどした。



図6. Instagramで行ったカウントダウン

(3) 計3回に渡るイベントの実施

I 「ワライカフェ vol. 1」 at 富士吉田
(2022年8月10日開催)

この回では、東京から富士吉田に移住されたりモ
ートワーカーの方をお招きした。お話をしていただいた
中で、「働き方は自分の成果を最大化するための手段で
あり、目的ではない」という言葉をいただいた。参加
学生からは、働き方についての認識が変わったとの声
をいただき、学びの多い会になった。山梨日日新聞社
に掲載していただいたこともあり、社会的にも影響を
与えられた。新聞をご覧になった NHK 甲府、山梨県庁、
甲府市在住で都内にお勤めのリモートワーカーの方な
どからご連絡をいただき、新しい繋がりができた。



図8. 「ワライカフェ vol. 1」 at 富士吉田



図7. 「ワライカフェ vol. 1」のチラシ

○学生交流

第1回イベントを行い、富士吉田側の学生との繋が
りがほとんどないことに改めて気づいた。ワライラボ
の活動の主なフィールドを富士吉田としており、今後
も富士吉田でイベントを行う予定があったため、向こ
うの学生と繋がりを作ることが重要となっていた。そ
こで、富士吉田市をフィールドに活動している学生た
ちによる交流会に参加させていただいた。地域の方へ
の活動の紹介や交流を行い、学生同士でも活動の発表
を行った。同じ学生が意欲的に活動していることを知
り、活動のモチベーションに繋がった。この交流会に
参加して様々な方向に活動が広がるきっかけになった。



図9. 学生交流会

大学生の働き方＝生き方の選択肢を広げて 生きる「場」としての富士吉田の魅力を伝える

Ⅱ「ワライカフェ vol. 2」at 甲府 (2022年10月28日開催)

第2回のイベントは、甲府にある県立図書館で行った。富士吉田をフィールドにして活動しているが、甲府の学生が来やすい場所でイベントを行うことにした。この回では、ハードワーカーから、自分と自分の大切な存在のために時間を使う方向へとライフシフトをされた方をお招きした。今回は、自分のこれからについて考えることをテーマにして、まずはゲストの



図 10. 「ワライカフェ vol. 2」at 甲府



図 11. 「ワライカフェ vol. 2」参加者の集合写真



図 12. 「ワライカフェ vol. 2」のチラシ

方からご自身の働き方についてお話をしていただいた後、グループディスカッションを行った。前回の反省を活かし、社会人・学生ともに多くの方に参加していただくことができた。

Ⅲ「ワライ会議」at 富士吉田 (2022年11月26日開催)

第2回から約1ヶ月後、ワライラボの最大のイベント、ワライ会議を富士吉田で行った。この回は、2名



図 13. 「ワライ会議」at 富士吉田



図 14. 「ワライ会議」参加者の集合写真



図 15. ワライ会議のチラシ

のゲストをお招きしてパネルディスカッションをしていただいた。この回では、働き方から考える現在と将来をテーマに、グループディスカッションを行い、各チーム、様々な角度から盛り上がった。第1回から第3回まで少しずつテーマを変えながら、学生のアウトプットの機会を増やしていった。話を聞いて視野を広げるのみではなく、自身のことを考えてみて気づきを得てもらえるイベントができたのではないかと考える。

5. 客観的成果

まず、イベント参加学生の気づきに関しては以下の通りである。

- 働くことに対して、「やりたいことを実現するため」「好きなことをやる」という前向きな考え方
- 外交的な方の価値観に触れることで、全く違う視点を体感できた。
- 自分らしさを出した働き方という選択もある

メンバー自身も自分と向き合い自分の考えを言語化する機会が増えた。ワライラボメンバーの気づきに関しては以下の通りである。

- 自分の人生（過去・現在・未来）について考えるようになった
- 自分たちの想いを伝えるために必要なことを考えて実行するようになった
- 生き方に丁寧に向き合っていこうと思えるようになった

また、第一回目のイベントについては山梨日日新聞での掲載、第三回目のイベントについては引き続き山梨日日新聞での掲載に加えて、NHK News かいドキ番組内にて7分間の特集を組んで頂くなど、多くの方から注目される活動となった。ワライラボの活動は、学生だけではなく掲載されたメディアを通して、多くの人に自分の働き方・生き方を考えるきっかけを与えられたのではないかと考える。

6. まとめ

「ワライラボ」は大学3年生という就活が身近になる時期に活動を開始した。将来の不安を抱えながらイベント企画・運営～SNS発信など、初めてのことばかりで時には挫けそうにもなった。しかし、メンバー5人で支え合いながら、ご協力頂いた方々のご支援もあり、多くの方々が自分自身を振り返り自分の将来、人生を考える機会を作ることができた。今後も学生が社会人から気づきを得られるための機会を作れるような仕組みづくり、または後輩に引き継いでいきたいと考える。

働き方・生き方はいつまでも変化する。その都度、自分に合うものを見つけて誰もが自分らしさで溢れた人生を送って頂きたい。

サポーター制度導入で難民支援

～きっかけ作りと主体的行動の可視化～

概要

Good Samaritans は 2018 年に発足し、難民の故郷の料理を学生食堂のメニューに取り入れ、「食」を通した難民支援「Meal for Refugees」(以下:M4R)などを行っている有志グループである。山梨英和大学は、キリスト教の精神に基づく大学であり、Good Samaritans というグループ名は、聖書に出てくる「よきサマリア人」のたとえ話から取ったものである。このたとえ話に出てくる、傷付いて倒れた人を見遇わず、手を差し伸べたサマリア人を模範とし、命を脅かされている難民に目を向けて、難民支援活動を行っている。これまで、地域の人と同じ目線で手を取り合い、難民支援の課題を共有するために参加型のイベントなどを開催してきた。これらの活動は、地域の人から参加を募り、難民問題を考えるきっかけになるよう実施してきた。そして今年度は、また別の視点で支援の輪を広げる新しい方法を取り入れた。それは、可視化できる支援の方法に挑戦し支援の力を増やすことへ繋げる「サポーター制度」という体制である。

問題の所在

Good Samaritans では、主に、難民の故郷の料理を学食で販売する M 4R を実施している。そのほかにも、難民問題について地域の人と学ぶために、さまざまな方法でイベントを実施してきた。たとえば、地域の人たちの目に留まるよう、甲府駅北口にある甲州夢小路で異国の料理のレトルト食品を販売した。また、学園祭で、難民問題について学ぶことができる講演会、写真展、難民の方を大学に招き、交流の場を持つイベントを開催したこともある。これらの活動は、難民問題を考える機会となるように、地域の人に参加してもらい、実施してきた。

昨年2月、ロシア軍によるウクライナ侵攻が始まって以来、「ウクライナ難民」という言葉を頻繁に耳にするようになった。また、昨年5月時点で、故郷を追われた難民の数が史上初めて1億人を超えたと、国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) が発表した。このような深刻な事態を受けて、より一層、難民支援活動を絶やしてはいけないと考えた。そこで、これまで積み

重ねてきたこれらの活動から、また別の視点を持ち、新しい方法で支援の輪を広げたいと考えるようになった。そのために、支援の効果が見える形にする仕組みに挑戦したいと考えた。可視化しやすい、分かりやすい支援に、地域の人と共に取り組むことを目標とし、難民支援の力を増やしていこうと決意した。このことから、サポーターと Good Samaritans が共にこれらのアクションに取り組むことによって、難民問題に向き合い、支援の輪を広げることができるのではないかと考えた。

サポーター制度の目的

サポーター制度は、可視化できる支援の方法に挑戦し、支援の力を増やすことが目的である。サポーターとは、私たちの難民支援を応援してくれる地域の人を指す。

方法

実際に、山梨に住む 10 代から 80 代の世代の人に協力してもらい、身近なところでは、本学の留学生にもサポーターの一員になってもらった。

表 1. サポーターの年代

年代	人数
10代	2
20代	8
30代	3
40代	4
50代	7
60代	3
70代	1
80代	2
合計	30人

幅広い年代の 30 人と Good Samaritans のメンバー 6 人で、共に難民問題に向き合うために、以下のような「5つのアクション」をサポーターに提示し、取り組んでもらった。

難民支援サークル Good Samaritans [山梨英和大学]

深澤 春香、古屋 愛華、増田 笑陽、ギミレマノズ、栗澤日菜、藤井 愛彩、長沼 疾風、田野口 光、牧 萌香、露芽呂アユミ

「5つのアクション」とその目的

- ①資料を読む
 - ・難民問題について学び、関心を持ってもらうため
- ②難民の故郷の料理ビリヤニを作って食べる
 - ・難民故郷の料理から、難民問題について考えるきっかけにしてもらうため
- ③寄付できる古本をまとめる
 - ・サポーターの不要な古本を集め換金し、難民支援協会へ寄付するため
- ④登録料 500 円を納入する（寄付金は任意）
 - ・私たち Good Samaritans の活動を継続させ、さらに活動の幅を広げるため
- ⑤支援に関する質問シートへ回答する
 - ・サポーターに行ってもらったアクションの振り返りから、支援の課題を見つけ、新たな難民支援の方法を検討するため

このような目的のもとで Good Samaritans が考案したアクションを、サポーターに自宅で取り組んでもらった。

活動のスケジュール

活動のスケジュールは、以下の通りである。

【7月】サポーター募集開始

Good Samaritans のメンバー 1 人につき、3 名以上集めることを目標に依頼をした。今回のプロジェクトの経緯や5つのアクションの内容、この仕組みが難民の命を守る行動につながることを伝えて、サポーターを募った。このとき、幅広い年齢層、すなわち多様な価値観を持った人たちでサポーターを構成しようと考えていたため、友人などの近い関係性の人ばかりにならないよう、留意した。

【8月】サポーターパックを配布

サポーターには、5つのアクションに取り組んでもらうために、サポーターパックを配布した。

【サポーターパックの内容】

- ・挨拶状
- ・資料1「今回の取り組みの説明書」

- ・資料2「Good Samaritans の活動紹介」
- ・資料3「難民支援について考える」
- ・ビリヤニセット（シンディービリヤニ）
- ・支援に関する質問シート（事前・事後）



図 1. 配布したサポーターパック

このサポーターパック内のビリヤニセットは、日本ビリヤニ協会のオンラインストアで購入した。また、挨拶状、資料1～3、支援に関する質問シート（事前・事後）は上図の白いファイルに同封し、これらを紙袋にまとめた。なお、このサポーターパックは、Good Samaritans のメンバーがサポーターと連絡を取り、日程調整をし、直接会って手渡しで配布をした。

【9月】支援に関する質問シートと古本、登録料（寄付金）の回収

サポーターには、8月中旬から9月上旬を目処に5つのアクションに取り組んでもらい、終了後、Good Samaritans のメールに連絡をするように促した。そして、サポーターパックを配布した時と同様にメンバーがサポーターと連絡を取り日程を調整した。その後、サポーターから支援に関する質問シート、古本、登録料（寄付金）を回収した。

【10月】支援に関する質問シートの結果を分析

サポーターから回収した質問シートに寄せられた意見をもとに、サポーターから回収した質問シートに寄せられた意見を元に、5つのアクションについて振り返った。

サポーター制度導入で難民支援

～きっかけ作りと主体的行動の可視化～

【1月】オンライン報告会の実施

サポーター制度によって得た成果を、サポーターに共有するための報告会を実施した。各アクションで振り返った質問シートの結果を 25 分ほどで報告し、サポーターとの交流の場を 20 分ほど設けた。なお、参加できなかったサポーターには、後日報告会を録画したものを YouTube で共有し、ご覧いただいた。

活動内容（5つのアクションの振り返り）

＜支援に関する質問シートへの回答＞

サポーターには、以下のような支援に関する質問シート(事前・事後)の2種類を用意し、回答をもらった。

[illegible]

図2. 支援に関する質問シート（事前）

[illegible]

図3. 支援に関する質問シート（事後）

支援に関する調査シートの回答結果をもとに、サポーターが取り組んだアクションについて振り返る。

＜資料を読む＞

サポーターには、サポーターパックに入れた3種類の資料を読んでもらった。「今回の取り組みの説明書」

では、取り組みの詳細や目的などを記載し、サポーターと Good Samaritans のメンバーが同じ目的意識を持って活動できるようにした。また、サポーターが取り組むアクションについて、いつ何をするのか、その目安となるスケジュールも記載するなど、工夫した。

「Good Samaritans の活動紹介」では、2018 年の
発足時から活動の主軸としている M4R で販売した全

6 サポーター登録料の納入

サポーター登録料500円を納入していただきます。
その他、任意で寄付金も募ります。

会費

登録料：500円

任意

自由に寄付金額を決定

※例：下記のとおりになります

例題① 当Good Samaritan会が主催
イベントの会費（サポーター会費の納入、謝金等の参加）
親戚が謝金を出し参加

9月
14日
迄

サポーター制度で難民支援 取り組みの説明書

難民支援委員会に寄付した場合
3,000円で、親上生活に参入できる難民が10人助けられます。
10,000円で、健康増進に大いに役立つ施設に1台の医療機を払えます。
親戚のいからず生活助成の支援につながります。

回収について

難民支援委員会
 ① 会費に関するお問い合わせ（※郵） ② 会費1000程度
 ③ 支援に関するお問い合わせ（※郵） ④ サポーター登録料500円 / 寄付金

①～④までの取りまとめを完了したら
下記メールへ、「取りまとめました」とご連絡をお願いします。

メールアドレス: ewm@good.samaritan.com

宛先郵便：日本（東京都中央区）（10時～18時）までご連絡ください。
お電話の上です。お手数をおかけしますが、宜しくお願いいたします。

お問い合わせは、下記メールアドレスにお願いします。
なお、こちらからの返信がメールリストにて取り分けられる場合があります。
ありますので、メールの返信をご遠慮ください。電話でも対応します。

メールアドレス: ehwa.good@gmail.com
 電話：030-9576-2834（東京・神奈）

オンライン報告書をお読みしています。（11月18日更新予定）
 詳細がまとまり次第、お知らせします。

図4. 資料1「今回の取り組みの説明書」見開き外側（背表紙・表紙）

[illegible]

図5. 資料1「今回の取り組みの説明書」見開き内側

Good Samaritans 活動紹介

Good Samaritansとは
Good Samaritansは、東京の難民支援活動の中心団体。1975年に、日本人の難民支援活動の中心として設立された。その後、1980年代後半に、日本人の難民支援活動の中心として設立された。その後、1980年代後半に、日本人の難民支援活動の中心として設立された。

MAAR (Migrant Helpline) とは
MAARは、難民支援活動の中心として設立された。MAARは、難民支援活動の中心として設立された。MAARは、難民支援活動の中心として設立された。

活動内容
MAARは、難民支援活動の中心として設立された。MAARは、難民支援活動の中心として設立された。MAARは、難民支援活動の中心として設立された。

活動の意義
MAARは、難民支援活動の中心として設立された。MAARは、難民支援活動の中心として設立された。MAARは、難民支援活動の中心として設立された。

Good Samaritans 活動年表

1975年 設立

1980年 活動開始

1985年 活動開始

1990年 活動開始

1995年 活動開始

2000年 活動開始

2005年 活動開始

2010年 活動開始

2015年 活動開始

2020年 活動開始

2025年 活動開始

図6. 資料2「Good Samaritans 活動紹介」(表・裏)

メニューを掲載した。これによって、サポーターに難民の故郷の料理について関心を持ってもらうことに繋がった。その他、これまで地域の人と共に取り組んできた、参加型イベントの一覧を掲載した。

また、「難民問題について考える資料」では、難民の定義を示したあと、難民の認定数が極めて少ないといった日本における難民申請の現状を記載した。これらは難民支援協会の情報を参考にした。また、「難民問題の解決が難しい理由」についても記載し、ここには具体的に6つの課題を挙げ、Good Samaritansのメンバーがこれまで学んできた知識をもとにし、試行錯誤を重ねて作成した。

世界と日本

世界の人口は約75億人です。これは、約100年前の人口の約2倍です。

世界のGDPは約100兆ドルです。これは、約100年前のGDPの約10倍です。

世界の平均寿命は約75歳です。これは、約100年前の平均寿命の約2倍です。

日本の人口は約1.25億人です。これは、約100年前の人口の約1.5倍です。

日本のGDPは約5兆ドルです。これは、約100年前のGDPの約10倍です。

日本の平均寿命は約85歳です。これは、約100年前の平均寿命の約2倍です。

図7. 資料3「難民問題について考える資料」 見開き外側（背表紙・表紙）

解決ための可能性

海外での企業活動の開始は、日本の生活習慣や考え方が異なる、異文化間の解決は容易ではありません。また、これらの問題に迅速に対応し、解決することも困難です。しかし、半信半疑（疑義）を感じることによって、解決の可能性も失われます。私たちならできる最高の方法を模索します。

個人でもできること

知る	異文化間の価値、価値の手段など、このように異なる価値を学ぶことが重要です。
参加する	異文化や異文化に異文化の方法を学びます。助けを必要とする人の多様性のために学びます。
広める	異文化問題に関する知識の普及や、異文化に異文化を広げます。

Message

私たちは、お互い認めあえる機会に「異文化の力」の理解を促すだけでなく、異文化を学んでいます。異文化の力に安心して頼るために学ぶことは何年か、学生の海外旅行、異文化のために、これからは必要に応じて学びます。

難民問題について考える

公益財団法人 難民支援サマリア
Good Samaritans



図8. 資料3「難民問題について考える資料」見開き内側

支援に関する質問シートで、「これらの資料を読んだことによって難民問題に対して関心が高まったか」という質問をした。その結果、35.1%の人が「とてもそう思う」、43.2%の人が「そう思う」と回答し、約8割の人が難民支援の関心を高めたことがわかる。

そして、サポーターからは、「なんとなくでしか知らなかった難民支援について深く知り、正しく理解することができた点が非常に良かった。」という意見があっ

「これらの資料を読んだことによって難民問題に対して関心が高まったか」

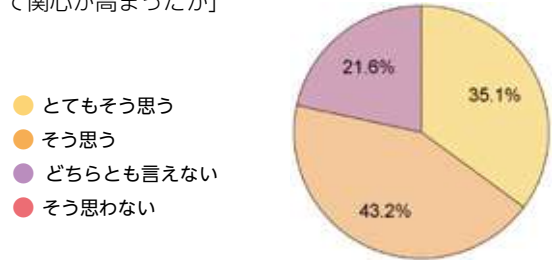


図9.「資料を読む」について支援に関する調査シートの回答

た。難民問題の解決に向け必要なことは、難民について知り、理解することである。そのため、この資料を読むというアクションによって、難民問題の解決に近づく一歩になったと考える。

＜難民の故郷の料理ビリヤニを作って食べる＞

ビリヤニとは、スパイスと肉で作る炊き込みご飯であり、パキスタンやインドとその周辺国で食べられている。Good Samaritans が活動の主軸としている M4R で何度も販売し、この料理は毎回好評を得ている。この活動のテーマである「食を通じた難民支援」をサポートにも体験してもらいたいと考え、ビリヤニキットの導入を決めた。このキットはビリヤニの素とバスマティ米がセットになっており、炊飯器で簡単に調理できるため、手軽に難民の故郷の料理を味わえる。このキットによって、難民の故郷の料理をサポートに楽しんでもらうことができた。

サポーターが作って、食べたビリヤニを写真で共有してもらった。ビリヤニという料理について自分で調べ、オニオンフライやカシューナッツなど、キットには入っていない材料を用意し、盛り付けを工夫したサポーターもいた。また、ビリヤニを家族みんなで食べ



図 10. 炊飯器で炊いたビリヤニ



図 11. 盛り付けが工夫されたビリヤニ

サポーター制度導入で難民支援

～きっかけ作りと主体的行動の可視化～

難民支援サークル Good Samaritans [山梨英和大学]

たというサポーターも多く、ビリヤニを作って食べるというアクションによって、難民問題に関心を持つきっかけが広まったことを実感した。

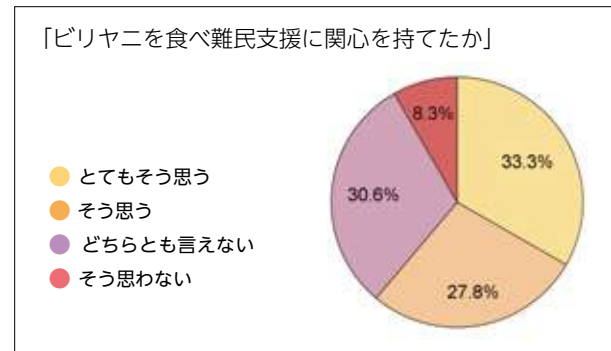


図 12.「ビリヤニを作って食べる」について支援に関する質問シートの回答

「ビリヤニを食べて難民問題に関心を持てたか」という設問については、33.3%の人が「とてもそう思う」、27.8%の人が「そう思う」と回答している。

また「難民の故郷の料理を普段なかなか口にすることがないので、こうした機会です実際に食することで、難民の人たちのことをより身近に感じることができたような気がした。」などの意見が多く寄せられた。

＜寄付できる古本をまとめる＞

このアクションでは、サポーターが不要な古本を集め、換金し、日本に逃れてきた難民の生活と法的支援をしている難民支援協会に寄付した。その結果、サポーターから集めた古本の総数は 270 冊となり、その換金額は、7,065 円となった。古本は発行してから時間が経っていると値段がつかないことが多いため、サポーターには 2012 年以降に出版されたものを集めてもらった。そのため、サポーターからは「古本回収の条件が厳しく古本を集めるのは難しい」という意見が多かった。「古本回収によって難民支援に携わっている

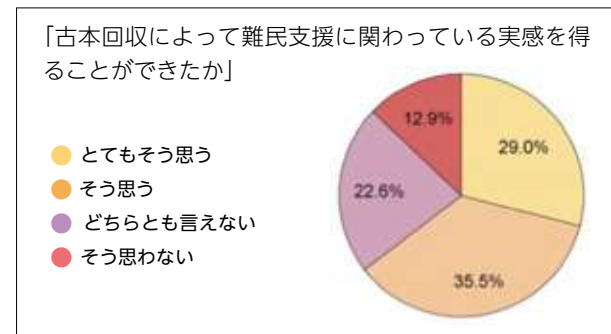


図 13.「古本回収」について支援に関する質問シートの回答



図 14. サポーターから集めた古本 図 15. 古本の総数を集計した時の写真

実感を持つことができたか」という質問に対しては、29.0%が「とてもそう思う」35.3%が「そう思う」と、6割以上の人からは良い評価を得られた。自分にとっては要らない古本が、難民支援の力に変わることに驚き、積極的に古本を集めてくれたサポーターもいた。この仕組みは、サポーターと Good Samaritans の共同作業によって支援が可能になる方法だった。実際に、サポーターと連携することができたアクションとなった。

＜登録料 500 円を納入（寄付金は任意）＞

サポーターには、登録料として 500 円の納入をしてもらった。また、登録料に加え、寄付金に協力してくれたサポーターもいた。実際にサポーター登録料は 14,000 円、任意の寄付金は 37,700 円集まり、その総額は 51,700 円となった。これらは、Good Samaritans が今後さらに幅広い支援の方法に挑戦するために活用していく。たとえば、難民支援団体への寄付や、地域の人と連携したイベントに取り組むために活用する予定である。

また、500 円という設定金額についても負担なく取り組めたという意見が多く、「サポーター登録料 500 円は適切か」の質問に対して、35.7%の人が「とてもそう思う」42.9%の人が「そう思う」と回答している。

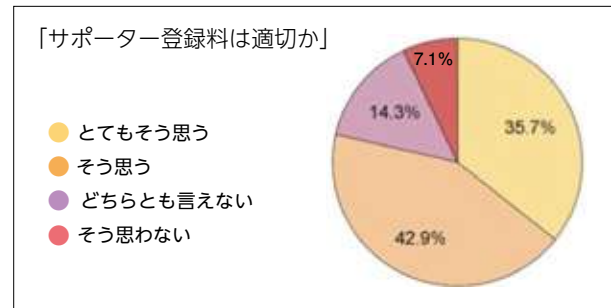


図 16.「登録料 500 円の納入（寄付金は任意）」について支援に関する質問シートの回答

サポーター制度で得た成果

サポーター制度で得た成果は、大きく分けて 3 つある。

①可視化された成果

サポーターから募った古本、登録料及び寄付金は支援の効果が見える形で（数字として）成果があった。

表 2. 可視化された成果

古 本	7,065 円
登録料	14,000 円
寄付金	37,000 円

Good Samaritans のメンバーだけでは成し得ない金額を集めることができた。この結果から、今回の目的としていた、支援の力を増やすことが、サポーター制度によって実現できたといえる。

②質問シートの回答から得た成果

（難民支援の新たな方法）

質問シートでは、難民支援に対する地域の人々の意見を知ることができた。幅広い年齢層にサポーターとなってもらったことにより、Good Samaritans のメンバーだけでは、知り得なかった支援の方法を提案してもらうことができた。下記の図のように、古着を寄付したり、ポイントを寄付したりと手軽にできる支援から、他の団体と連携するなど、サポーター皆様の情報から、多様な支援の方法や可能性を知ることができた。



図 17. サポーターから寄せられた新たな支援の方法

③オンライン報告会の成果

オンライン報告会の終了後には、取り組み全体の総括として、サポーターから意見が寄せられた。その一例として、80 代のサポーターからこのようなコメントをいただいた。

「難民受け入れや支援に関して日本は最も遅れている。私は子どもの頃戦争で家を焼かれ、避難民として、衣食住を極端に制限され 5 年間放浪しました。私は現在の難民とは比較にならない軽いものと思いますが、それでも厳しいものでした。支援に取り組む方頑張ってください。そして難民を出さないためにも、国家や民族間の対立や戦争を無くしたいものです。」

人生経験の異なるサポーターそれぞれの振り返りは、私たちでは気づかなかった視点もあり、学びとなった。サポーターから戦争体験を踏まえた感想が聞けたことは、難民が生まれる原因の一つでもある戦争にも目を向け、私たちがさらに視野を広げ、難民問題について考えることにつながった。これらの成果のように、地域の人と一緒に難民支援を行うサポーター制度の導入によって、私たち学生だけでは知り得なかった認識や考え方に、多く出会うことができた。また、Good Samaritans が活動の根幹とする、厳しい状況に置かれた人に手を差し伸べることを意味を見つめ直す機会にもなった。日頃、話題になることが少ない難民問題について、30 人のサポーターとメンバーで考え、経験や意見を共有できたことは、幅広い世代の人が協力してくれたサポーター制度の成果の現れである。このことから、サポーター制度は地域の人と共に難民問題について考える仕組みとして有効であることが、今回の挑戦でわかった。

課題

来年度はさらに多くの地域の人に難民問題に関心を持ってもらい、また、新たな支援の方法にも挑戦したい。そのために、今回行ったサポーター制度の人数を増やし、5 つのアクションの内容に古着の寄付などを加えたりしながら試行錯誤し、一つの支援の方法（仕組み）として定着させることが課題である。今後も、地域との関わりの中で生まれる学びを大切にしながら、地域の人とより連携を深めていき、共に難民支援に取り組んでいきたい。

短大発の官民連携による フルーツ6次産業化の実施報告

～“つきたん苺” コンテナ・プロジェクト～

要旨

大月市にはブランド化された生産物が少なく、儲ける農業事業者が不足している。これを解決するために、苺コンテナを大月短期大学に設置し、専門ゼミ学生のプロジェクトによるいちご栽培の実証を行う。当プロジェクトは、生産、イベント、クラウドファンディング、プロモーションの4つのチームを編成するものであった。この活動の成果から、学生主体の官民連携ビジネスの可能性を提示する。その具体的な中身は、事業開発として「“つきたん苺”をブランド化」と「苺コンテナのパッケージ化」であり、組織開発の短大発株式会社化である。

1. はじめに

本稿では、専門ゼミにおいて短大で栽培するいちごの生産管理、商品開発、資金調達、プロモーションを行い、ブランド化を目的とするプロジェクトの活動報告について述べる。このプロジェクトに至った経緯は、笛吹市のいちご農園生産者（石和いちご館青柳）が、特製コンテナ内においていちごの栽培方法を確立した。その第一号コンテナを大月短期大学のグラウンドに設置し、学生主体のいちご栽培を開始することとなった。クラウドファンディングやイベントを通してプロモーションを行った結果、地域ブランドとしての付加価値を高めていき、学生主体のビジネスを官民連携の中で展開することで一つの事業モデルを示していく。

本稿の展開は、2章でプロジェクトの目的と企画の概要について明らかにし、3章でプロジェクト推進のための知見獲得に関わる調査報告と題しクラウドファンディングと6次産業の事例について述べる。そのうえで、4章ではプロジェクトの実施と評価を行う。コンテナ生産やイベントやクラウドファンディング、SNSを通したプロモーションの実施報告書を作成し添付する。最後に5章でまとめを行う。

2. プロジェクトの目的と企画の概要

2.1 プロジェクト化の背景と目的

当プロジェクトがスタートした背景には、地域問題として大月市にはブランド化されたフルーツ等生産物が少ないことがあげられる。したがって、稼げる農業事業者が不足している。そこで、第一号コンテナを大月短期大学の自治会室前に設置し、学生主体のいちご栽培、すなわち“つきたん苺”コンテナ・プロジェクト苺栽培・学生編とし、大月市の新たな地域ブランド作りの支援と学生起業支援をクラウドファンディングで実施する。

このプロジェクトの目的は”つきたん苺”“のビジネスモデルをパッケージ化することである。そして、“苺”コンテナの第2号の市内展開を目指す。そのために、まず短大ブランドの第1号“苺”コンテナによる栽培方法を確立させる。具体的にはコンテナ栽培の試運転からの生産手引書の作成と、複数の学生が関わる栽培のシフト管理の確立をする。そして、クラウドファンディングを活用したサービス化・商品化をする。具体的にはお菓子作り教室イベントの実施やブランド化された“苺”菓子の商品化を目指す。

2.2 プロジェクト発足時における企画の概要

クラウドファンディングは11月に実施した。このクラウドファンディングは、コンテナ苺栽培開始前に、資金調達とプロモーションを兼ねて企画した。返礼品としてはいちごの収穫、資金用途はロゴデザインの製作費用やコンテナペインティングの原材料費などとした。1月から2月にかけてリターンを行った。また、「いちご栽培」やその収穫販売、クラウドファンディングの体験を通じて、ビジネス化にむけた企画書や活動報告書を作成した。同じく1月に「いちご」収穫後のテスト販売イベントの企画を行った。収穫タイミングまたは作付け開始タイミングに合わせたセレモニー的なイベントを企画し、大月市プロモーションに貢献するためである。それと同時に、地域住民や入学者・受験者に向けた本学への認知度や理解度を高める。

つきたん苺コンテナプロジェクト [大月短期大学]

望月 結衣 柳池 紋花 江本 祥 関口 颯希 坂本 侑奈 竹内 凱威 中沢 遥 坂尻 千弥 城内 彩希 小川 弘哲 新堀 朱人
征矢 このみ 丸山 紗佳 小林 彩恵 小林 蓮 近藤 香月 近藤 春乃 渡辺 陽菜佳 篠原 柊惟 湯崎 佑太

表1. 4つの業務報告書とゴール

	中間ゴールのアウトプット (2022 年 12 月末)	最終ゴール (2023 年 12 月末)
①コンテナ苺生産	☐ トライアル生産における作業手引書 ☐ 収量・コスト計算	☐ コンテナ苺・生産手引書 ☐ 年間収支モデル (原材料・工数・レンタル料・苺収量)
②6次産業化ビジネス	☐ お菓子作り教室実施報告 ☐ ビジネスアイデア	☐ スイーツ試作品の販路開拓 ☐ 収穫イベントの収益化
③資金調達・収支計算	☐ 第1回C F (18 万円規模) 実施報告書	☐ 第2回C F (100 万円) 実施報告書 ☐ コンテナ2号機の収支計画
④経営管理・組織体制	☐ “つきたん苺” デザインロゴ ☐ SNS 活動報告書	☐ 官民連携組織のガバナンス企画書 ☐ 株式会社等の法人化企画

2.3 プロジェクトゴール

プロジェクトの最終ゴールは、調査と実証に基づく「官民連携による事業モデル」の構築にある。その事業テーマは、「大月短大発の“つきたん苺”6次産業化」であり、地域ビジネスの創造である。そして、当事業モデルは、4つの実行項目、すなわち「コンテナ苺生産」、「6次産業化ビジネス」、「資金調達・収支モデル」、「経営管理・組織体制」の業務報告書をもって明示していくものである。

しかしながら、筆者らは、2023年3月をもって本学を卒業することから、本レポートにおいてこの最終ゴールに到達することはできない。したがって、表1に示した中間ゴールまでをまとめ、後輩らに最終ゴールへのバトンを渡すことになる。このことを念頭に、中間ゴールのアウトプットは、4章にて本調査レポートのまとめとして解説する。

2.4 6次産業化の定義

当プロジェクトは大月市に稼げる農家を創出することを目的に活動を始めた。そのために、事業の6次産業化を目指すのであるが、これを本節で改めて定義づけておきたい。

6次産業化とは、1次・2次・3次それぞれの産業を融合することにより、新しい産業を形成しようとする取り組みのことである（農業ジョブ,2022）。簡潔に言えば、生産者（1次産業）が加工（2次産業）と流通・

販売（3次産業）も行い、経営の多角化を図ることともいえる。6次産業の「6」は、1次・2次・3次のそれぞれの数字を掛け算したものであり、産業の融合を図り、新たな価値を生み出すことを意味している（農業ジョブ,2022）。近年、健康志向の高まりとともに「農家レストラン」や「体験農園」が注目を集め、地域の素材を生かした人気商品が多数登場している。（1次産業）だけでなく、加工（2次産業）・販売（3次産業）を取り組む動きが広がっている。

この6次産業化のメリットとして、所得の向上があげられる。1次産業のみでは得られなかった所得が得られたり、農作物に付加価値を付けて販売したりできるようになるため、所得の向上が見込める。また、農作物を市場に出荷するのに比べ、価格変動の幅が小さく、収入が安定するメリットがある（農業ジョブ,2022）。また、所得の向上や、雇用の創出などにより、地域活性化が期待できる。6次産業化によって、生産物の価値を向上することができる。



図1. 6次産業化のイラスト 出典：農業ジョブ（2022）

短大発の官民連携による フルーツ6次産業化の実施報告

～“つきたん苺” コンテナ・プロジェクト～

3. プロジェクト推進のための 知見獲得に関わる調査報告

3.1 クラウドファンディングの可能性

当プロジェクトの推進エンジンが、クラウドファンディングである。そこでプロジェクトメンバーは、クラウドファンディングの基本情報やスキルを獲得するために、経験がある他大学生との情報交換や、クラウドファンディング研修会に参加した。そこで得た情報を本節で調査報告として以降に記していく。

まず、クラウドファンディングとは「群衆（クラウド）」と「資金調達（ファンディング）」という言葉を組み合わせた造語で、インターネットを通して不特定多数の人々から資金を調達することである（CAMPFIRER,2022）。資金調達というと、一般的には金融機関や投資家からお金を借りる方法が考えられる。しかし、クラウドファンディングはこのような資金調達にはない「手軽さ」や「拡散性の高さ」、「テストマーケティングにも使える有用性」という特性があり、新たな資金調達の仕組みとして注目されている。中でも、新しいモノやサービスのアイデアや世の中の問題を解決したいという想いを持つ人は“起案者”として発信することができ、それに共感した人は誰でも“支援者”として支援できる、双方にとっての手軽さがクラウドファンディングの最大の特徴である。

次に、クラウドファンディングのメリットとデメリットについてである。起案者側のメリットとしては、資金調達が難しかったものの調達可能性が広がることと、ユーザーの反応を製品が市場に出回る前に知ることができることである（CAMPFIRER,2022）。一方デメリットとしては、目標金額に達成せず資金調達できない可能性があることである（CAMPFIRER,2022）。そのためクラウドファンディングの実施前に、プロジェクトの成功率やどのくらい支援をしてもらえるか、資金を集める方法は他にないか、などの情報を調べておくことが重要である。当プロジェクトは、学生主体の活動であることから、従来型の資金調達は使えない。まさに、クラウドファンディングは、唯一無二の調達方法であり、市場の反応を測定するのに適した手法であると言える。

一方で、支援者側のメリットとしては、作り手の顔

が見えることにより双方向のコミュニケーションに繋がることがあることである（CAMPFIRER,2022）。起案者はプロジェクトの公開前にクラウドファンディングサービス提供サイトから審査を受けているため、透明性のある仕組みの上でプロジェクトを公開している。また、プロジェクトページや活動報告、SNSの発信を行っており、支援者はそれを見ることができるといえる。こうしたことから、学生活動や地域を応援したいというニーズに応えるという点においても、当プロジェクトによるクラウドファンディングは理にかなっていると言える。一方、デメリットとしては、プロジェクトが目標金額に達成した際も、予期せぬトラブルでリターンが提供されない可能性があることである（CAMPFIRER,2022）。そのため、このようなケースに対応するための保証サービスが提供されている。

クラウドファンディングの種類は、資金や支援者へのリターン（特典）のあり方によって6つに分類される（CAMPFIRER,2022）。当プロジェクトにおいては、購入型クラウドファンディングという方法をとる。この方法では、起案されたプロジェクトに対して支援者がお金を支援する。支援者はそのリターンとしてモノやサービスを得るとい仕組みのクラウドファンディングである。支援者は起案者がリターンとして設定した商品やグッズ、サービス、サービスを購入するような感覚で支援することができる。購入型クラウドファンディングには、「All-or-Nothing 型」と「All-In 型」という2種類の方法がある。「All-or-Nothing」は、募集期間内に目標金額を達成した場合のみプロジェクトが成立する。「All-In」型は、目標金額に達していなくても、一人でも支援者が出ればプロジェクトの成立が認められる。

当プロジェクトでは、クラウドファンディングサイト「CAMPFIRE(キャンプファイヤー)」でプロジェクトを掲載し、資金調達を行った。クラウドファンディングは、資金調達以外にも、テストマーケティングやメディアとして活用することができるという特性をもっている。そのため、これから開発する製品の反響や妥当な販売価格などの調査や、お菓子作り教室イベントや製品を紹介してPRに繋げることも期待できる。

3.2 6次産業化の事例研究

当プロジェクトで6次産業化はどのようなビジネスになるのか。これを企画していくために、6次産業化の事例として、石和いちご館青柳を取りあげる。石和いちご館青柳では、フルーツの通信販売とフルーツ狩りを行っている。通信販売では、発送日の朝に摘んだ新鮮ないちごを農家が手作業で梱包を行い発送している。このいちごは、9つの品種の違うものを栽培し、旬なものを提供している。また、いちご狩りでは13の品種のいちごを栽培し、旬ないちごを食べ比べすることが体験できる。さらに、いちご狩りが体験できるハウスの近くには農家直営のカフェを設置し、旬なフルーツを使ったパフェやジャムの販売と、フルーツの直売を行っている。

また、それらを広める手段として、SNSを使用している。独自のホームページや、インスタグラムの活用で、栽培段階や実ったフルーツのPRをしている。この事例による6次産業化の内容として、農業の第1次産業が、農家直営カフェで食品加工をした商品の販売や、農家が自分で流通販売を行い業務展開している。独自のPR活動を含むこのような業務の多角化の6次産業化を行った。

この事例の成功要因は3つある。1つ目は、流通販売を直接自社で行っていることである。発送日の朝に摘んだ新鮮なフルーツを手作業で梱包していることと、石和の広域な土地を活かして、より多くの品種を栽培し、他社には真似のできない多品種の栽培によって他社との競合優位性を確立できた。この他社には真似できない独自の流通販売を行うことによって、付加価値を高めることに成功したのである。

2つ目は、ハウスの近くに農家直営カフェを設置することで、付加価値が上がることがあげられる。農家直営カフェのように農家が自分で生産した農作物などを自分で調理して、レストランやカフェとして振る舞う形態のことを「農家レストラン」という。その魅力の一つとして、提供される料理が、素材を作った人が調理して作られた料理であることがあげられる。安心安全で、ほかの誰にも絶対に作れない、そんな料理が食べられるのが「農家レストラン」である。そして、普段は出会うことのない生産者と交流するキッカケにもなるので、食べる人はより「食」を楽しむことがで

きるようになる。生産者側も、直接消費者においしさを伝えられる魅力、消費者の評価を直接受けることができる魅力、付加価値を高めて提供できる魅力がある。また、農業経営をするうえの大きな魅力として廃棄野菜を有効活用できることがあげられる。味や品質には問題ないが、ちょっとした傷が付いている農作物や、形や大きさが規格外でそのままでは卸売できない農作物でも調理することで新たな価値を付加し有効活用することができる。そのため、廃棄野菜も新たな商品として利益を生み出し成功することができた。

3つ目は、SNSの活用によって、実際に栽培されているフルーツや生産者を見られることによって、安心感が生まれ、人柄が見えると親近感につながるため訴求効果があることがあげられる。手作業で通信販売を行っている点も安心感があり、より購買意欲が高まった。また、このSNSでは、その日の収穫状況や、販売内容を高頻度で更新している。そのため、閲覧者は、日によって違う旬なフルーツを知ることができ、より深く情報を得てから購入することができるため、購買価値が高まる魅力がある。これは、生産者が自ら流通販売を行っているからこそ実現できることであり、付加価値の増加につながっている。

以上の3点の成功要因から、6次産業化を行ううえで食材の有効活用と、商品をPRすることの重要性が認められた。

4. プロジェクト実施報告と今後の地域戦略

4.1 専門ゼミによる活動体制

本章では、前述「2.3 プロジェクトゴール」で計画した実施内容をレポートするとともに、そこから構想する地域戦略を提示する。まず実施内容として、その期間は、2022年11月4日から2023年1月31日の約3か月である。

専門ゼミ生20名全員が4つのチームに分かれて活動を行っている。各チームは5名で編成し、主に週1回のゼミ授業が実働の場となるが、実際には、他の授業の合間も課外活動をしている。このプロジェクト体制は、筆者らが卒業する2023年3月には解散するが、6次産業化による事業化と、それを運営する官民連携体制の礎となることを意識している。

短大発の官民連携による
フルーツ6次産業化の実施報告

～“つきたん苺” コンテナ・プロジェクト～

つきたん苺コンテナプロジェクト [大月短期大学]

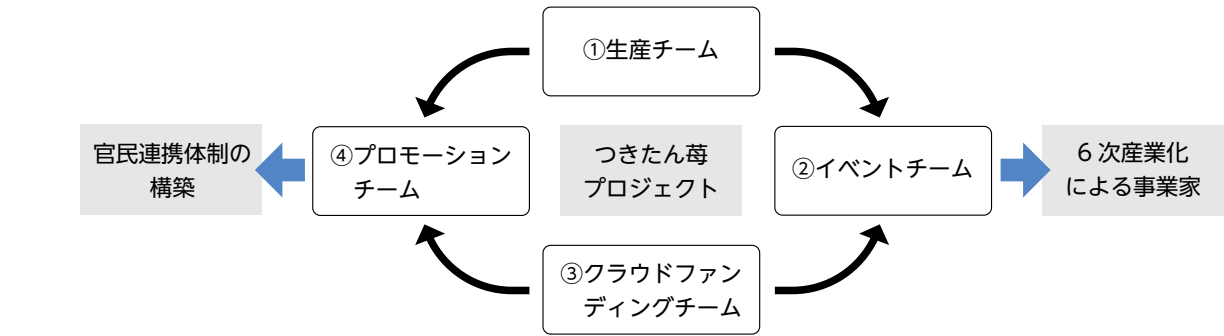


図2. 専門ゼミによるプロジェクト体制 筆者作成

それぞれの4つのチームにおける活動内容の詳細は、ゼミ内で報告会がなされる予定である。ここでは次節以降において、4つの活動の概要を示し、その検証をもって2023年度以降のビジネス展開の方向性を示唆していく。

4.2 活動①：コンテナ苺生産チーム

生産チームは、コンテナ栽培は初めての試みであることから、いちごの生産・収穫を実証しながら作業手引書を作成することを第1の目的とする。そして、1

回1株当たりの収穫量を計測し、年数回の収穫機会から、年間生産量を割り出すことも狙いとする。こうしたことから、コンテナ1号における収益モデルを構築する。そこで本節では、これらの目的を達成するための、生産チームにおけるプロジェクト期間中の活動経緯を記していく。

まず、苺コンテナは、2022年11月4日に短大ブランドに設置され、そこから事実上のいちご生産がスタートしている。コンテナ内には、すでに生育途中の

表2. 4チームの活動成果としての報告書一覧 筆者作成

チーム名	報告書名	主な内容
生産チーム	苺コンテナ・第1期生産報告書	2022年11月～12月に実施した作業内容と、推定の年間生産量の算出。
	苺コンテナ・作業手引き書	コンテナ設備解説、いちごの栽培方法、管理体制等。
イベントチーム	お菓子作り教室実施報告書	11月27日にトライアルとして実施した苺シフォンケーキ作りの報告書。商品化と収益化を狙いとしたイベントを実施。
	6次産業化ビジネスの企画書	つきたん苺のブランド化を伴う、販路拡大やイベント内容のアイデアをまとめたもの。
クラウドファンディングチーム	クラウドファンディング実施報告書	クラウドファンディングの実施内容、リターン、資金の活用方法、支援者の属性をまとめたもの。
	つきたん苺のロゴデザインとその活用企画	ロゴデザインが確定するまでのプロセスと、確定デザインの利用方法。
プロモーション	SNSの実施報告書	Instagramの投稿内容、フォロワー数。プロモーションの効果測定。
	今後のSNSマーケティング企画提案	プロモーション目標達成のためのSNSの利用方法の提案。

表3. 主なコンテナ設備の解説

コンテナ

ECメーター

肥料が流れる濃度を表す

ヒーター

コンテナ内の温度を見て調整する

温度計

コンテナ内の温度を確認

濃度調整タンク

ECメーターの濃度を見て濃い場合は水を入れて調整する

ミツバチ箱

受粉のため

ビニールカーテン

コンテナ内の温度を安定させるため

いちごの苗240株が配置されており、開花から受粉、収穫が進んでいる。生産チームは、石和いちご園青柳の指導を受け、コンテナ運営の実務をこなしながら、設備の基本機能といちご栽培の理解を進めた。ただし、LEDや空調の関連電気工事が完了していないことから、いちごの収穫が遅れている現状がある。それでも、2023年1月には第1回目の収穫ができた。その後、2か月弱に1回の割合でいちごの収穫ができる予定である。

4.3 活動②：イベントチーム

イベントチームでは、収穫苺を使って、学生と市民が交流する「スイーツ作り教室」のイベントを企画する。今回は、そのテストイベントの実施を行った。お菓子

作りの講師として、地域の専門家（吉村味噌糰の上田社長）に依頼をし、予め焼き上げていただいたケーキに生クリームや、いちごでデコレーションをした。また、イベント後に意見交流会を行い、つきたん苺を使ったイベントやスイーツ商品の開発に関わるアイデアを出し合うことによって、次のイベントにつなげる。今回のテストイベントでは、企画検証を行い改善点や欠点を洗い出すことによって、収益化のモデル作成を目標としている。また、意見交流会の意見をまとめることによって、次なるイベントでの顧客体験価値向上を目指す。

そして、来期のゼミではテストイベントでまとめた意見をもとに収益を得るためのスイーツ作り教室の実施を行う予定である。

短大発の官民連携による フルーツ6次産業化の実施報告

～“つきたん苺” コンテナ・プロジェクト～

4.4 活動③：クラウドファンディングチーム

クラウドファンディングチームでは、クラウドファンディングサイト「CAMPFIRE(キャンプファイヤー)」でプロジェクトを掲載し、資金調達を行った。

具体的な活動は、目標金額を10万円に設定し、プロジェクトページを11月14日に公開した。資金の使い道は、商品のロゴデザイン企画・制作のためのデザイナーへの委託料、コンテナデザイン塗装費、イベント実費経費、商品開発費である。プロジェクトを拡散するために公開前からSNSで広報活動を行い、公開後はチラシやプレゼンテーションを用いて拡散した。また、プロモーションチームのInstagramを活用し、週に1回クラウドファンディングの活動報告や広報活動を行った。11月30日に目標金額10万円を達成し、ネクストゴールとして設定した18万円も12月10日に達成した。最終的な結果としては支援額19万5500円、支援者数54人である。また、資金調達以外にテストマーケティングやメディアとしての活用も行った。リターンにつきたん苺といちごのシフォンケーキを設定したため、それらの反響を分析し、今後の商品開発に生かしていく。

表4. つきたん苺のロゴデザイン



つきたん苺ちゃん(姉) つきたん苺ちゃん(妹)

4.5 活動④：プロモーションチーム

プロモーションチームでは、SNSであるInstagramを活用したマーケティング活動を行っている。その目的は複数あるが、第1にクラウドファンディングに関わる支援者の獲得、第2にイベントの集客、第3に地域関係者(学生、教職員含む)への理解・共感・支援、第4に“つきたん苺”の地域ブランドの構築、そして第5に短大魅力向上による受験者へのアピールである。しかし、3か月の活動では、これらすべての目的を充

足することはできない。したがって、チームゴールはSNSを活用したプロモーションの可能性を提示することにとどめている。

具体的な活動は、Instagramの正式アカウントを取得し、チームメンバーで動画・画像の投稿活動を行うことである。実績はまだまだ少ない状況ではあるが、こうしたテストのプロモーション活動を通じて、つきたん苺に関わる利害関係者を炙り出し、いずれは官民連携の地域体制の構築につなげていくことになるだろう。

4.6 今後の地域戦略

繰り返しになるが、プロジェクト内の4つのチーム活動は、前述の表2をもって報告書にまとめられている。そして、そこから描き出されるのは、図3に示す地域戦略である。本節では本稿の締めくくりも兼ねて、その地域戦略を次に提示し、これを2023年度以降に筆者らの後輩のゼミ生にバトンとして渡す。

専門ゼミ実証に基づく、プロジェクトを起点とした事業の成長戦略には、2つの方向性があり、その併存が可能である。

第1は、図3の左下に展開する「6次産業化ビジネス」である。“つきたん苺”のブランド化を行い、地域や大学の価値を高める。収益構造を生産や商品売上に偏らないサービス財や公共財にシフトすることを狙いとする。

第2の成長戦略は、図3の右上に示したコンテナ2号・3号の横展開による市場開発戦略である。これには、供給元の石和いちご園青柳と連携し、ビジネスパッケージ化された収益モデルを大月農業で起業したい人向けに提供するなど想定される。

これら2つの事業戦略を可能にするには、ゼミ中プロジェクトといった不安定な組織では困難となる。つまり、持続可能な組織を編成する必要があり、それは例えばプロジェクトから発展した短大発株式会社といったものが必要なのではないだろうか(図3の右下部分参照)。官民連携による地域ガバナンス体制を編成し、学生主体のリーダーシップが実践できれば、会社組織の設立も可能なはずである。したがって、次年度2023年度のゼミ活動は、会社設立に向けた内容となることを期待したい。

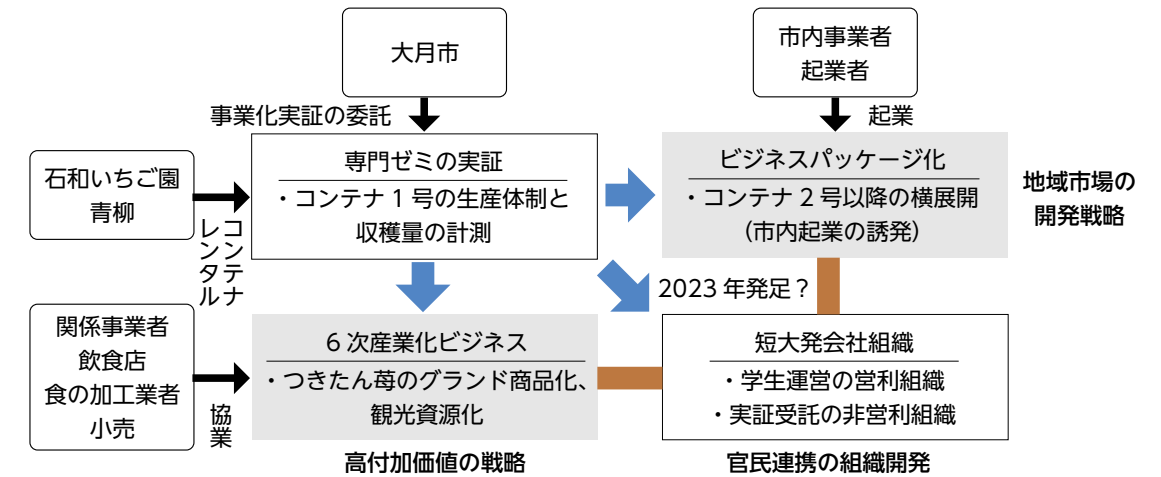


図3. 官民連携組織による地域戦略の方向性 筆者作成

5. おわりに

本稿では、つきたん苺のブランド化に向けたビジネスモデルのパッケージ化を行った。2章では、大月市はブランド化されたフルーツ等生産物が少ないことが地域の課題であるため、第一号コンテナを大月短期大学の自治会室前に設置し、学生主体のいちご栽培、すなわち「つきたん苺コンテナ・プロジェクト」を開始することによって問題解決を目指すことを明確にした。続いて3章では、クラウドファンディングの可能性と6次産業化の事例をあげた。その内容としては資金調達をするうえでクラウドファンディングを活用する意義を示した。

また、6次産業化の事例では、石和いちご館青柳のいちご栽培を取り上げ、生産・販売・加工の成功要因をあげることによって食材の有効活用と、商品のプロモーションをすることの重要性が分かった。4章では、コンテナ生産、つきたん苺イベント、クラウドファンディング、SNSによるプロモーションのそれぞれの活動の報告書をまとめた。コンテナ生産では石和いちご館青柳さんの生産手引きに基づき実際に栽培を行い、独自の生産手引書を作成した。つきたん苺イベントでは、地元の企業である吉村味噌さんを講師としてイベントを開催し、苺スイーツの商品化に向けた企画を行った。クラウドファンディングは、コンテナデザインとつきたん苺のロゴデザイン制作を行うための資金

調達とプロモーションをかねて行い、その結果を報告書としてまとめた。SNSを用いたプロモーションでは、Instagramを活用してプロジェクトの活動を発信した。

本稿は、つきたん苺プロジェクトの本格的な始動に向けたビジネスモデルのパッケージ化を目的として作成したものである。この報告書を苺コンテナ第2号の市内展開に活用することで、つきたん苺を大月市のブランドにしてみたい。

【参考文献】

- 青木幸弘 (2005)『60分であなたもブランド戦略家』宣伝会議。
- 岩崎邦彦 (2017)『農業マーケティングの教科書 食と農のおいしいつながり』日本経済新聞出版社。
- 後久博 (2008)『農業ブランドはこうして創るー地域資源活用促進と農業マーケティングのコツー』ぎょうせい。
- 農業ジョブ (2022)『農業ジョブ 農業求人情報サイト』
<https://agrijob.jp/contents/myagri/industries> (2022.11.04 アクセス)
- CAMPFIRER (2022)『CAMPFIRER公式サイト』
<https://camp-fire.jp/> (2022.08.04 アクセス)。

人生における活動のきっかけとなる刺激を与える。 将来やキャリアについて 遊び心をもって明るく考える時間を！

PLAYFULNESS [山梨大学]

奈良 千尋、功刀 なつ、竹花 千尋（山梨大学）
保坂沙央里（株式会社アッセンブル）

1. 概要

当プロジェクトでは山梨県のキャリア教育を問題として捉え、学生がさまざまな価値観に触れることを目的としたイベントを3回開催した。大学生が実感している将来への不安や悩みを踏まえ、学生目線だからこそできる出会いの場を提供する。これからの人生を遊び心を持って楽しみながら考えてほしいという想いから、PLAYFULNESS と名付けた。

2. 問題の所存

将来に対して漠然とした不安を抱える学生は多い。立ち上げメンバーが大学生活の中で、「就職活動に対してどのようにアプローチしたらよいかわからない」という声を多く耳にしたことから、多様なキャリアに触れる機会がないことが地域課題として挙げられるのではないかと考えた。イベントとして学生のための“交流の場”を提供することで、キャリアについて考え始めるきっかけを与え、将来への不安を払拭するべきであると考察した。そこでPLAYFULNESS では大学生を対象にアンケートを実施した。

3. 調査結果

今回は大学2年生を中心に google form を使用したアンケート調査を行った。「今悩んでいることは？」という質問に対しては将来のこと、就職活動のことなど

の解答が多く、大学生が将来に対して少なからず不安を抱いていると考えられる（図1）。

上記の解答の理由としては、「進路の方向性が決まらない」「どのように踏み出したらよいかわからない」というような回答が主にみられた。

- これらの調査を踏まえ、問題点には
- ①将来やキャリアについて悩んでいる大学生が多いこと
 - ②同世代と悩みを共有する機会が少ないこと
 - ③大学生が、さまざまな働き方を知る機会がないこと
- 以上の3点が挙げられると考えた。

現状、就活イベントやキャリアイベントは就活を間近に控えた学生を対象にしていることが多く、漠然と不安に感じている学部1、2年生が参加に至るのは困難であると考え。また、体感している事実として、同世代とキャリアや将来について深く話す機会は非常に少ない。これらの問題点を踏まえ、解決の方法としてイベントの開催を決定した。

4. 目的

- ①山梨県の大学生が、キャリアについて考え始めるきっかけを提供すること
- ②さまざまな働き方・職業があることを知ってもらうこと
- ③社会人と関わる機会を提供すること

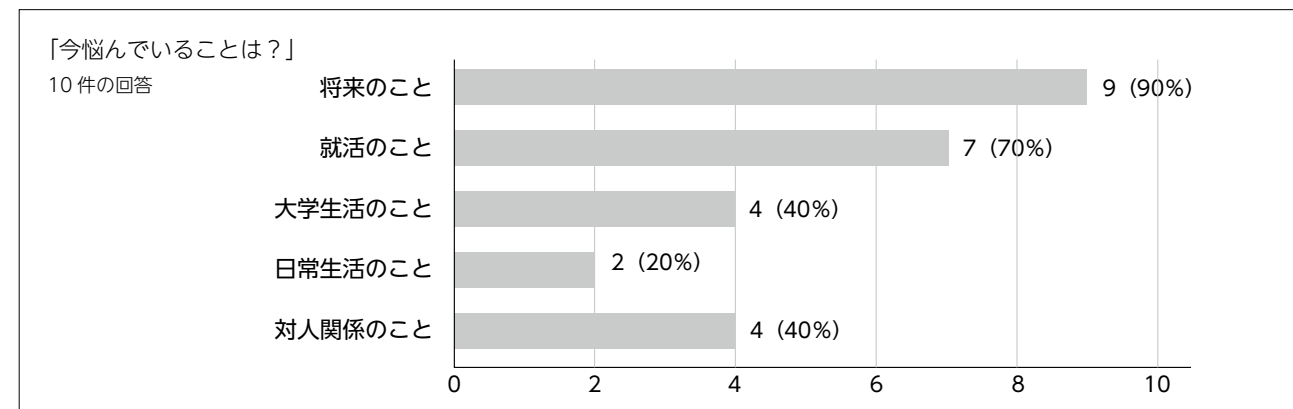


図1. アンケート回答結果「今悩んでいることは？」



図2. 集合写真（前列ゲスト / 後列参加者）

- ④同世代と、キャリアや将来について考える機会を提供すること
- 以上の4点を活動の目的とする。

5. 活動内容

上記の内容を踏まえ、PLAYFULNESS では3回のイベントを開催する運びとなった。就活生を対象とした堅苦しいものではなく、山梨県の学生が多様な生き方を選択できるよう、可能性を広げる機会を提供したいという想いから、イベントという形を通して出会いの場を提供することを決定した。団体名であるLAYFULNESS と同様、楽しみながらこれからの人生設計を行ってほしいという想いをこめ、イベント名を「プレイフル！」と名付けた。

①一回目イベント概要

日時：2022年9月11日（日）

場所：4U

一回目のイベントとして「プレイフル！～おしゃべり女子会～」を開催した。働く女性をゲストとして招き、女子高校生・女子大学生を対象に“聞く、知

る、考える”をテーマに座談会形式で行った（図2）。PLAYFULNESS は女性4人で立ち上げた団体であることから、女性が社会で活躍している姿を山梨県内の学生にも伝えることができるのではないかと考え、一回目のイベントは“働く女性×学生”をコンセプトとした女性限定イベントを開催することを決定した。ゲストには〈株式会社トレジャーフット取締役 辻麻梨菜さん〉〈Tremoro 代表 石橋めぐみさん〉〈株式会社アッセンブル代表取締役保坂沙央里さん〉〈GHCD 認定コーチ・みらい創成者認定講師 中島星さん〉の5名をお招きした。イベント内では学生から、学生時代の取り組みや職業選択の方法など、就職活動における質問をしている様子が見受けられた。

女性がキャリアを形成していくことについて不安を持っている学生も多く、結婚や出産をはじめとする人生設計についても質問が出されていた。また、座談会形式に拘らず学生だけで情報をアウトプットする時間をとることで、イベントで得た気付きや発見を共有を図った（図3）。「学生からは多様な価値観を知ることによって将来の選択肢が広がった。」また、「働くのが楽しくなった。」という評価を得ることができた。事後アンケートにおいて女子会という形式にすることで参加のハードルが下がったという意見が出されたこ

人生における活動のきっかけとなる刺激を与える。 将来やキャリアについて遊び心をもって明るく考える時間を！

とから、就活イベントとは異なる視点でキャリアに触れる機会を提供できたのではないかと考える。



図3. イベントの様子

一回目の経験を踏まえ、二回目は大学生を対象としたイベントを開催した。学校生活の中で、同世代と就活や将来に対して抱えている悩みを共有する機会は少ないと考える。悩みや不安を共有することで前向きに就職活動に取り組みことができると予測し“大学生×大学生”を二回目のイベントのコンセプトとした。

②二回目イベント概要

日時：2022年11月26日(土)

場所：4U



図4. 宣伝時のビラ

11月に「プレイフル! ~同世代と話そう! ~」を開催した(図4)。本イベントは学生間の交流を主軸に置き、座談会形式で行った。また、ツールとしてバリュースカードを用いた。バリュースカードとは、価値観の書かれたカードを引き、手持ちの5枚の中で取捨選択していくカードゲームである(図5)。楽しさと安定、またはキャリアと家庭など、人生設計における二者択一の選択が迫られる場面などもあり参加者からは自分の知らない一面が見えたという声が挙げられていた。

イベント内では、就職活動という未知のライフイベントが差し迫る大学生特有の将来への悩みや、日々の生活の中で感じている不安などの共有が行われた(図6)。

参加後のアンケートでは、漠然とした不安であっても同世代と共有することで安心感を得ることができたという評価を得ることができた。自分を改めて見直すことができたという回答も多くあり、就職活動など、これからの自己アピールにもつながる良い機会を設けることができたと言える。



図5. バリュースカード



図6. イベントの様子



図7. 集合写真(前列参加者/後列ゲスト)

二つのイベントを受け、PLAYFULNESSでは学生に対してさらに多様なキャリアに触れる機会を提供するべきではないかと考えた。一つの職業に固執するのではなく、自由な生き方があることを知ることで将来の選択肢の幅がさらに広がると考えられる。また、さまざま選択肢を自らの中に持つことはこれからの人生における自信につながるのではないかと考える。以上のことから、三回目のイベントのコンセプトとして“働く大人×大学生”を定めた。

③三回目イベント概要

日時：2023年2月4日(土)

場所：Takeda Street Base

最後のイベントとして2月に「プレイフル! ~モチベUP↑なにかをはじめるきっかけを~」を開催した。多様な生き方に触れることでこれからの人生におけるモチベーションを高めてほしいという想いからこのイベントを開催することとなった。ゲストには県内外で働く社会人を招き、学生が社会人の話を直接聞くことができるよう、座談会形式で行った。ゲストは、〈株式会社アッセンブル代表取締役 保坂沙央里さん〉〈NPO法人河原部社理事長 西田遥さん〉〈メイクアップアーティスト 福岡美波さん〉〈アグベル株式会社 代表取

締役 丸山桂佑さん〉〈学生のキャリア教育に関わる上嶋冬華さん〉の5名をお招きした(図7)。

イベント中、学生からは学生時代の活動や職業選択の決め手、仕事のやりがいなどについて質問が積極的に投げかけられていた(図8)。当イベントのゲストには転職・退職を経験された方やリターンによって県内で働いている方、起業された方をはじめとして型にはまらない自由な生き方をされている方を選出したことから、通常の就活イベントとは一線を画す新たな刺激を学生に与えることができたのではないかと考える。また、一回目のイベントと同様に学生のみで意見交換を行う場を設けた。学生間の交流では今後の意気込みやイベントによる新たな発見などが共有されていた。



図8. イベントの様子

人生における活動のきっかけとなる刺激を与える。 将来やキャリアについて遊び心をもって明るく考える時間を！

イベント後の参加者へのアンケートでは「本日のイベントはいかがでしたか」の質問に対し「非常によかった」と回答する割合が高く、学生にとって満足度の高いイベントとなったことが伺える（図9）。

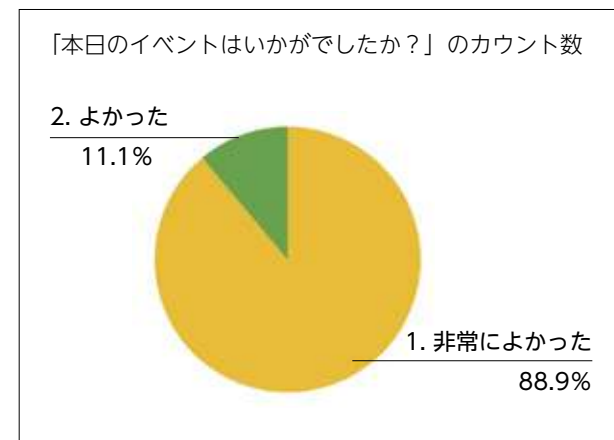


図9. イベント後の参加学生へのアンケート

参加した学生からは多様な生き方に対する驚きの声があがっていた。また、学生時代にさまざま経験をすることが求められていると感じ、これからの大学生活に意気込む学生も多く見受けられた。山梨県内の学生に対して多様なキャリアに触れる機会を提供できた、意義のあるイベントであったと考える。

6. 成果と課題

成果として、計3回のイベントに参加した学生に対して新たな気付きや出会いを提供できたことを挙げる。就職活動に当たって各個人が情報収集を行うと考えられるが、それだけでは完全に捉えきれないほど生き方働き方とは多種多様なものである。学生時代に社会人との対話の機会を得ることで、膨大な選択肢の一部に触れることができると考える。参加者のこれからの人生における選択肢を広げるという観点から、価値のあるアプローチができたのではないかと考える。また、同世代と悩みや不安を共有する中で、参加した学生は共に努力する仲間が存在を知ることができたのではないかと考える。同じように悩み、共に成長する同世代がいることは、将来について前向きに考えるきっかけになると言えるだろう。以上の点において、参加した学生に多くのものを提供することができた点を成果として挙げる。

また、SNSを通じた告知から参加に至る学生も多く、効果があつたと考える（図10）。将来に対して悩みを持ちつつも行動に移すことができない学生が多いという社会課題に対して、イベントという形で場の提供を行うことで効果的なアプローチを行うことができたと考えられる。

加えて、これらの成果の表れとしてメディアへの掲載を挙げる。一回目のイベントは山梨日日新聞にて掲



図10.Instagramによる告知



図11. FMハヶ岳出演の様子

載された。

これは、山梨県の学生に対して多様なキャリアに触れる機会を提供できた点や、“おしゃべり”というラフな場を通して将来について考えるきっかけを与えることができた点が評価されたと考えている。さらにFMハヶ岳「山梨トップファン〜地元をもっと楽しく〜」に出演し、PLAYFULNESSの活動や想いを山梨県内に向けて発信することができた（図12）。ここでは、学生目線だからこそ伝えることのできるキャリア教育が評価されたと考える。2つのメディアを媒介し、より多くの人に対してPLAYFULNESSとしての活動を周知することができた。

課題としては、就活イベントの堅苦しさが参加のハードルになってしまった点を挙げる。就活イベントは未だ堅苦しいものが多い。キャリアに触れる機会は早い段階から確保することが望ましいにもかかわらず、高校生や大学1、2年生を対象としたイベントが山梨県内には少ない。結果的に将来設計を自分事として考えることのできる学生が小規模になってしまっている。PLAYFULNESSのイベントでは就活イベントとしての堅苦しさを乗り越え、楽しく将来のことについて考えてもらうことが目的であったものの、参加者を集めるのが非常に困難であった。山梨県内の学生において将来について気軽に相談できる場所や人が増え、早い段

階から多様なキャリアに触れる制度が確立されていくことが今後の課題として考えられる。

7. おわりに

一年間の活動を通して、山梨県内の学生のリアルな声を聞くことができた。就職活動について悩んでいる学生は多く、悩みを相談できる場所が必要とされている。今後の山梨県のキャリア教育はこの点を解決していかなければならないと言えるだろう。これに対して、社会人側も自らの苦労やキャリア形成について共有できる場を求めていることに気が付いた。この二者を結びつけることが、上記に挙げた課題の解決につながるのではないかと考える。PLAYFULNESSの活動自体は今年度で終了してしまうものの、今回の参加者に「あのイベントに参加したから今の自分がある」と感じる学生が1人でもいたら幸いである。

本と出会うマルシェ in 甲府銀座通り商店街

概要

山梨英和大学附属図書館学生協働サークル L I K E (以下、L I K E) が春光堂書店 (甲府市中央) に協力を仰ぎ、甲府駅周辺の地域振興の一環として開催した読書推進イベント。さまざまな本や、本を通じた人との出会いを実現することを目的として開催した。また、甲府銀座通りで行われた「こうふのまちの一箱古本市」と同時開催を行った。

問題の所存

2022 年 1 月、甲斐市立竜王北中学校にて、図書館の利用方法をゲーム形式で学べる企画「らいくんからの招待状竜王北中編」を準備し、実施。普段、図書室を利用しない生徒からも好評であった。中学生だけでなく、さまざまな世代の方を対象に、気軽に本を楽しめる機会を用意することで、山梨県での読書推進につながると考えた。

また、2022 年 4 月より、L I K E がやまなし読書活動促進事業実行委員会 (以下、やま読) のサポーターとして活動を開始。同事業に参加している、春光堂書店 (甲府市中央) に協力を仰ぎ、元々開催が予定されていた「一箱古本市」と「本と出会うマルシェ」の同時開催することができないかと提案した。昨今、山梨県内の書店が減少していることや、読書離れが問題視されている。そのため、読書推進を目的とするイベントを行うことで、地域の書店や図書館も盛り上げることにつながると考え、今回の企画を行いたいと考えた。

目的

- 1) 読書推進活動地域の方々へ読書のきっかけとして本と出会う場を提供する。
- 2) 地域の書店の活性化地域で活躍している書店を PR し、集客につなげる。
- 3) 甲府駅周辺の地域振興書店を中心にその地域の魅力を発信する。

方法

やま読の会議をとおり、春光堂書店に連絡をとり「こ

うふのまちの一箱古本市」と「本と出会うマルシェ」を同時開催できるか、交渉を行った。次に、本と出会うマルシェ内で行う企画を考えた。やま読の会議内で学生が読書推進活動を目的として考えた「Book Choice」、「ブック・ラン (覧)」、「謎解きゲーム」の 3 つの企画を、本と出会うマルシェで実施できないか検討を行った。マルシェという名称や会場内でパンやコーヒーの販売などを行う話を聞いたことから、ワークショップ形式の「ブックカバー作り」の企画を追加した。また、大学内で行われていた Serendipity_art (セレンディピティアート) について、好きな本の一節を共有できる企画であり、本イベントに最適であると考え、どのような形式でできるかなどを含め実施を検討した。また、同時開催される「こうふのまちの一箱古本市」の参加希望者を L I K E メンバーからも募った。イベントの周知のため、チラシ・ポスターを作成・配付し、L I K E の管理する Twitter アカウント上での告知も併せて行った。図 1 は当日の様子である。



図 1. 本と出会うマルシェ会場の様子

主な活動スケジュールは以下のとおりである。

2022 年 6 月	春光堂書店へ協力依頼
2022 年 7 月	イベント日時の設定チラシ・ポスター作成、印刷
	やま読イベント周知、チラシ配布依頼出展ブース (小規模イベント) 詳細決定
	学内でボランティアスタッフ募集銀座通り使用許可の手続き
2022 年 8 月	チラシ・ポスター配付 L I K E の SNS などでの宣伝開始
	出展ブース数の決定
	備品などの用意
	実施要項など作成

山梨英和大学附属図書館学生協働サークル LIKE "本のマルシェ" 実行委員会 [山梨英和大学]

溝田 咲希、渡邊 幸香、筑後 紅音、長沼 疾風、沼田貴義

2022 年 9 月 イベント開催

図 2 と図 3 が実際に用意したチラシである。チラシは、図書館や書店へ送付を行い、関係者への配布、館内または店内への設置をお願いした。また、大学やサークルメンバーを通しての配布なども行った。



図 2. 実際に配布したチラシ (表)



図 3. 実際に配布したチラシ (裏)

活動内容

各活動内容の詳細は以下のとおりである。

(1) オリジナルブックカバー作り

本と出会うマルシェと同時開催の一箱古本市では、気に入った本を購入することができる。オリジナルブックカバー作りは、一箱古本市で購入した本と一緒に、思い出になるようなものを提供したいという思いから始まった企画である。目的は、ブックカバーの作成を通じて本に対する親しみを持ってもらうことだ。図 4 のように、文庫本とハードカバーの 2 種類の大きさのクラフト用紙を用い、画材道具やシール、スタンプを用いて自分の好きなようにデザインを施し、本の大きさに合わせて折ることでブックカバーを作成する。会

場にはシール・ペンなどの画材道具や、今回の企画に合わせて作成したスタンプを準備した。作成したスタンプには、L I K E のマスコットキャラクターである「らいくん」が描かれている。企画に参加した方の年齢層は末就学児や小学生が多く、一緒に来ていた保護者と一緒に作品を作る姿が多く見られた。参加者からは、学生が子どもを見てくれていたことに肯定的な意見が多く集まった。また、子どもと学生がブックカバーを作りながら絵本の話をしていたことから、ブックカバーの作成を通じて子どもたちが本に興味を持つきっかけになったと考えられる。反省点として、大人が多く参加するという想定だったため、担当者の配置を少人数にしていたが、子どもの参加が多く、対応に時間がかかった。今回の経験を今後の活動に活かしていきたい。また、広い場所の確保とオリジナルブックカバー作りを時間制にして整理券を配布するなど、密集対策と大勢の参加の両立について配慮する必要があった。



図 4. ブックカバー作成例

(2) Book Choice

Book Choice は、参加者と会話をしてその人に合った本を選書する企画である。

好みに合わせた本を何パターンか考え、おすすめする本を事前に選定し、参加者へ渡す「紹介カード」を図 5 のとおり用意した。おすすめ本は、山梨県出身の作家の本を 12 冊、企画者がおすすめしたい本を 14 冊選書した。

会話の中で質問を重ね参加者の反応、質問への答えを見たり、聞いたりしながらその人の希望に合った本の推薦文が書かれた紹介カードの配布を行った。カードを配布することで、企画参加後に書店へ足を運んでもらうことを想定した。

参加者は 25 名で、その他にも足を止めてくれた方

本と出会うマルシェ in 甲府銀座通り商店街

山梨英和大学附属図書館学生協働サークル LIKE "本のマルシェ" 実行委員会 [山梨英和大学]

もいた。本企画に直接参加しなかったが、選書した本に興味を持った人もいたため、そこから本を通じてのコミュニケーションを取ることができた。

反省点は、参加者と話して「この人にはどの本がおススメだろうか」と悩んだことである。希望にあった本を推薦することができたと思うが、本当にそれでよかったのか考えさせられた。反省点もあったが初めて企画したイベントで多くの人に参加・興味を示してもらったと思う。自分のお気に入りの本を多く人に受け入れてもらったと同時に、本を通してのコミュニケーションが取ることができたと感じた。



図5. 使用した紹介カード

(3) セレンディピティアート

Serendipity_art (セレンディピティアート) は、2021年10月27日から11月9日にかけて山梨英和大学で企画、開催されたイベント。自分の好きな本や歌の一節を壁や紙に書き、共有することで新しい出会いを目指す、参加型アートになっている。これまでの活動内容は、Twitterのハッシュタグ機能を利用し「#Serendipity_art」でまとめられている。「Serendipity」には思いがけないところで幸運なことに出会えることという意味があり「みんなどれだけ本を読んで、どれだけ好きな言葉があるだろう。」という企画提案者の疑問からこの企画が生まれた。

今回の本と出会うマルシェでは、その活動を広め、さらに多くの人に新しい出会いを体験してもらうことを目的とし、紙とペンを用意して会場内の人たちに"art"に参加してもらった。商店街の春光堂書店に通っている人も参加してもらうことができ、自分の好きな一節を通してコミュニケーションをとることができた。活動を通して、自分の好きな言葉ともう一度出会い、そして、他の人が好きな言葉と偶然出会う機会を提供することができた。当日の様子が、図6である。

反省点としては、地面に紙を置いていたため、書きにくいところがあった。そのため、以後の活動の時には、会場の設備などを考慮し、更なる改善をしていきたい。



図6. セレンディピティアート 実際の様子

(4) ブック・ラン

ブック・ラン (覧) は、「本を読んだ感想を他の誰かと共有できたら素敵」という思いから企画した。同時開催した一箱古本市では、本を箱の中に入れて展示するため、当日参加する人は箱の中にある本を見ることができる。これを手がかりに考えた企画がブック・ランである。展示するという意味を持つ展覧の「覧」と、英語のrunから継続するという意味をとり、次の人へ感想を伝えていく企画として、ブック・ラン (覧) という名前をつけた。

本企画は、本を読んだ人が葉に感想を記入し、印象に残ったページに挟んだ上で、本の展示を行う。葉は図7にあるものを使用した。その本を他の人が手に取り、挟まっている葉を読むことで感想を共有するといった一連の流れによって、葉を挟んだ箇所への思いや感想を次の人へ繋げることが醍醐味となる企画である。本と人とを繋げるための架け橋として、自由な感想を共有し合う場所を用意することを目的としている。

本企画で評価できる点は2点ある。1点目は、自分の後にどのような人が読むのか、他の人は自分の感想をどう受け取るかなど、他者を意識することが、普段とは違う読書の魅力になる点だ。2点目は、葉自体のデザインが好評だった点である。一方で反省点は2点あり、1点目は読書する場所の不足、2点目は用意した展示本が少なかったことである。1点目について、古本市では人の流れがあり、その中でじっくり読書することが困難であった。そのため、椅子と机を用意し、読書と休憩が一緒にできる場所を確保する必要があった。2点目について、厳選する前の候補本が少ないこ

とに加え、手軽に読める様、ページ数の少ない本を厳選したことで、展示する種類が少なくなった。以上の反省を踏まえ、同様の企画を実施する場合、読書の場所と本の種類の確保が必要だ。じっくり読むことで葉に書き込む内容も書きやすくなり、展示された本が増えることで通りすがりの人が興味関心を持つ機会の増加に繋がるだろう。今回は展示に注目していたが、今後は読む人の存在に重点を置き、読書推進活動に繋げていきたい。



図7. 実際に使用した葉

(5) 謎解きゲーム「らいくんと探せ！」

本と出会うマルシェの企画内で、同時開催された一箱古本市の会場案内も兼ねた謎解きゲームを用意した。本企画は、山梨英和大学附属図書館や竜王北中学校でも開催した謎解きゲームをアレンジし、サークルの公式LINEから参加できるようにしたものだ。その目的は、本に親しみのない人でも、楽しみながら本に触れる機会を作ることである。

当日は、受付にQRコードを設置し、公式LINEから送られてくる謎を解き、会場内に隠された次の謎に進むためのヒントを参加者に探してもらった。それに伴い、謎のヒントが書かれた紙を一箱古本市の会場内に設置し、謎を探す参加者が、さまざまな場所に寄ることができるようにした。イベント参加者の中には、



図8. 用意したステッカー

グループ内でのチームプレーや家族で協力して謎解きを行う様子が見られた。また、大人でも全ての問題を解くのが難しく、挑戦しがいがあったという意見をもらった。また、最後まで謎を解くことができたグループに、図8にあるステッカーを配布するなどの試みを行った。

当初の予定では、春光堂書店内で謎解きゲームを行い、書店について知ってもらえるような謎の作成を考えていた。しかし、時間や労力が不足していたことで、想定通りの準備ができなかったことが反省点として挙げられる。また、本を通してコミュニケーションを行うという点について、本企画だけでは読書推進としての役割が成り立たないため、他企画との連携や他の機会の実施可能かなどの検討を行うことが必要である。

(6) 一箱古本市への参加

当日同時開催した「こうふのまちの一箱古本市」は、春光堂書店とBEEKが協力して行っているフリーマーケット型の古本市である。一箱古本市とは、2005年に東京都の谷根千で「不忍ブックストリートの一箱古本市」を開催したことが起源である。一箱古本市への参加者は”店主”と呼ばれ、一箱の中に本と想いを詰め込み、店名をつけたり飾り付けを行ったりして本の販売を行うことができる。山梨県内では、2014年から甲府の銀座通り商店街で始まり、2017年には北杜市で「森のなかの一箱古本市」が、2019年には富士吉田で「よしだのまちの一箱古本市」が開催された。一箱古本市と本のマルシェを同時開催することから、LIKE内で出店者を募り、実際に出店も行った。出店したLIKEのメンバーは、通りがかった人と対話をしながら、古本の販売を体験した。中には、同じ本を読んだことがあるというイベントの訪問者と話が盛り上がるなど、本の販売だけではなく、会話を楽しむ場面も見られた。また、イベント告知の一環として、春光堂書店が同書店内で行っている「得々三文会」にLIKEのメンバーが参加した。その中で知り合った関係者とイベント当日に再会し、交流を深めることができた。

実際に一箱古本市へ参加することで、春光堂書店や地域の人との交流ができた。地域の人との交流を通して、イベントを更に盛り上げることができた。

本と出会うマルシェ in 甲府銀座通り商店街

山梨英和大学附属図書館学生協働サークル LIKE "本のマルシェ" 実行委員会 [山梨英和大学]

成果と課題（地域への提言）

（1）成果

物品の消耗具合からイベントの参加者数の把握を行った。推測された、企画の参加者は約 110 名であった。しかし、セレンディピティアートを見るだけで書かなかった人や、オリジナルブックカバー作りをしている子どもの保護者など、直接的に企画に参加していないが来場した人も存在し、カウントできていない来場者が相当数いたため、実際にはこれ以上の来場者がいたと推測できる。また、L I K E メンバーの関係者、大学関係者、図書館関係者、やま読関係者がイベントに来場した。

チラシの配布を行った L I K E メンバーの友人・知人や、やま読関係者にイベントを周知することができた。しかし、地域住民への周知や関係者以外への周知が不十分であった。そのため、継続的な企画の開催を通じて認知度を上げることで、更なる来場者の増加が見込まれる。また、イベント当日は台風の接近日と重なったことから、台風が理由で来場できなかったという声もあった。企画開催日の天気が恵まれていた場合には更なる人数の参加が見込まれたと推測できる。

本と出会うマルシェに参加した人全員に対して、アンケートの回答をお願いした。そこから得られた回答者数は 10 人であった。図 9 は、「本と出会うマルシェ」への参加者の年代についての円グラフである。30 代と 40 代の項目がそれぞれ 30% と最も高い数値になったが、実際は年代がばらついていたという実感があり、回答とのずれが生じた。理由として、オリジナルブックカバー作りや謎解きの企画は子どもでも参加できる企画だったが、アンケートの回答をしたのが参加した子どもの保護者であったため、実際参加した年代とアンケートの回答をした年代にずれが生じていると考え

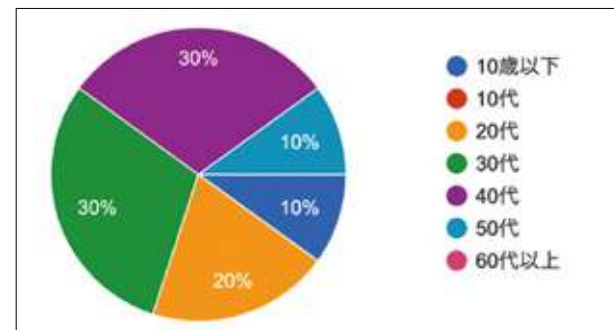


図9.「本と出会うマルシェ」参加者の年代 (n=10)

られる。また、アンケートへの回答は任意だったため、回収数が少なかった。

表1は、「本と出会うマルシェ」全体を通じた満足度を計測した結果である。1の項目を「大いに満足」、5の項目を「極めて不満」に設定した上で回答を依頼した。その結果、1の項目を5人が選択し、2の項目を5人が選択する結果となった。このことから、参加者は「本のマルシェ」の企画に対して満足していることが読み取れる。

表1.「本と出会うマルシェ」全体の満足度 (n=10)

評価	1	2	3	4	5
人数	5	6	0	0	0

※ 1の項目が大いに満足、5の項目が極めて不満

また、アンケートの中には感想を自由記述で書いてもらった。その結果、「若い学生さんたちが活動されている様子を見て、嬉しく思いました」「フレンドリーな雰囲気で良かったですよ」などの肯定的な意見を聞くことができ、このことから参加者が満足している様子が読み取れる。一方、「何をやっているのかが少し分かりづかった」「大きな看板があると通りがかった人も立ち寄りやすい」などのアドバイスをもらうことができた。活動中に、通りがかった人から何をしているのか聞かれる場面が多かったため、通行人に対する企画のアピールを、更に強化する必要があるだろう。

（2）目的の振り返り

目的として挙げた3点について、振り返りを行った。1つ目の「読書推進活動」について、本と出会うマルシェを開催したことで、読書のきっかけを提供することは達成できたと考えた。行った企画の中でも、Book Choice、ブック・ラン、セレンディピティアートの3つの企画が特に読書推進に貢献した結果になった。Book Choice では企画へ参加した人と話し、その人に合わせた本を紹介することを通して読書のきっかけを提供することができた。参加者の話を聞くことで潜在的な本への興味を引き出すことができ、表出したニーズに対して適切な本の紹介ができていた。また、紹介カードを渡すことで企画後にも読書への意識が向かうようにできたことも読書推進を行う点で有効で

あった。ブック・ランでは、参加者に本を実際に読んでもらい、読んだ感想を葉に書いて挟むことで次の人に伝えるという活動を通して読書のきっかけを提供できた。本を読み、そこで感じた思いを他の人に伝える面白さを知ってもらい、次の読書への影響を与えることができた。セレンディピティアートでは、台紙に書かれた本の一節から、好きな本の共有を行ったことで、参加した人々の興味を惹き、読書推進に繋がった。台紙に書かれた内容から、地域の人の間で「それは、どういう本なのか」という疑問を通して、新しい本との出会いを提供することができた。以上の3つの企画やその他の企画の振り返りを通して、新しい本との出会いのきっかけの提供や本を通してコミュニケーションをとることができ、「読書推進活動」は達成することができたと考えた。

2つ目の「地域の書店の活性化」と3つ目の「甲府駅周辺地域振興」は1つ目の目的である「読書推進活動」と比べると達成には至らなかった。理由としては、地域の書店の活性化という点では、本と出会うマルシェを行った際、図書館や書店へ向けて案内状の送付を行うことで、周囲へのイベントの宣伝を行うことができたが、地域の住民や学生に対する宣伝があまり行うことができなかったことが挙げられる。しかし、L I K E メンバーの知り合いや会場を訪れてくれた人に対しては、本と出会うマルシェへの訪問を通して、春光堂の存在や行っているイベントへの参加を促すことができた。今後は、関係者への案内だけではなく、書店を中心に地域の魅力を発信することが望まれる。目的達成のために、今後は春光堂書店が開催する読書会や得々三文会などの読書推進活動への参加を通して、地域の人々と交流し、読書や書店の魅力を発信していくこと、そして継続したイベント開催を通して知名度を上げていくことを目標としていきたい。

（3）課題

今後の課題として、イベントの運営についてより円滑に準備を進められるような体制や仕組み作りを行うことが必要であると考えた。特に、イベントの実施を通じて、初めて明確になった事柄も多かったため、各企画の利点の把握に役立った。

まず、ブックカバー作りに関しては、予想以上に子どもの参加が多く、子どもに対する読書推進活動の

1つの手段として利点があることがわかった。次にBook Choice では、今回のようなイベント会場での開催が適していて、本を読むきっかけを相手との会話を通して提案できるところが利点であるとわかった。今後は、より大人数での企画運営を行えるような体制を作っていきたい。セレンディピティアートは、開催場所の確保ができれば比較的簡単に開催できる利点があることが分かった。今後は、その利点を活かしてより多くの人に参加・観覧してもらえるような開催方法を模索することと、アートとしてどのように体裁を整えるのかを視野に入れて活動を行っていきたい。ブック・ランでは、今回のような人の行き来が激しい場所ではなく、イベントスペースなどの場所を借りて一定期間実施する方が適切であると考えた。そのため、今後公共図書館や春光堂書店、商店街などのイベントスペースを利用して、展示形式の開催が行えないか検討を行っていきたい。最後に、謎解きゲームに関しては、今回導入したL I N Eを用いての実施が可能であることが分かった。しかし、今回出題した謎と読書に関連性がなかったため、読書推進とどう結びつけるかに関して、今後改善すべき点だ。

今回L I K Eが実施した企画はこの5つであったが、企画数に関して1回のイベントで行うには多いと感じたため、今後「本と出会うマルシェ」を行う時に企画を厳選する必要がある。

次に、今後イベントの知名度を上げるために、継続したイベントの開催や地域に向けてのP R活動に力を入れていくことが必要である。今回L I K Eからはやま読関係者へのイベント開催の告知などを行ったが、大学生へ向けての告知にも力を入れ、さらなる参加者の増加を目指していきたい。また、甲府中央の地域住民へ向けて何かアピールできる機会を設けられないかを考えたい。同時に運営側の人数に関しても、より大人数で行う必要があると感じたため、L I K E内でより協力者を募り体制を強化する必要性があると考えた。イベントの知名度を上げると同時に、本や読書に興味がない人でも楽しめ、読書のきっかけになるような企画作りにも挑戦していきたい。そのために、今回は企画の中で、ステッカーや紹介カード、ブックカバーなど、イベントへ参加した人への記念品を用意したが、今後、イベントの訪問につながるような動機付けやインセンティブの用意にも力を入れていきたい。

甲府の魅力をギュッとMAP

甲府市の飲食店を通して地域活性化

1. 概要

当プロジェクトは、山梨学院大学経営学部は今井ゼミに所属する学生が甲府市の地域活性化を行うために始めた活動である。昨年度も学生イニシアティブ事業に参加し、『キャンドルナイト』というイベントを通して、甲府市中心街にある桜町通りの活性化を目指す活動を行ってきた。今年度はさらに視野を広げ、甲府市全域の地域活性化に貢献していきたいと考え、甲府市内の飲食店をマップにまとめることにした。

2. 問題の所在

(1) 観光地を作ることは難しい

山梨県全体の観光地であれば、富士吉田市の富士急ハイランドや北杜市の清里テラス、甲府市の昇仙峡、山梨市のほったらかし温泉など、多くの観光地がある。しかし、令和3年山梨県観光入込客統計調査報告書によると、富士・東部地域に訪れる観光入込客数は全体の4割を占めている一方、峡中地域の観光入込客数は2割程度であった。峡中地域に位置する甲府駅の利用

者数は、1日約2万人が利用する県内最大の駅であるにも関わらず、甲府市は観光地としてあまり見られていないと考えた。また、同報告書の居住地別の『観光の主な目的』という項目では、県内、県外、海外全ての人が『自然を楽しむ』ことを1番の目的としていた。つまり、富士・東部地域の観光入込客数が全体の4割を占めるのは、富士山をはじめとする多くの自然があることが要因として挙げられる。しかし、1年という短い期間で自然と同等の観光地を作るとは、経済的にも時間的にも難しいと考えた。そこで、今ある甲府の魅力をさらに引き出すことにより、地域活性化を促進できるのではないかと考え、飲食店に焦点を当てた。

(2) 飲食店の位置関係が分かりづらい

近年、大学生はInstagramなどのSNSで飲食店を探す傾向がある。しかし、今回の活動では、SNSで検索しにくい場合にフォーカスを当てた。たとえば、ランチの後、会話を続けたいがそのまま同じお店に長居することは難しいと感じ、近くでお茶ができる別のお店を探したい。そんな時、このマップを利用し、おおよその現在地から近いカフェや、反対に目を向けてい

なかった飲食店、Instagramの検索では出てこなかったが地域で親しまれているような店舗などを提案したいと考えた。

3. 目的

山梨学院大学経営学部の今井ゼミは、『甲府市の地域活性化』を目的に活動しており、今年度は、『甲府市全域に目を向ける』ということのポイントとし、活動を進めた。さらに、目的を達成するために、『活動の中でメンバー自身も甲府市の魅力を再発見していく』という目標を立て、取り組んだ。

4. 方法

マップは企業に委託せず、PowerPointを使用して作成した。甲府市役所からいただいた地図を参考に、道や目印となる建物、掲載店舗を配置した。また、マップ内の店舗をタップすると、情報ポータルサイト『PORTA』のページにアクセスすることができ、それぞれの店舗情報を閲覧できるようになっている。詳しい情報は『PORTA』に掲載されているが、店舗名やどのような料理があるのか簡単に確認できるよう、写真付きの店舗一覧も作成した。完成したマップや店舗一覧は、『Link in bio』というアプリを使用し、サイト内に掲載した。さらに、サイトをQRコードにし、チラシに貼り付けた。チラシは掲載店舗や甲府市内の大学、

市役所に設置した。

5. 活動内容

(1) マップ案

①ターゲット：大学生

甲府市内には大学が4校あり、大学生が多く生活している。また、大学生が外出する際はご飯を食べに行ってお話することが多いため、ターゲットを大学生にした。

②大学生目線のカテゴリー

よく中華、イタリアン、居酒屋など、料理のジャンル別で飲食店を紹介しているサイトを見かける。そのようなサイトと差別化を図るために、大学生目線で、『時間帯別』、また『利用目的別』のようにカテゴリー分けをした。このように分けることで、お店を決める際に食べたいものが見つからないという場面でも、料理のジャンル以外のカテゴリーで探す手助けができ、さらに行きたいお店を見つける1つの手段として、利用者側の選択肢を広げ、利用者とお店側のマッチングもできると考えた。

③PowerPointを活用し、マップを一から作成

企業に委託すると綺麗なマップを作成することができるが、私たち大学生が活動している意味があまり感じられないと考えた。また、普段生活する中で、甲府市の地図を見る機会は非常に少ない。自分達でマップを作成することで、このような場所があったのかという発見をすることができ、『活動の中でメンバー自身も甲府市の魅力を再発見していく』という目標も同時に達成できるのではないかと考えた。

④情報ポータルサイト『PORTA』を活用

マップを作成する際、利用者の目線を重視して取り組んだ。今回、私たちが作成したいものはお店の位置関係が一目でわかるマップであった。しかし、利用者がマップを見てお店に興味を持ったとしても、店舗情報まで見ることができなければ、実際に足を運んでもらえないのではないかと考えた。そこで、お店の詳細が掲載されている『PORTA』というサイトに、マップから直接アクセスできるような形にし、利用者の調べる手間を減らすようにした。

表1. 圏域別観光入込客数 (単位: 人数、%)

圏域名	令和03年		令和02年		対前年比
	観光入込客数	構成比	観光入込客数	構成比	
峡中	3,552,313	19.3%	2,969,600	17.6%	119.6%
峡東	3,443,194	18.7%	3,076,133	18.2%	111.9%
峡南	1,375,637	7.5%	1,350,012	8.0%	101.9%
峡北	2,314,806	12.6%	2,324,342	13.8%	99.6%
富士・東部	7,692,467	41.9%	7,164,180	42.4%	107.4%
年計	18,378,417	100.0%	16,884,267	100.0%	108.5%

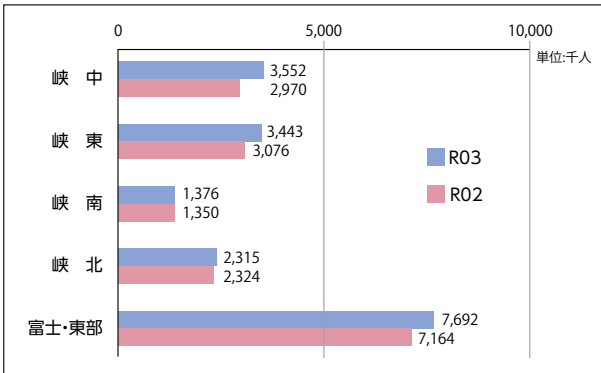


図1. 圏域別観光入込客数

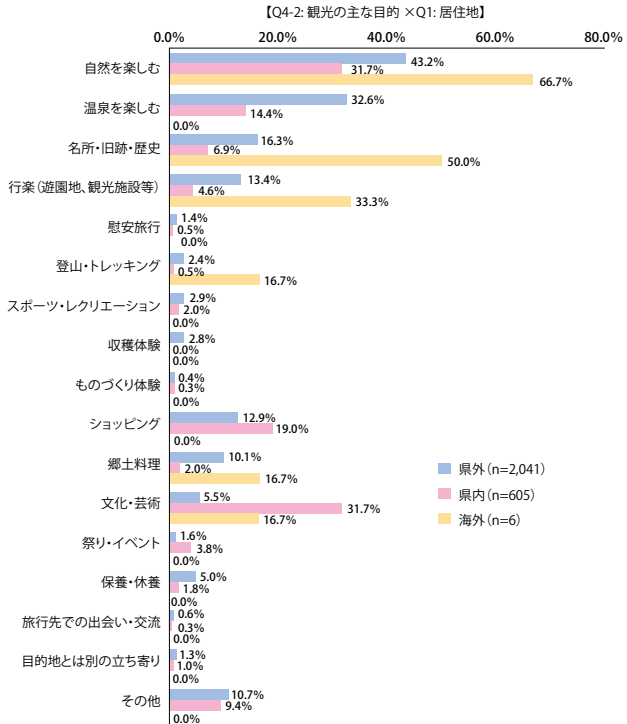


図2. 居住地別 観光の主な目的

マップの詳細

- ① QRコードを読み取る→チラシの情報 (QRコード、説明、カテゴリー名)
- ② QRコードの先にマップのリンク2種類と使用方法の説明
- ③ マップ本体
- ④ 店舗名を押して貴店のホームページを開く



図3. マップ利用方法

甲府の魅力をギュッとMAP 甲府市の飲食店を通して地域活性化

(2) 株式会社武田広告社に P

ORTA 活用に関する許可取り

利用者はお店の位置だけでなく、営業時間や駐車場の有無などの店舗情報まで知りたいと考えた。しかし、マップ内に店舗情報を載せるスペースがない上、全店舗の情報を記載すると文字が多くなり、マップとしての機能が働かないと考えた。その結果、マップ内の文字をできるだけ最小限にするため、お店の詳細が載っているサイトのリンクを挿入し、タップするだけでそのサイトにアクセスできるようにしようという結論に至った。さらに、地域活性化を目的として活動しているため、山梨県内で活躍している企業と連携したいと考えた。そこで、武田広告社が運営している『PORTA』という山梨県内の飲食店などの情報を発信している情

報ポータルサイトを見つけ、是非お力添えをいただきたく、武田広告社に企画書を提出し、許可を得て活用させていただいた。

(3) 店舗へ掲載に関する許可取り

店舗選びの基準は、ターゲットを大学生にしたため、大学生が利用しやすい価格帯の飲食店にした。ランチは 2000 円以内、カフェはドリンク込みで 2000 円以内、ディナーは 3500 円以内に設定し、37 店舗をピックアップした。電話や Instagram の DM で許可取りを行った結果、掲載には一切載せていないという店舗や事情のある店舗もあり、最終的には 29 店舗になった。

(4) チラシ作成

詳しい店舗情報は『PORTA』のサイトで閲覧できるようにしたが、店舗名やどのような料理があるのかを簡単に確認できるよう、写真付きの店舗一覧も作成した。また、マップと対応した番号を入れることでマップと店舗一覧の情報をリンクさせた。

(5) マップ作成

マップは企業に委託せず自分達で作成することにしたが、マップの作り方が分からなかった。そこで、まずインターネットや YouTube で作り方を調べ、PowerPoint を使用して作成する方法を見つけた。甲府市役所からいただいた地図を参考に、PowerPoint 内に道や目印となる建物を配置した。(図 7) また、

掲載店舗は、時間帯別や利用目的別で分けた店舗ごとに色をつけ、それぞれ配置した。(図 8) さらに、マップ内の店舗をタップすると、情報ポータルサイト『PORTA』のページにアクセスすることができ、それぞれの店舗情報を閲覧できるようになっている。(図 9)

(6) マップ・チラシ完成

図 10 のチラシ内にある QR コードを読み取ることで、図 11 のウェブサイトへ飛ぶことができる。色で分けられたタブをそれぞれタップすることで図 12、図 13 の店舗一覧や図 14、図 15 のマップを閲覧することができる。マップは『甲府駅周辺版』と『甲府市広域版』に分けて作成した。



図 4. 案



図 5. 過程 時間帯別



図 6. 過程 利用目的別



図 10. チラシ



図 11. ウェブサイト



図 12. 店舗一覧 時間帯別



図 13. 店舗一覧 利用目的別



図 7. 道や建物を配置

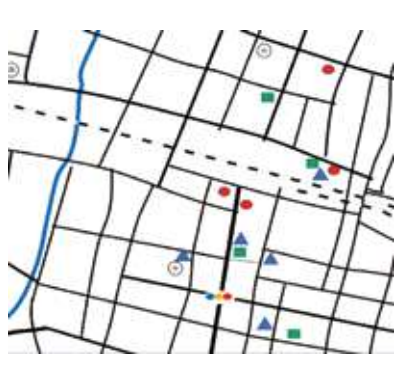


図 8. 掲載店舗を色分けして配置



図 9. 仮完成



図 14. マップ 甲府駅周辺版



図 15. マップ 甲府市広域版

甲府の魅力をギュッとMAP 甲府市の飲食店を通して地域活性化

(7) チラシ・ポスター設置

9月末にチラシやマップが完成し、印刷や配布に動き始めた。掲載店舗に完成品をチェックしていただくために訪問し、一部の店舗にチラシを設置していただいた。その他にも、山梨大学や山梨県立大学、山梨学院大学、甲府市役所などにも設置させていただいた。



図 16. 山梨学院大学（食堂内）

(8) マップ修正

9月に完成し、チラシを配布したが、外部に出たことで4つの問題点が見つかった。

①地図の使い方が分かりにくい

マップの使い方や店舗一覧の見方がわかりづらいという声があり、使用方法の説明ページを追加し、一目見てわかるように工夫した。

②利用者からの声がもらえない

利用者の意見や感想をもらうことで、さらなる機能向上が期待できると考えた。そこで、Google フォームでアンケートを作成し、リニューアルしたウェブサイト に設置した。(図 17)

③ページ移動が多い

図9のウェブサイトでは、チラシとマップを同時に 見ることができないため、毎回それぞれのページを開 かなければならなかった。移動を最小限に抑えるため に、1つのページにマップと使用方法の説明をまとめ た。(図 18)

④大学生らしさがない

チラシを配布するために掲載店舗を訪れた際、『大学生の感想を入れたほうがいいのでは』という意見を いただいた。このアドバイスを参考に、店舗を訪れたゼ ミ生の感想を一覧にし、掲載した。(図 19)

私たちが成果を形に残すことができたのは、企業や 店舗の皆さまが協力してくださったからである。料理 のおいしさだけでなく、お店の方の人柄にも魅力を感じ

じ、『活動の中でメンバー自身も甲府市の魅力を再発見 していく』という目標も達成することができたと考えて いる。

(9) 宣伝

チラシの配布や修正は10月に完了したが、11月 17日にFM甲府のラジオ番組『ごきげんな屋下がり』 内の『甲府市ちょいこれ知ってる?』というコーナー に出演し、『甲府の魅力をギュッとMAP』を宣伝させ ていただいた。さらに、甲府市観光ナビのサイト内に バナーを貼っていただき、チラシ以外の方法でマップ を閲覧できるようになった。

6. 成果と課題

今回、学外に働きかける活動を自分達で一から考え、 役割分担をし、行動したことで主体的に動くことの重 要性を学ぶことができた。ただ、企業や店舗から許可 をいただくために、店舗回りを行う中で指摘を受ける ことも多々あり、非常に苦戦した。そのような中でも、 私たちが成果を形に残すことができたのは、企業や店 舗の皆さまが協力してくださったからである。料理の

おいしさだけでなく、お店の方の人柄にも魅力を感じ、 『活動の中でメンバー自身も甲府市の魅力を再発見し ていく』という目標も達成することができたと考えて いる。

課題は大きく分けて2点ある。

1つ目は、飲食店側のメリットが少なかったという点 である。活動当初、利用者や飲食店、甲府市にとって のメリットをあげ、バランス良くそれぞれに効果が出 るよう、マップの仕組みやチラシの配布場所を検討し た。しかし、掲載やチラシ設置の許可をいただくため に店舗を訪問した際、『他の店舗の宣伝をしているの と同じではないか』と指摘された。また、いくつかの店 舗から『アルバイト募集』についての掲載を依頼され たが、店舗側から情報の掲載依頼があるという想定を しておらず、掲載ページのスペースを用意することが できなかった。各店舗平等に得られるメリットを出す ことができなかった原因は、現地調査を行わず、自分 達で考えたある程度の利点だけで活動を進めたため である。ターゲットや協力してくださる方の声を集め、 改善することで、利用者の増加や掲載店舗の拡大が見 込めると考える。

2つ目は、スケジュール通りに完成させることがで きなかった点である。9月末にチラシやポスターを設 置し、10月上旬から利用可能にすることが活動当初の 目標であったが、10月下旬までかかってしまった。期 限内に完成できなかった原因は、活動当初に明確なス ケジュールを設定していなかったためである。今回の 活動は依頼されたものではないためチーム内で自由に 考えた期限ではあったが、自分たちで設定した期限で も達成すべきであったと反省している。活動前にあら かじめ工程を逆算し、詳細なスケジュールを組んでお くことで、実際の進捗状況と比較し、期限に間に合う ように調整しながら活動を進めていくことができると 考える。

これらの課題点を踏まえ、今後は掲載店舗の拡大や アルバイト募集の掲載など、さらなる機能向上に努め、 甲府市の活性化に貢献していきたいと考えている。



図 17. リニューアルしたウェブサイト



図 18. 1つにまとめたページ



図 19. ゼミ生による各店舗の感想

身延山における和紙研究プロジェクト

身延和紙研究会 [身延山大学]

望月 孝政、丸茂 泰知、谷口 玄樹、郷 宗龍、児玉 伍、松島 正賢、田中 伸尚、佐藤 文哉

概要

身延町には日蓮宗の総本山である身延山久遠寺が所在している。その周辺である門前町は、観光業で栄えているが、コロナ禍の影響、また、仏教離れの影響から、近年殊に参拝者が著しく減少している。そこで、観光業以外の視点から、これまで注目されていなかった産業に着目し、特に750年前に日蓮聖人が身延で使用していたと考えられる和紙を研究し、その製法を現代において再現し、「伝統産業」として位置付けられるよう地域産業と連携し、将来的に全国へ販売することで、地域活性の一端を担うことを目的として本プロジェクトを始動した。

問題の所存

歴史的にみても、日蓮聖人は、同時代の他の僧侶などに比べ、とても筆まめであったと考えられ、非常に多くの著作や書簡・手紙が残されている。その数は約600点ともいわれ、現存が確認できる真筆も数多い。また、そのうちの8割以上が、日蓮聖人晩年足掛け9年間を過ごされたここ身延山で書かれたものと言われている。

また、近年行われた日蓮宗の「日蓮聖人真蹟御本尊修理事業」において明らかになった事実により、身延期における料紙（和紙）には特徴がみられるものの、その紙の入手については未開拓の分野であって、その原材料や製法、産地や歴史など、新たな発見とともに、疑問点や解明されるべき課題も見られるようになった。

そこで、当研究会において、日蓮聖人が身延期で使用した和紙は、この地で作られたであろうことを想定して「身延和紙」と名付け、その歴史や製法などを幅広く探求することを第一の目的とする。具体的には、実際に和紙を漉き、使用された紙の再現を目指し、さらに販路を確立して、地域産業として町に根付かせることをも大きな活動目標の一つとして考えている。

身延町には750年以上の歴史がありながら、その歴史の長さに見合った産業がなく、この750年もの歴史を背景にした産業（特産）を作ること、地域を活性化することが可能となり、観光業にも大いに寄与することができるのではないだろうか。

活動内容

2022年度の活動内容として、4月～6月は課題の抽出と今後の方向性、計画を確定した。

問題の所在は、顧問や他の先生方の指南で、前述のとおりではあるが、具体的な課題について検討する以前に、プロジェクトメンバーの共通の認識や、基礎知識が調っていないことが確認され、まずは毎月1回、計3回の学習会を実施した。

これにより、日蓮聖人がいかに多くの書物やお手紙を書かれていたのか、それも足掛け9年間という身延期に集中しているのか、また、使用目的（著作や書状の執筆や大曼荼羅本尊の揮毫など）によって、料紙を使い分けていたことなどがわかった。

また、現在、身延町内にある「なかとみ和紙の里」で知られている、所謂「西嶋和紙」との違いについても確認できた。

それを踏まえ、7月～9月はフィールドワークを行った。

まず7月は、顧問と代表者が、身延町、身延クラフトパーク、なかとみ和紙の里を訪問し、施設見学とともに、協力者を要請した。

8月には、プロジェクトメンバーで、なかとみ和紙の里にて、和紙漉き体験をした。これは、所謂観光客向けの体験であるが、メンバー一同、初めての体験で、大変に参考となった。

9月は、顧問より各課題を示され、それぞれが研究活動を行った。

10月～12月の期間では和紙漉き実習を行った。今回は「体験」ではなく「実習」として、身延クラフトパーク内の和紙工房で、技術者の宮本氏の説明、指導の下、原料である楮を蒸したものをほぐすところから紙が出来上がるまでの実習を体験した。

右の図はその実習内容の一端を紹介したものである。

実習内容



図1. 楮

※和紙の原料としては、多くの植物が使われているが、代表的なものに、「ミツマタ」と「楮」がある。

※西嶋和紙は、ミツマタを使った、特に「書道用紙」が有名であるが、日蓮聖人の料紙は、ほぼ全てにおいて楮の和紙が使われている。

※歴史的にも楮の方が古く、本プロジェクトでは、楮和紙の研究を中心とし、楮を使用して、日蓮聖人の料紙再現を試行していく。

※原料である楮の木を、和紙の材料として使える状態にするために、最初に行うのがこの工程。



図2. 楮を蒸す



図3. 蒸した楮の皮を剥く

身延山における和紙研究プロジェクト

身延和紙研究会 [身延山大学]

実習内容



図4. 椿の繊維

※ここで皮がきれいに剥がせないと、出来上がりが汚くなってしまう。

※この繊維が、和紙になる。

※繊維をほぐし、それを木の棒で叩いて細かくしていく。
当然だが、繊維が太く長い状態では、ゴワゴワとしていて、「味がある」かもしれないが、書いたり保存したりするには適さない。

※日蓮聖人が用いられた料紙を再現するためには、この何倍も何度も何度もたたかなければ、使用に堪え得るものにはならない。
今回は時間の都合で、目指すところの遥かに手前で終了。
粗い繊維のまま行った。



図5. 繊維をほぐす



図6. 叩いてさらに繊維をほぐす

※ここで、均一になるように溶くが、今回は太くて長い粗い材料を使用しているため、うまく溶けない。

※この状態から、つなぎを使わずに、そのまま漉く方法もあるが、その工法だと、仕上がった紙は、ゴワツとした厚みのあるものになってしまう。

※現在の研究段階では、「つなぎ」を使って、薄く滑らかに仕上げる方法を選ぶこととする。

※写真は、すでにトロロアオイを溶かした状態のもの。



図7. 叩いた繊維を水に入れさらにほぐす



図8. トロロアオイ

※この「トロロアオイ」の根から出るとろみ成分が、つなぎとなる。

※「つなぎ」には、さまざまなものを使われていたようで、他の植物や海藻なども使っていたそう。

※今回は、とろみの収穫量も多く、ポピュラーなトロロアオイを使用した。

※なお、日蓮聖人の料紙が何を使ったかは不明。

身延山における和紙研究プロジェクト

身延和紙研究会 [身延山大学]

実習内容

※このような木枠を使って紙を漉く。この木枠の大きさによって紙のサイズが決まり、それによって工房も特定することができる場合がある。

※日蓮聖人の料紙を再現する場合には、ご真筆のサイズを確認して、相応の枠を制作することを検討。

※原材料や道具類、全てにおいて、手に入りにくくなっている状況とのこと。確保するために、できるだけ早くすべきとの指摘を受けた。

※実際の作業として、この段階の技術は、見るよりも実践は、遥かに難しく、この技術を身につけるだけでも時間がかかるものと思われた。
安定した品質にしていくなためには、学生の力だけでは難しいことを実感した。



図9. 紙漉く木枠



図10. 職人の漉いた和紙



図11. 学生の漉いた和紙①

※実際に実習の中で漉いた和紙の一部。職人の漉いた和紙と素人である学生が漉いた和紙を比べると、その差が歴然である。

※職人から、一つの芸術・作品として見るならば、学生の漉いた和紙も価値を見いだすことができるかもしれないと言われたが、今回はあくまで実用品として文字を書くことを考えると、均一に、使用に耐えうるものを作成しなければならない。

※やはり熟練した経験と技術が必要となる。



図12. 学生の漉いた和紙②



図13. 学生の漉いた和紙③

成果と課題

今年度の研究活動において、机上の研究が実習を通して、現実的な展望に変わった。本プロジェクトメンバーの意識はもちろんだが、今回、ご指導いただいた技術者の宮本氏も、大いに展望を抱いていただき、今後、さらに協力的に連携しながら本プロジェクトを進めていくことを約束された。

2023年度も研究を継続し、場合によっては自前の紙すき工房を整えて、更なる研究に挑みたい。

またさらなる研究課題としては、日蓮聖人の料紙にみられる「染色」の研究や、筆や墨、硯なども同時に探求をおこなっていききたい。

2025年度を目処に製品化と実売を開始したいと思っているので、研究と技術の向上と同時に進めていきたい。

紙の目処が立ってきたところで、鎌倉時代に使われていたであろう筆や墨、硯を使って、実際に書いてみて、日蓮聖人の御真筆と同じように書けるかどうか、そのような検証もしたいと思っている。

また、販売方法、販売所などの確保のため、様々な場面でプレゼンテーションを行い、交渉をしていきたいと考えている。

この「身延和紙」の生産が実現すれば、時を超えて「伝統産業」が復活できる。これを750年の伝統に代えられるまでに、さらに研究活動を続けていきたい。

学生の力で笛吹市を輝かせたい！ 盛り上げたい！

～ISAWA NIGHT WALK ～

1. 概要

学生団体 SHINE は、高校2年生から大学2年生までの15名で活動している。笛吹市在住の高校1年生から大学1年生までの9名で2022年3月に発足。笛吹市を学生の力で輝かせたい！盛り上げたい！というコンセプトの元、笛吹市を中心にまちづくりの活動を行う。

2. 活動について

活動の中で人と人との繋がりを大切にしながらローカルなネットワークを構築していくことにより、笛吹市のことをもっと知り、学生の視点からまちづくりに貢献し、笛吹市に学生の力を轟かせる。さらに、これらの活動を行うことにより、ふえふきマニア（笛吹市が好きな人）を増やしたい！学生の力で地域が生き生きとしていつまでも輝く笛吹市にしたい！若者の郷土愛「笛吹愛」を深め、自分のまちの魅力を伝えることができる・発信できる側になる人を増やしたい！以上をミッション・ビジョンとして掲げ活動に取り組んでいる。

今回は、笛吹市の中でも石和のまちにフォーカスし、イベントを企画した。主な活動としては、笛吹市で行われるイベントでのボランティア活動や、地域の人と交流をしながら学生団体のニーズや笛吹市の魅力やおすすめのお店を調査する「笛吹調査隊」と名付けるアンケート、学生ならではの視点で笛吹市内のイベントを企画・運営する。これまでに地域の公園で行われたお祭りでの屋台出店や笛吹市のおすすめのお店を紹介するフリーペーパーの作成、「SHINE ○○」と名付ける当団体が主催するメンバーのやりたい！を地域と結び付けて実践していくイベントなどさまざまな活動を行っている。

3. 問題の所存

(1) 石和温泉の宿泊業は、新型コロナウイルスの感染拡大により集客減少に苦しんでいる。石和源泉足湯ひろばでイベントが定期的に開催されているが、石和の旅

館街は閑散としている。さらに、コロナ以前は石和温泉の旅館、ホテルなど約30か所を会場に石和温泉の恒例行事として定着しつつあった「ザ・いさわ JAZZ」のジャズのイベントがなくなってしまった。このように、観光客の方が地元の人と交流する機会や地元の人同士が集まることのできるイベントが減少している。

(2) 当団体のメンバーが笛吹市在住の人にアンケート調査を行う「笛吹調査隊」という活動を通して、メンバー自身が地元について知らないこと（魅力・お店・人）が多いという現状が見えた。その結果より、地元の人でも地元について知らないのではないかと推測し、若者の視点から笛吹市の魅力を伝えることができるのではないかと考えた。

4. 目的

(1) 石和の旅館街のイベントを学生の力で盛り上げたい。地元の人（メンバー）と交流できる内容やジャズを演奏する機会をイベント内に盛り込み、「また来たい」「笛吹市良いな・好きだな」と思ってもらえるようなイベントを企画運営する。

(2) 地元の人にも観光客の人にも笛吹市についてもっと知って欲しい。石和のジャズ文化など笛吹市ならではの内容と学生ならではの視点から魅力を伝える。また、伝えるためにメンバー自身が笛吹市についてさらに知る機会にする。

5. 方法

当団体は毎月1回のミーティングを設け、メンバー間の交流を図ったり、次回のイベントに向けての準備を行ったりする。（図1）今回は主に大学生中心に話し合い、目的に沿った企画を考えた。

目的に対する活動として、1月中旬から2月中旬の毎週末、石和源泉足湯広場で開催されている「ナイトマーケット」にて学生団体 SHINE による特別企画【ISAWA NIGHT WALK】を開催させていただくこと

学生団体 SHINE [山梨大学・山梨学院大学・大月短期大学・駿台甲府高校・笛吹高校]

奈良 千尋、矢野 郁穂（山梨大学）中澤 孝太郎（山梨学院大学）金子 文美（大月短期大学）丸山 奈々巴（駿台甲府高校）奈良 紘菜、遠藤 優里奈、塩島 桜音、楯 にちか（笛吹高校）



図1. ミーティングの様子

に決定した。（図2）

【ISAWA NIGHT WALK】では、メンバーがガイド役として笛吹市のジャズ文化や魅力について、イベントに参加して下さった地元の方や観光客の方に紹介する手法を取り、自分のまちの魅力を伝えること、人との繋がりを持つことを目指した。さらに、新型コロナウイルス感染拡大の影響でなくなってしまった「ザ・いさわ JAZZ」を復活させるべく、JAZZ の生演奏ができる機会を提供した。

6. 活動内容

～実施概要～

石和源泉足湯ひろばで行われるナイトマーケットの特別企画として当団体が企画・運営する【ISAWA NIGHT WALK】を2/11（土曜日）と2/12（日曜日）の2日間開催。（図3）※イベントのプレとして2/5（日）にふえふきガイドのみ実施。



図2. ナイトマーケットのチラシ

学生の力で笛吹市を輝かせたい！ 盛り上げたい！

～ISAWA NIGHT WALK ～



図3. 当イベントのチラシ

(1) ふえふきガイド

1月から2月にかけて、歩いて楽しめる「ILLUMINATION2022」を笛吹市の観光商工課が手掛け、開催していた。桜の木173本にLED55万球を使用し、石和源泉足湯ひろばからイルミネーションで明るくなったさくら温泉通りウッドデッキ会場までの約10分間（図4）を笛吹市や石和のまちについてお客さんと交流しながら笛吹市の魅力や石和のジャズ文化について伝える。（図5、6）ガイドの中身は、運営メンバーで地



図4. 会場図



図5. ふえふきガイド



元について学び、学生ならではの視点で作成。内容は以下に記載。

内容：ナイトマーケットの概要・さくら温泉通りのイルミネーション・石和のまちや石和温泉の歴史・石和のジャズ文化・果物やワインなどの特産品・景観・観光地

(2) ジャズの生演奏の機会を提供

石和源泉足湯ひろばでの音楽イベントは、ジャズが盛んだった頃、観光客の方だけでなく地元の人が集まる機会となっていた。コロナ禍でなくなってしまった「ザ・いさわ JAZZ」などの音楽イベント復活させることで、観光客の方だけでなく地元の方が集える場所をつくりたい。また、音楽の力で石和の旅館街に賑わいを取り戻したい。そのような想いから山梨大学ジャズ研究会のメンバーにジャズの生演奏を依頼した。演奏が聞こえたから出向いてみたという地元の方や旅館に泊まっている観光客の方が集まり、会場に賑わいをもたらした。（図7）

学生団体 SHINE [山梨大学・山梨学院大学・大月短期大学・駿台甲府高校・笛吹高校]



図7. ジャズの生演奏～会場の様子～

(3) 笛吹市の魅力を伝えるフリーペーパー配布

当団体は2022年7月に山梨県立文学館にて行われた「文芸雑誌からZINEへ」という特別展のZINEフェスティバルにて笛吹市のおすすめのお店を紹介するフリーペーパー「ふえふきおすすめおみせ vol. 1」を発行した。（図8）

「ふえふきおすすめおみせ vol. 1」は、当団体に所属するメンバーが2～3人で笛吹市のおすすめのお店を取材し、1枚の記事にまとめたもの。おすすめするお店のコンセプトや想いを知り、もっと他のお店について知りたくなった・取材したお店を地元に住む方々にもっと紹介したいというメンバーの率直な感想や、取材したお店の方から直接電話を頂いたり、地域で頑張る学生を応援したいとメッセージを頂いたり、メンバーもお店もフリーペーパーを手にしてくださったお客さんも笑顔になれた企画であった。このフリーペーパーを（1）ふえふきガイドに参加してくださったお客さんに紙媒体、あるいはデータで配布した。



図8. フリーペーパー

学生の力で笛吹市を輝かせたい！ 盛り上げたい！

～ISAWA NIGHT WALK ～

(4) ささやかなプレゼント配布

さくら温泉通りウッドデッキ会場にて当イベント実施日のみキッチンカーやワインスタンドで使用できる100円引き券を会場にいるお客さんや(1)ふえふきガイドに参加して下さったお客さんに配布した。

通常は、メイン会場である石和源泉足湯ひろばからサブ会場であるさくら温泉通りウッドデッキ会場まで歩いてくる方は少なく、会場によって偏りが大きかった。しかし、このプレゼント配布を行ったことで通常よりも多くの方がさくら温泉通りウッドデッキ会場に訪れて下さった。

7. 結果

石和源泉足湯ひろばからさくら温泉通りウッドデッキ会場へ笛吹市について語りながら27人案内したり、会場にいたお客さんと交流したりすることができた。【ISAWA NIGHT WALK】でふえふきガイドやジャズの生演奏を実施したこと、「ふえふきおすすめおみせ vol. 1」というフリーペーパーをお届けすることを通して、笛吹市の魅力やジャズ文化についてお客さんに

も知ってもらうことができた。そして、当団体のメンバー自身がこの企画を通して、笛吹市を知り、地元への想いを深めることができたと思う。(図9,10) イベント終了後、(1)ふえふきガイドに参加して下さった方にアンケートをお願いした。以下にそのアンケート結果とメンバーによる振り返りを抜粋して掲載する。

～参加者からの感想～

- ・よかった！すごく丁寧に教えて下さいました。
- ・街のために学生団体が頑張っているのは素晴らしい
- ・学生さんが案内してくれる斬新なスタイルで良かったです。
- ・イベントの背景など色々お話が聞けて興味深かったです。
- ・いろいろお話を聞きながらなので、歩いている時間が短く感じました！
- ・こたつでジャズも良かったです。イベントがなければ行く機会がなかった場所なので、ちょっとディープな石和を知れた気がします。

学生団体 SHINE [山梨大学・山梨学院大学・大月短期大学・駿台甲府高校・笛吹高校]

～メンバーによる振り返り～

- ・あまり上手くガイドが出来なかったので笛吹愛を語るトーク力とプレゼン力を磨きたい。
- ・初めてのガイドで緊張したけど色々な方と話せてとても楽しかった。
- ・笛吹市外、他県、外国からも多くの人達が来てくれることに対してとても嬉しく感じた。
- ・笛吹市やジャズ文化を知ってもらうことができ、人と人の交流が生まれた。
- ・地元の人にイベントやSHINEのことを話したら応援して下さり、心が熱くなった。
- ・私もガイドメンバーもお客さんも主催者もみんなが嬉しそうな顔をしていて嬉しかった。

～山梨県内各メディアからの評価～

《各メディア》

- ・エフエム八ヶ岳
「山梨トップファン～地元をもっと楽しく～
(2022/04/30)」
- ・山梨日日新聞
「笛吹活性化へ 学生団体発足 (2022/11/09)」

8. おわりに

明治大学の小田切徳美教授によれば、日本の農山村は人、土地、ムラという3つの空洞化に直面している。だが、その根底にあるのは「誇りの空洞化」だという。活動を通して、イベントの主催者の方と関わりながら気づいたことは、「笛吹市を盛り上げたい」という一心であるということだ。生まれ育ったまちとは切っても切れない関係にある。

これから先長く関わることになるまちがもっと魅力あふれ、誇りを持てるまちになることを望む。今回の企画のようにメンバー自身がさらに笛吹市のことを知り、お客さんに魅力を伝える、応援してくれる人、笛吹市というまちを好きになってくれる人が増える。このようなサイクルが回り、笛吹市を輝くまちにできれば良いなと思い描いている。

そして、学生団体SHINEは、学生の微力ながらも、地元への強い想いによって、活性化やまちづくりへ貢献し、笛吹市がさらに輝きを増すような活動を続けていく。



図9. 左からお客さん・地元のスタッフ・SHINEのメンバー



図10. イベント最終日のガイドメンバー

審査員からのアドバイス・メッセージ

審査は、成果発表、活動過程について、
①問題意識（地域課題の明確化、活動目的、問題解決の方法など）
②実践力（計画に沿った実践力、地域の人との協働力、課題発生時の改善力など）
③地域貢献力（目標に沿った実績、地域貢献力、今後の持続可能性など）
④プレゼンテーション力（表現力、構成力、コミュニケーション力など）
の4つの観点によって行われた。

成長に触れて



株式会社アルプス代表取締役社長
金丸 滋（審査委員長）

まずは、参加された学生の皆様、お疲れ様でした。様々なアイデア、活動の報告をお聞きして、大変刺激を受けました。本事業で審査員をさせて頂いたのは2度目でした。

前回審査させて頂いた時と同じグループの発表も複数ありました。学生は入れ替わっていますが、同じグループということで、同じような取り組みなのかと思いながら聞いておりました。しかしながら、取り組みの内容は前回から、更にパワーアップし、新たな試みが満載で、大変感銘を受けました。

発表されたそれぞれの学生の皆様が、本プログラムに真剣に取り組み、悩み、喜び、向き合った事が伝わってきて、私自身、まだまだ負けていられないと、力を頂きました。次回以降に関わる方々にも、この熱を感じて頂き、繋げて行くことで、ここから山梨が元気になっていければ良いと思います。

関わった皆様、お疲れ様でした。そして、ありがとうございました。また、どこかでお会いしましょう。

山梨の若者は宝物



山梨県観光文化部観光文化政策課長
樋田 洋樹

この度は、学生イニシアティブ事業の成果発表会において審査員という貴重な機会を頂きありがとうございました。

コロナ禍でありながらも、学生自らが若者ならではの視点やユニークな発想で、住民や関係者と連携しながら地域の活性化、観光振興、社会問題など様々な課題に取り組み、その解決に当たっては、目的とゴールを明確に描きながら、自らのこととしてチャレンジしている姿勢に感銘を受けました。

今の時勢、コロナを理由に無理とか、最初からできない理由を探すこともできると思いますが、課題に正面から向き合いどうすればできるか可能性を探究し行動されたことに惜しみない賞賛を送ります。

取り組む過程においては、思い通りにならなかったり、失敗したことも多々あったと思いますが、自分達としての最適解を見つけるまでたどり着いたこと自体が大きな成果であり、これらの経験は社会に出てからもきっと役立つに違いありません。今回の発表により、山梨のことをこんなにも真剣に考えている若者がいることがわかり山梨の将来は希望に満ちていると改めて感じました。

なにごとにも始めることが大切！



NPO 法人えがおつなげて代表理事
曽根原 久司

私は、まずなにごとにも始めることが大切だと思っています。一見当たり前のことのようにですが、実はなかなか難しいことです。思っていたけど自信がないから始めなかった、周りの目が気になって何もできなかった等々、いろいろな言い訳を自分に言って、始めないことが多いからです。このことは、私自身も忘れないように心掛けていることです。思っているだけでは何も始まらないですし、状況は何も変わらないからですね。そしていざ、何かを行動として始めれば、当然課題も出てきますし、そのことに悩むこともでてくるでしょう。しかし、それを苦勞しながらもクリアしていくと、少しずつ次のステップが見えてくるものですし、自分自身の真の力になってくるものです。

今回のみなさんの活動は、とても貴重な経験になったと思います。大人でも取り組むことが困難なテーマに向き合いチャレンジして、活動の計画を練り、実行したからです。この活動を通じて、さまざまな気づきや学びがあったと思います。このような機会はなかなか得られないものです。そのことに拍手を送りたいと思います。そして、その気づきや学びを生かして、これからも学生生活や社会人での活動に有益につなげていってほしいと思います。

夢に満ちた未来をお持ちの皆様へ



萌木の村株式会社代表取締役村長
船木 上次

若い皆様のメリットは、残りの人生の“持ち時間”がたくさんあるということです。これは宝物です。時間に限りがあるのですから、自分らしい生き方をすることが“人生の金メダリスト”になるための絶対条件です。そのためにはあらゆることに果敢に挑戦して、見て、聞いて、行動して、成功して、失敗して、色々な感情を味わってみるということです。現代は自ら考え、行動しなくても生きていかれる時代です。（皆様なりに大変なことがあるでしょうが、明日の食べ物に困ることはないですよ）私たちの若い時代とは全く環境が違います。

現代は物の豊かさ・便利さはあっても、心の豊かさに繋がりません。これから全く違う社会が始まります。その新しい時代の新しい価値を作るために皆さんの挑戦は必ず生かされるはずですよ。どんなことでも自分の明日に繋がります。成功したことはもちろん、失敗すること、自分では認められないこと、人に馬鹿にされたこと、努力が報われないこと、全てが過去の出来事になるのです。10年後に「あの時あの失敗があったからこそ今がある」と言えるように、いつでも未来に夢を持って行動してください。

2022年度 学生イニシアティブ事業

成果発表会

2023年 2月18日(土) 12:30開場 13:00開始
山梨大学(甲府西キャンパス)M号館M-12教室
〒400-8510 山梨県 甲府市 武田4-4-37

[審査員]

- 金丸 滋
(株式会社アルプス 代表取締役社長)
- 曾根原 久司
(特定非営利活動法人 えがおつながて 代表理事)
- 樋田 洋樹
(山梨県観光文化政策課 課長)
- 船木 上次
(萌木の村株式会社 代表取締役村長)
- 米山 けい子
(認定NPO法人 フードバンク山梨 理事長)

[主催]

特定非営利活動法人
大学コンソーシアムやまなし
The Consortium of Universities in Yamanashi
地域社会活動支援事業委員会

山梨県内12大学からなる大学コンソーシアムやまなしでは、学生が主体者となって地域課題について取り組む学生イニシアティブ事業を募集し、今年度は11団体が選定されました。今回は、11団体が実践してきたプロジェクト活動の成果発表会を開催します。

新型コロナウイルス感染防止対策のため入場制限を
する場合があります。(マスクの着用をお願いします)



参加
無料

観覧ご希望の方は
こちらから
お申し込みください

[スケジュール]

13:00～ | 11団体による成果発表会

- ① ほうとうを世界へ発信〈山梨学院大学他〉
- ② ささみ組〈山梨英和大学〉
- ③ つるっ子プロジェクト実行委員会〈都留文科大学〉
- ④ 大学生の働き方＝生き方の選択肢を広げて生きる
「場」としての富士吉田の魅力を伝える〈山梨大学〉
- ⑤ 難民支援サークル Good Samaritans〈山梨英和大学〉
- ⑥ “つきたん苺”コンテナ・プロジェクト〈大月短期大学〉
- ⑦ PLAYFULNESS〈山梨大学他〉
- ⑧ 山梨英和大学附属図書館学生協働サークルLIKE
“本のマルシェ”実行委員会〈山梨英和大学〉
- ⑨ 甲府の魅力をギュッとMAP〈山梨学院大学〉
- ⑩ 身延山における和紙研究プロジェクト〈身延山大学〉
- ⑪ 学生団体SHINE(シャイン)〈山梨大学他〉

17:00～ | 表彰式

●お問い合わせ先

特定非営利活動法人
大学コンソーシアムやまなし事務局
〒400-8510山梨県 甲府市 武田4-4-37 山梨大学B-1号館328
E-mail: info@ucon-yamanashi.jp

イベント情報は
こちら



地域社会活動支援事業委員会

池山 洋子 (山梨大学)	新藤 啓子 (放送大学山梨学習センター)	望月 宗一郎 (健康科学大学)
小幡 園子 (帝京科学大学)	鈴木 耕太 (山梨学院短期大学)	山田 勝美 (山梨県立大学)
帯金 久 (山梨学院大学)	内藤 敦之 (大月短期大学)	渡辺 大 (山梨県観光文化部)
久保田 昌宏 (都留文科大学)	服部 智行 (身延山大学)	栗田 真司 (大学コンソーシアムやまなし)
清水 健 (帝京学園短期大学)	堀内 均 (山梨英和大学)	八巻 久美子 (大学コンソーシアムやまなし)



生涯学習としての地域課題解決

令和4年度 学生イニシアティブ事業報告書
2023年3月31日発行

[編集・発行]
特定非営利活動法人 大学コンソーシアムやまなし
〒400-8510 山梨県 甲府市 武田4-4-37 山梨大学B-1号館328
E-mail: info@ucon-yamanashi.jp
URL: http://ucon-yamanashi.jp/

[制作]
三井デザイン事務所

※本事業は、「持続可能な開発目標(SDGs)」の達成を目指す支援事業です。





特定非営利活動法人

大学コンソーシアムやまなし

The Consortium of Universities in Yamanashi

特定非営利活動法人 大学コンソーシアムやまなし

〒400-8510 山梨県甲府市武田4-4-37 山梨大学B-1号館328

E-mail: info@ucon-yamanashi.jp URL: <http://www.ucon-yamanashi.jp>